



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中世日本列島北部～サハリンにおける民族の形成過程の解明：市場経済圏拡大の観点から
Author(s)	天野, 哲也
Description	H19年度文部科学省特別研究促進費研究成果公開事業シンポジウム：北海道大学総合博物館土曜市民セミナー/道民カレッジ. 2008年2月9日（土）. 北海道大学総合博物館1F 知の交流コーナー, 札幌市.
Issue Date	2008
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/48124
Type	book
File Information	Symposium 2008.pdf

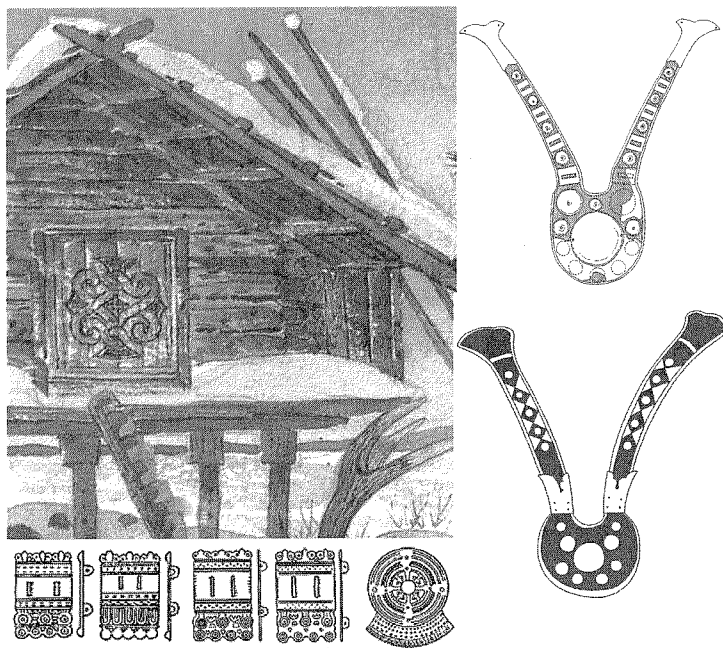


北海道大学総合博物館土曜市民セミナー／道民カレッジ
H19 年度文部科学省特別研究促進費研究成果公開事業シンポジウム

中世日本列島北部～サハリンにおける 民族の形成過程の解明

—市場経済圏拡大の観点から—

(研究代表者 北海道大学 天野哲也)



2008 年 2 月 9 日 (土)
北海道大学総合博物館 1F
知の交流コーナー

中世日本列島北部～サハリンにおける民族の形成過程の解明

―市場経済圏拡大の観点から―

(研究代表者 北海道大学 天野哲也)

平成 15 (2003) 年度にスタートした文部科学省科学研究費補助金による本研究を終了するにあたり、5 年間のその研究成果と残された課題を確認するためのシンポジウムを開催する。

本研究の目的は、アイヌ民族・文化の形成を東アジア的枠組み、とくに列島北部～サハリン～アムール下流域における中世社会・民族形成の過程の中で解明する点にあった。これを進めるためには、関連する様々な分野の研究者による総合的な共同研究が求められる。そこで考古学、歴史学、遺伝学などを専門とする研究分担者 5 名、研究協力者 6 名の体制を組み、これが中心になって本研究を推進し、その成果はすでに 2 回のシンポジウムと論集、学会発表、研究論文などで公表してきた。

以下、本研究で得られた成果の一端を紹介する。平安末ころ東北地方北部における蝦夷から奥羽アイヌへの転換が起き、14 世紀日本海交易ネットワークの伸張により北海道で鉄鍋など内地産品の普及の条件が整い、交易活動を基盤にしたアイヌ文化が明確な形で姿を現す。このアイヌ集団には北ユーラシア集団に特徴的な遺伝的形質が流れ込んでおり、それはオホーツク集団を経由した可能性が高い。

ここに挙げきれない研究成果も多く、それらを含めてシンポジウムで提示し、さらに掘り下げられることを期待する。

平成 20 年 2 月 9 日

北海道大学総合博物館
天野哲也

北海道大学総合博物館シンポジウム／土曜市民セミナー／道民カレッジ
文部科学省特別研究促進費研究成果公開事業シンポジウム

中世日本列島北部～サハリンにおける民族の形成過程の解明 —市場経済圏拡大の観点から—

(研究代表者 北海道大学 天野哲也)

2008年2月9日(土)
北海道大学総合博物館
1F 知の交流コーナー



- 9:00 開場・受付
- 9:30 - 9:40 挨拶・趣旨説明
- 9:40 - 11:10 記念講演
「近年の中国における靺鞨—女真遺跡の主要考古学調査と研究」 1
(吉林大学・王 培新)(通訳 専修大学・三宅俊彦)
- 11:20 - 11:55 「遺伝的特徴から見たオホーツク集団と現代北東アジア集団との関係」 15
(北海道大学 増田隆一・佐藤丈寛)
- 11:55 - 13:00 昼食
- 以下3本は 土曜市民セミナー／道民カレッジを兼ねる
- 13:00 - 13:35 「オホーツク集団と続縄文集団の交流」 20
(北海道大学 天野哲也)
- 13:35 - 14:10 「厚真町幌内地区の発掘調査から解ってきたこと」 24
(厚真町教育委員会 小野哲也)
- 14:10 - 14:45 「アイヌの宝器・鍬形の成立と変遷」 27
(旭川博物館 瀬川拓郎)
- 14:45 - 15:00 小休止

15:00 – 15:35	「要害遺跡の研究」 (北海道開拓記念館 右代啓視)	32
15:35 – 16:10	「擦文文化～アイヌ文化の木製品について」 (札幌市埋蔵文化財センター 藤井誠二)	37
16:10 – 16:45	「鍋と玉」 (北海道埋蔵文化財センター 越田賢一郎)	47
16:45 – 17:20	「東北北部におけるアイヌ化を考える」 (北海道大学 小野裕子)	52

17:20 – 18:00 討論・閉会の辞



H15 年度－H18 年度 文部科学省科学研究費補助金特定領域研究 (2)

(領域代表 中央大学 前川 要)『中世考古学の総合的研究 一学融合を目指した新領域創生一』新領域創生部門 A-01 「中世日本列島北部からサハリンにおける民族の形成過程の解明－市場経済圏拡大の観点から」(研究代表者 北海道大学 天野哲也)

H19 年度 特別研究促進費

(中世日本列島北部－サハリンにおける民族の形成過程の解明－市場経済圏拡大の観点から)(研究代表者 北海道大学 天野哲也)

研究分担者

深澤百合子 (東北大学大学院国際文化研究科)
増田隆一 (北海道大学創成科学研究機構)
右代啓視 (北海道開拓記念館)
浪川健治 (筑波大学大学院人文社会科学研究科)

研究協力者

越田賢一郎 (北海道埋蔵文化財センター)
瀬川拓郎 (旭川市博物館)
藤井誠二 (札幌市埋蔵文化財センター)
小野哲也 (厚真町教育委員会)
鈴木 信 (北海道埋蔵文化財センター)
和田英昭 (網走郷土館)
三宅俊彦 (専修大学文学部)
小野裕子 (北海道大学総合博物館)

近年中国靺鞨—女真遗迹的主要考古发掘与研究

王 培新 (Wang Peixin) (吉林大学边疆考古研究中心)

壹、考古调查

一、黑龙江沿岸的考古调查 (图 1)

1、**同仁遗址**：位于黑龙江省同仁县黑龙江中游右岸的一级台地，遗址面积约 24000 m²。1973 年发掘 320 m²，发现 7～13 世纪的房址 3 座、窖穴 7 座。同仁遗址文化遗存可以划分为两期，第一期又可区别为早、晚两段。同仁遗址一期的早段，以 3 号房址为代表，年代为 7 世纪(图 2)。同仁遗址一期的晚段，以 2 号房址为代表，年代为 10 世纪。同仁遗址二期以 1 号房址为代表，年代为 12～13 世纪(图 3)。一期早段，房屋为半地穴式，陶器中盘口罐、斜口器具有特色。一期晚段，房屋建筑方法与一期早段相似，典型陶器是夹砂红褐陶的直口筒腹罐。二期的房址是地面建筑，屋内有曲尺形火炕。典型陶器有灰色方格纹罐、红褐色陶罐、壶和甗等。

2、**蜿蜒河遗址**：位于黑龙江省绥滨县松花江与黑龙江合流处西方的河岸台地上，遗址面积约 7500 m²。1974 年发掘 203 m²。蜿蜒河遗址共发掘二座房址，上层房址(F1)和下层房址(F2)。两座房址不但年代有早、晚差别，而且分属两种不同的考古学文化。F1 为地上建筑，平面呈圆角长方形，室内有两个灶和火炕设施。F1 被现代沟渠破坏，从残存陶片的质地和纹饰比较，F1 与同仁遗址二期遗存文化面貌相同，二者的年代接近。

3、**绥滨三号墓地**：位于黑龙江省绥滨县黑龙江中游右岸的沿江沙丘地带，1975 年，发掘墓葬 14 座。墓葬排列有序，各墓葬间距 1—2 米。墓葬形制为竖穴式土坑，皆无棺槨，墓圻经过火烧，应是土坑火葬墓。绥滨三号墓地继承了黑水靺鞨的葬制，并受到辽代契丹人的影响，墓地可能是辽中期以后(公元 10 世纪末～11 世纪前半期)五国部女真人的遗存。

4、**特罗依茨基(Trotsky)墓地**：位于黑龙江中游西部的结雅—布列亚平原，属于俄罗斯阿穆尔州伊万诺夫卡区。1967 年苏联科学院西伯利亚分院远东考古队发现该墓地并先后进行 5 次发掘。2004 年吉林大学边疆考古研究中心与俄罗斯科学院西伯利亚分院考古与民族研究所合作，再次对该墓地发掘 200 平方米。

取得以下收获：通过测绘确定该墓地分布有百余座靺鞨墓葬；墓葬为土坑竖穴式，普遍存在火烧残迹；随葬品贫乏，有的墓未见随葬品；综合考虑墓地年代应在 8-9 世纪。

二、牡丹江下游地区的考古调查 (图 4)

1、**河口与振兴遗址**：河口遗址位于黑龙江省海林市三道河子乡牡丹江左岸二级台地上，隔牡丹江与位于右岸的振兴遗址遥相对应。1994～1995 年，河口遗址发掘 1900 m²，振兴遗址发掘 1160 m²。河口与振兴遗址第 4 期、第 5 期遗存，属靺鞨—女真时期。第四期遗存的典型陶器是口沿下有一周锯齿形附加堆纹的“靺鞨罐”，属于粟末靺鞨文化，年代应在渤海国

建立之前的靺鞨时期～渤海国初期（图5）。第五期遗存的文化面貌与渤海国遗存具有较多一致性，年代相当于渤海国时期（图6）。

2、细鳞河遗址：位于黑龙江省海林市东北约67.5公里牡丹江左岸，牡丹江支流细鳞河流经遗址南侧。遗址面积约10000 m²。1996年，黑龙江省考古研究所与吉林大学考古学系联合对细鳞河遗址发掘800 m²，发现房址7座、灰坑40余个，出土了陶器、铁器、铜器、骨器及兽骨等遗物。细鳞河遗址为一处渤海国时期的聚落遗址，出土遗物的文化特征与渤海国后期遗物接近，年代大体相当于公元9世纪。出土的大量兽骨、骨角质制品、渔网坠、铁镞、骨镞等遗物表明，渔猎在细鳞河遗址中占有重要位置。

三、牡丹江上中游地区的考古调查（图7）

1、虹鳟鱼场墓地：位于黑龙江省安宁市渤海镇虹鳟鱼场北部的两座沙丘上，墓地东距渤海国上京龙泉府故址6.5公里。1992～1995年，黑龙江省考古研究所发掘1万m²。发现靺鞨～渤海时期墓葬323座，祭坛7座。墓葬分为石墓、砖墓、砖石混筑墓三大类，以石墓最多，大部为多人二次葬。石墓中有石室墓、石圪墓、石棺墓。石室墓墓室有铲形、刀形、长方形和双室。砖室墓墓砖多红色，有三角形、梯形、长方形。墓葬填土和封土中发现了多量马齿，可能是用马祭祀遗存。出土遗物包括生产及生活用具、兵器、马具、装饰品等种类。其中陶器占多数，其他质料的器物有铜器、铁器、玉器、金银器、玛瑙饰品等。

2、六顶山墓地：六顶山位于吉林省敦化市南5公里，山体自西而东有六个相连的山峰。墓葬分布在山麓下部两个相邻的山坳内，形成东、西两个墓区。1964年，中国科学院考古研究所东北考古工作队在六顶山墓地发掘20座墓葬，墓葬形制主要是石圪墓和石室墓。敦化一带为渤海国早期都城所在地，位于第一墓区（西部墓区）的“贞惠公主墓”出有墓碑，可确知其埋葬年代为公元780年。发掘的20座墓葬，从墓葬形制和随葬器物观察，基本上应属于同一时期。出土的多种随葬器物，以及铺盖在封土上的板瓦、瓦当，与贞惠公主墓出土的同类遗物相同，墓葬的年代为公元8世纪，属于渤海国的前期。

3、敖东城遗址：位于吉林省敦化市区的东南部，城址南临牡丹江。敖东城城墙破坏严重，只有外城西城墙的北段有遗迹保留。2002年，在城址西北部发掘310 m²，2003年解剖了外城西墙，发现房址3座（图8）、灰坑窖穴7个、沟1条。出土陶器、铁器、铜器、铜钱、骨角器、动物骨骼等大量遗物。敖东城遗址出土遗物与东北地区金代遗迹出土器物相同，出土的北宋及金代钱币表明敖东城遗址的年代为金代晚期。

4、永胜建筑址（图9）：位于吉林省敦化市西南约8千米牡丹江左岸台地之上，北约3千米即是六顶山渤海贵族墓地。以往的调查认为：永胜遗址存在5座相对集中的大型建筑址，周围散布大量的砖、瓦、瓦当、鸱尾等建筑材料，建筑等级较高，推测可能是渤海国早期都城遗址。2002年，发掘950 m²，发现建筑台基1座、房址2座、灰坑11个、沟1条，出土建筑材料、陶瓷器、铁器、铜器、铜钱、骨角器等大量遗物。永胜遗址1号建筑基址出土遗物

明显具有金代器物特征，出土钱币以北宋货币为主，亦有金代钱币“正隆元宝”、“大定通宝”，永胜遗址1号建筑基址年代为金代晚期。永胜遗址1号建筑基址是一座大型组合式地上建筑，在长方形土筑台基之上建有三座东西并列结构相同的房屋。出土瓦当均为猴面纹，此外还出土陶质兽舌、陶塑像残片及莲花纹石柱础，推测该建筑址应与佛教关系密切。

贰、研究成果

一、黑龙江中地区游靺鞨文化研究

黑龙江中游地区靺鞨文化遗存可以划分为两个区域，即三江平原区和结雅—布列亚平原区。

三江平原区的靺鞨文化遗存，可以黑龙江为界划分为江南亚区和江北亚区。江南亚区靺鞨文化的早期是同仁一期文化。晚期是同仁二期文化（图10）。江北亚区的靺鞨文化，早期包括俄罗斯犹太自治州的奈伊费尔德墓地、布拉戈斯洛夫II号遗址、科奇科瓦特卡墓地等。晚期遗存目前发现的很少（图11）。

结雅—布列亚平原区的靺鞨文化遗存包括特罗伊茨基墓地、塔拉坎河口遗址、沙普卡山墓地、诺沃彼得罗夫卡墓地、奥西诺湖遗址、格梁兹努什卡遗址等。以上遗存可以分为早晚两期。早期有沙普卡山墓地、塔拉坎河口遗址F2。晚期以特罗伊茨基墓地为代表（图12）。

结雅—布列亚平原区与三江平原区靺鞨文化的陶器存在一定程度的差别，前者没有后者江南亚区的典型器物盘口鼓腹罐，也不见江北亚区奈伊费尔德墓地的高领鼓肩矮体罐。

通过2004年的考古发掘认识到，特罗伊茨基墓地的年代应在8—9世纪，出土陶器是在黑龙江中游奈伊费尔德类型陶器基础上演变而来，在发展过程中接受了以查里巴为代表的松花江流域粟末靺鞨文化影响，形成了具有地域性特征的特罗伊茨基类型（图13～15）。

靺鞨黑水部以黑水得名，隋唐时期的“黑水”是指现在的黑龙江中下游。对照文献记载，三江平原区靺鞨遗存的族属是黑水部。黑水部江南亚区墓葬随葬陶器比江北亚区多，反映江南亚区比江北亚区经济富足，江南亚区团结墓地还发现1件错金龙纹铁刀，这为探索黑水靺鞨的首部所在地提供了线索。

结雅—布列亚平原区在三江平原区西北。根据《新唐书》“黑水西北又有思慕部”的记载推测，以沙普卡山墓地为代表的结雅—布列亚平原区的靺鞨遗存族属应该是思慕部。

二、靺鞨—女真系铜带饰的分类与编年

靺鞨—女真系铜带饰平面形状有长方形和圆形两种，长方形铜带饰的数量占绝对多数。按表面纹饰的主体形式，可将长方形铜带饰划分为五型。圆形铜带饰根据平面形状可分为二型。中国出土靺鞨—女真系铜带饰的流行时间大体上是在公元6—12世纪初。A型长方形铜带饰年代最早，流行于公元6—7世纪。A型长方形铜带饰首先出现在松花江中下游地区，这里是粟末靺鞨的主要分布区域，也是A型长方形铜带饰的主要流行区。B型长方形铜带饰的出现时间略晚于A型长方形铜带饰，流行年代约在公元7—8世纪。B型长方带饰首先出现在松花江中下游地区，流行于渤海国前期，分布范围为渤海国境内。C型长方形铜带饰存在两个亚型，Ca型和Cb型铜带饰共存，初始年代应在公元7世纪。C型长方形铜带饰目前只

见于松花江中下游地区。D、E型长方形铜带饰出土于黑龙江流域的靺鞨—女真遗迹中。D、E型长方形铜带饰有共存现象，两型铜带饰的年代基本相同，流行年代为公元10—11世纪。

靺鞨—女真系铜带饰的流行时期，可以划分为两个阶段。第一阶段相当于靺鞨—渤海时期，以长方形A、B、C型和圆形铜带饰为代表，6—9世纪主要流行于松花江和牡丹江流域（图16、17）。第二阶段相当于女真时期，年代为公元10—11世纪。以长方形D、E型为代表，主要流行于黑龙江流域（图18）。

从靺鞨—女真系铜带饰的类型、分布、年代等变化分析，流行于松花江和牡丹江流域的A、B、C型长方形铜带饰的谱系为粟末靺鞨—渤海系统，流行于黑龙江流域的D、E型长方形铜带饰的谱系属于黑水靺鞨—女真系统。

三、细鳞河遗址出土的动物骨骼及骨制品研究

1、动物种属鉴定

家畜包括：马、牛、狗、猪。野生动物包括：棕熊、狼、马鹿、狍。

2、动物骨骼表面痕迹观察

动物作用痕迹：啮齿类和肉食类两种动物的咬痕。

人工作用痕迹：切割痕、剔刮痕、砍痕、砸痕、削痕、磨痕。

3、骨质器物的制作

出土的骨质器物主要有镞、锥、铲、刀、纺轮、骨鱼、带扣等（图19）。观察到骨质器物的制作工序为：选料→截料→改料→雏形→定型（图20）。细鳞河遗址出土骨质工具有以下特点：原料以狍、马鹿角为主，很少用其他骨料；骨质器物种类较多，制作工艺成熟，精工制品需要多道加工工序；加工方法采用砍剁、刮削比较落后的技术。

4、畜养与狩猎的比例关系

根据动物骨骼的种属鉴定，细鳞河遗址被畜养的动物有猪、狗、牛、马，其中猪、狗骨骼个体数量最多。猎取的动物有熊、狼、狍、马鹿和鲶鱼等。其中狍和马鹿的个体数量最多，是当时人们的主要狩猎对象。

5、猪的死亡年龄和性别比例分析

根据个体死亡年龄统计，猪的死亡年龄可以分为两个年龄组。第一组为6—12个月，占总数的31%。第二组是12—24个月以上，占总数的69%。根据可鉴定性别标本的死亡年龄和性别比例分析，猪在未成年时部分雄性个体已被杀掉，而雌性个体全部保留，推测当时尚未掌握阉割技术。

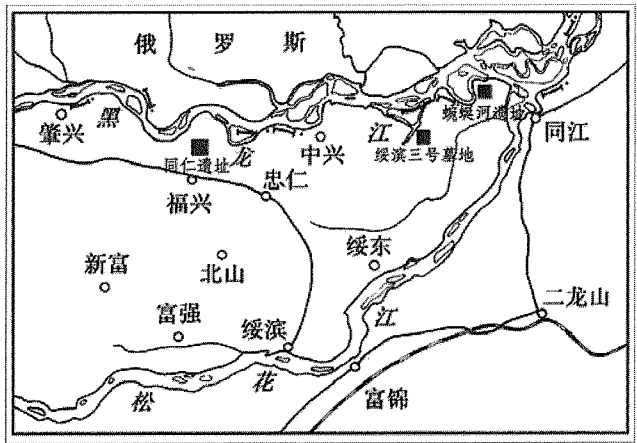


图 1、黑龙江沿岸遗迹位置示意图
(黑龙江沿岸の遺跡位置図)

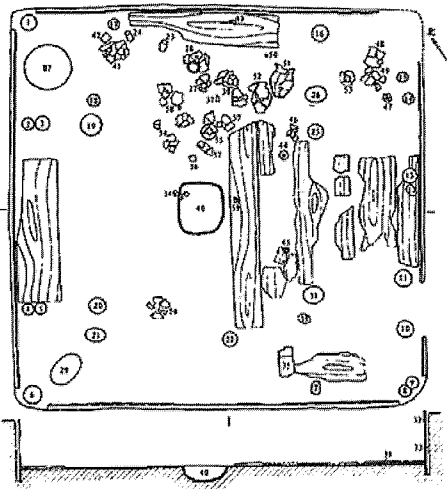


图 2、同仁 3 号房址
(同仁 3 号住居址)

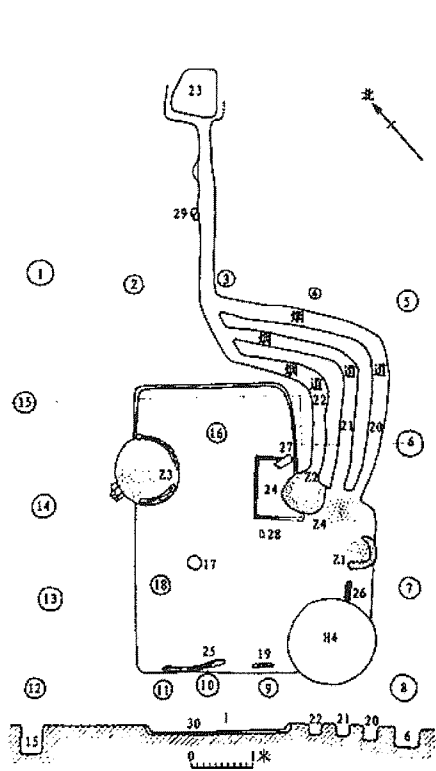


图 3、同仁 1 号房址
(同仁 1 号住居址)

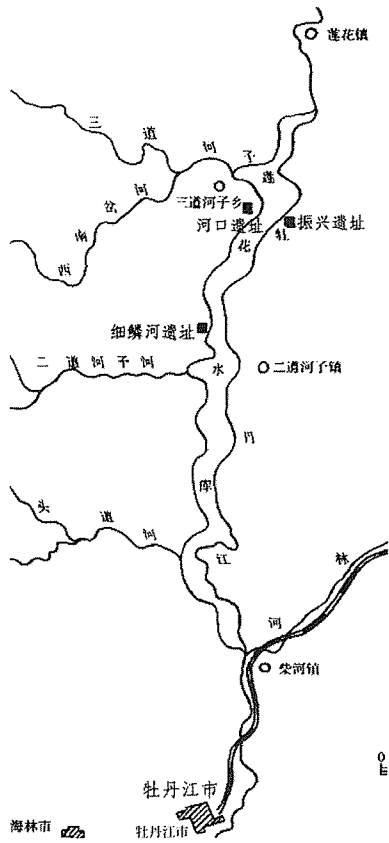


图 4、牡丹江下游地区遗迹位置示意图
(牡丹江下流地区の遺跡位置図)

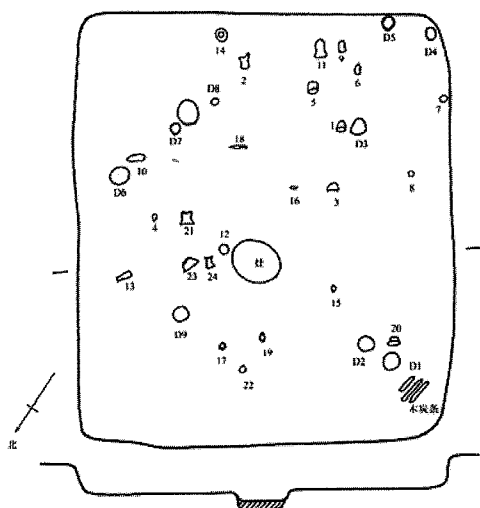


图 5、河口四期遗存房址
(河口第 4 期的住居址)

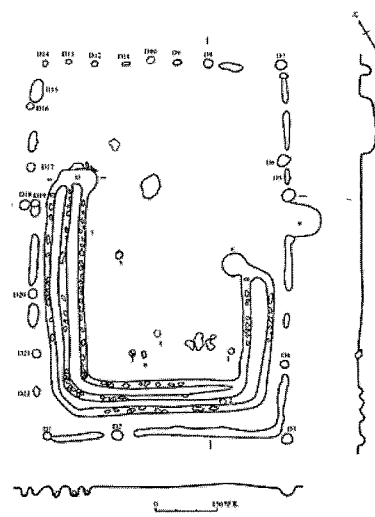


图 6、河口五期遗存房址
(河口第 5 期的住居址)



图 7、牡丹江上中游地区遗迹位置示意图
(牡丹江上・中流地区の遺跡位置図)

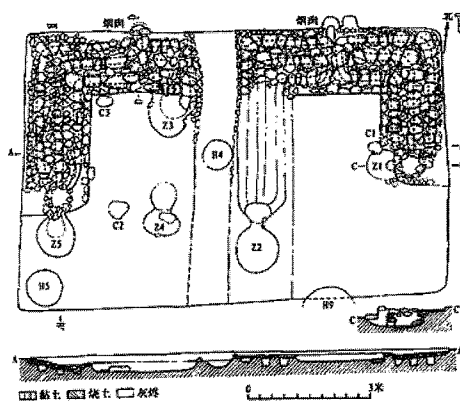


图 8、敖东城房址
(敖東城の住居址)

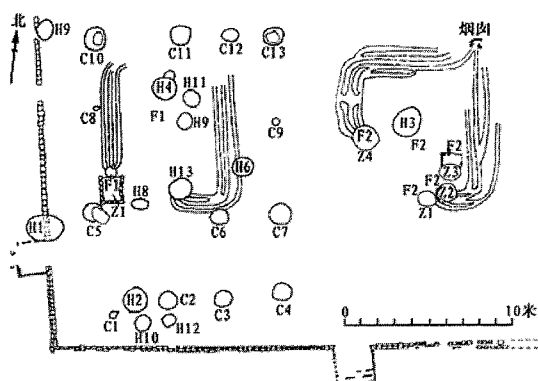


图 9、永胜建筑址
(永勝建築址)

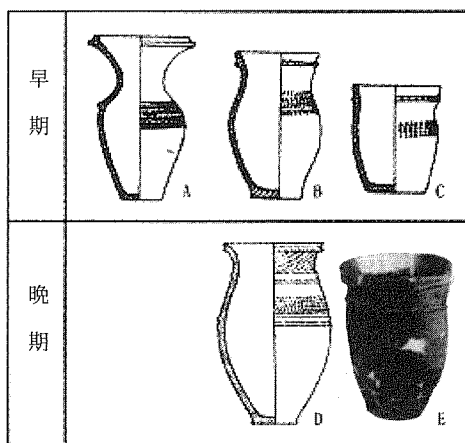


图 10、三江平原江南亚区分期
(三江平原江南亜区の時期区分)

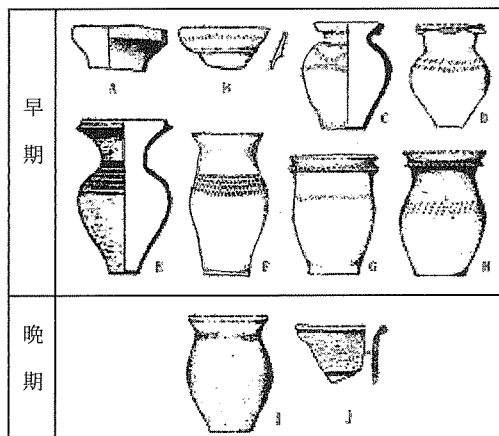


图 11、三江平原江北亚区分期
(三江平原江北亜区の時期区分)

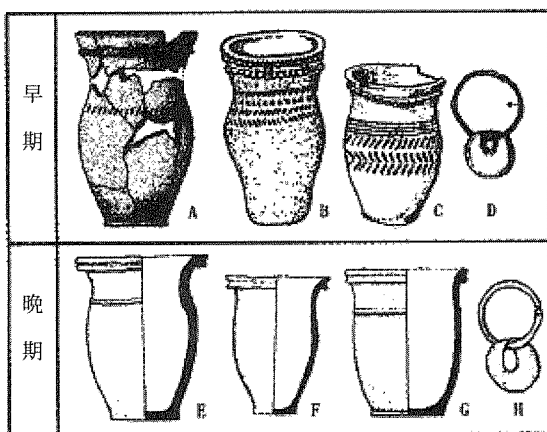


图 12、结雅—布列亚平原区分期
(ゼーヤ - プレーヤ平原区の時期区分)

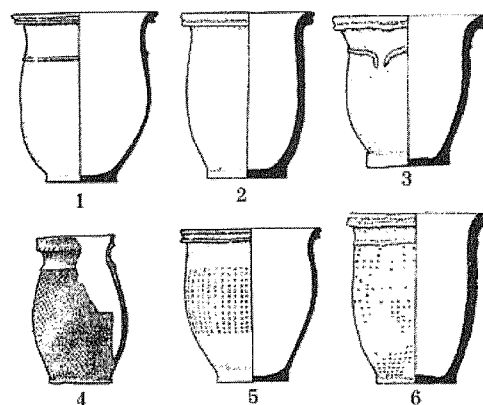


图 13、特罗依茨基出土陶器
(トロイツコエ出土の陶器)

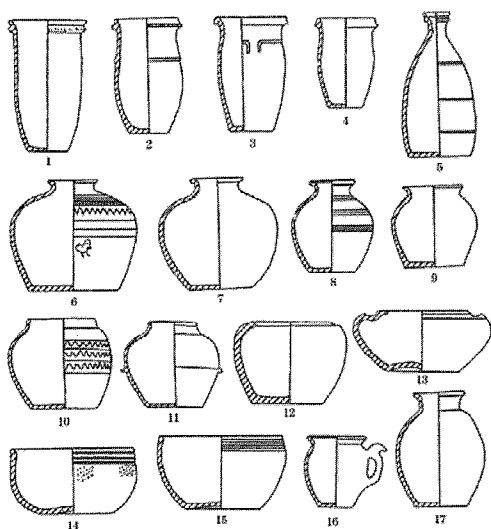


图 14、查里巴出土陶器
(查里巴出土の陶器)

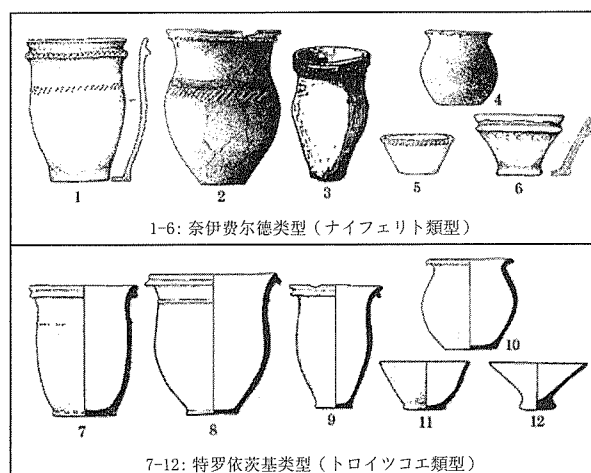


图 15、特罗依茨基陶器与奈伊费尔德类型陶器对比
(トロイツコエの陶器とナイフェリト類型の陶器の対比)

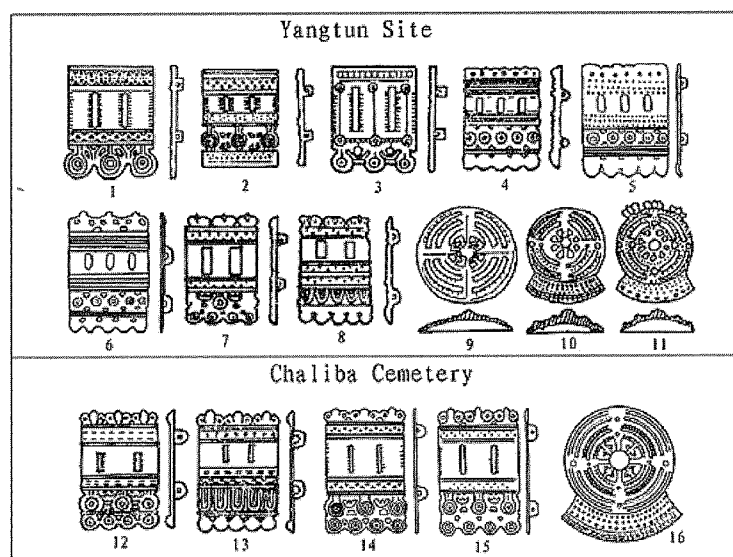


图 16、松花江流域出土铜带饰
(松花江流域出土の銅帶飾)

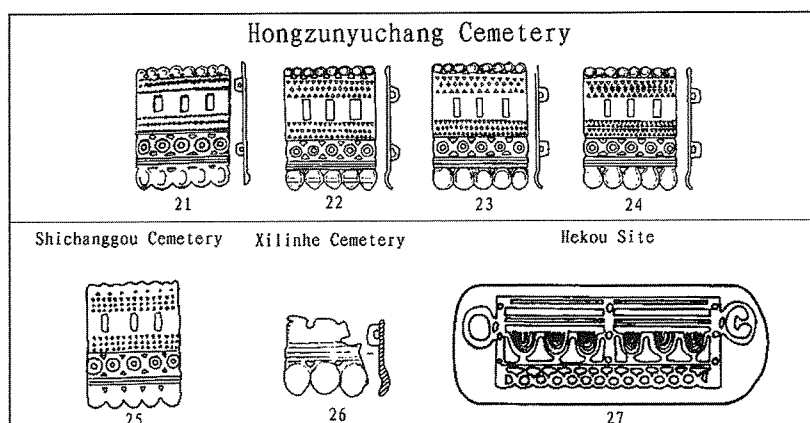


图 17、牡丹江流域出土铜带饰
(牡丹江流域出土の銅帶飾)

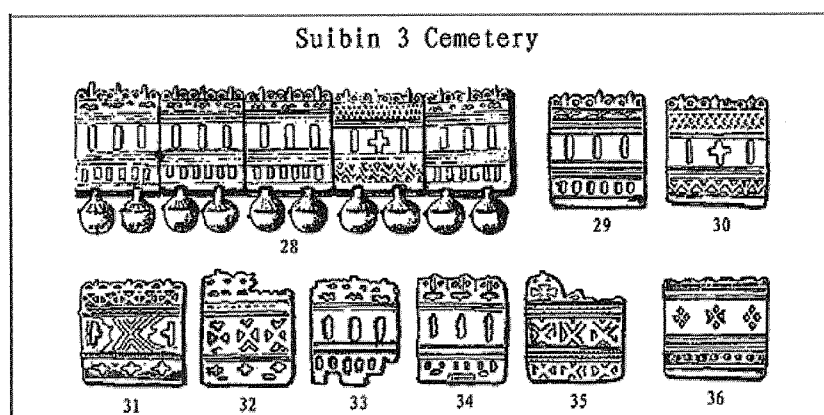


图 18、黑龙江流域出土铜带饰
(黒竜江流域出土の銅帶飾)

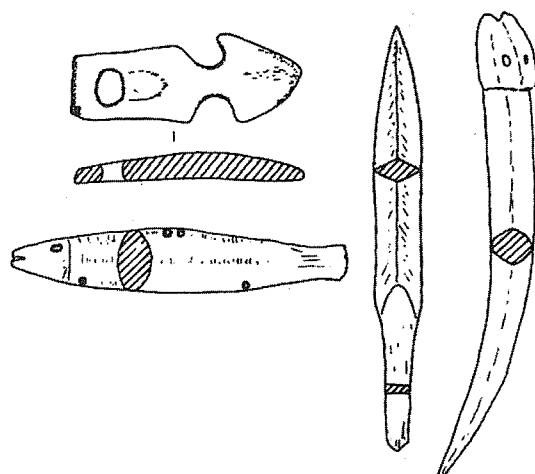


图 19、细鳞河遗址出土骨器
(細鱗河遺跡出土の骨器)

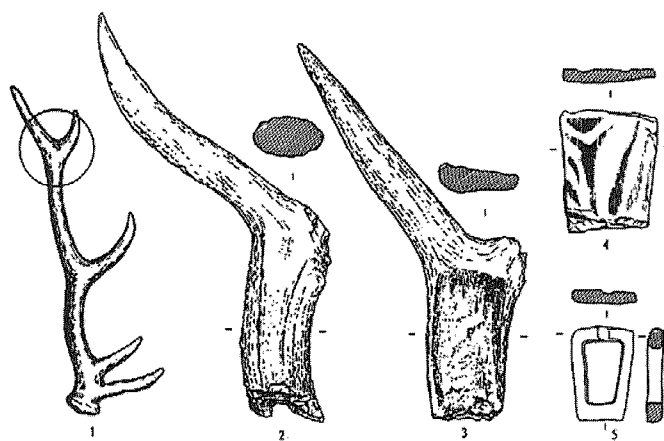


图 20、细鳞河遗址骨带扣制作工序
(細鱗河遺跡の骨帶扣製作工程)

近年の中国における靺鞨－女真遺跡の主要考古学調査と研究

王 培新（吉林大学边疆考古研究センター）

三宅俊彦（専修大学文学部） 訳

I 考古調査

一 黒竜江沿岸の考古調査（図1）

1 同仁遺跡：黒竜江省同仁県の黒竜江中流右岸の第一段段丘（台地）に位置する。遺跡の面積は約 24,000㎡。1973 年に 320㎡を発掘し、7～13 世紀の住居址 3 基、貯蔵穴 7 基を発見した。同仁遺跡の遺構・遺物は 2 期に分けることができ、その第一期はさらに早期と晩期のふたつに区分できる。同仁遺跡一期の早期は 3 号住居址に代表され、年代は 7 世紀である（図 2）。同仁遺跡一期の晩期は 2 号住居址に代表され、年代は 10 世紀である。同仁遺跡二期は 1 号住居址が代表であり、年代は 12～13 世紀である（図 3）。一期早期は半地下式の住居であり、陶器では盤口罐・斜口器に特色がある。一期晩期は住居の建築方法は一期早期と似ているが、典型的な陶器は夾砂紅褐陶の直口筒腹罐となる。二期の住居は地上建築であり、屋内には L 字形のオンドルがある。典型的な陶器には灰色方格紋罐・紅褐色陶罐・壺および甑などがある。

2 蜿蜒河遺跡：黒竜江省綏濱県にある松花江と黒竜江の合流地点西方の河岸段丘上に位置する。面積は約 7,500㎡である。1974 年に 203㎡が発掘された。蜿蜒河遺跡では 2 基の住居址が発掘され、上層住居址（F1）と下層住居址（F2）と呼ぶ。2 基の住居址は時期差があるだけでなく、文化的にも異なる文化に属している。F1 は地上建築であり、平面は隅丸長方形を呈し、室内にはふたつの竈とオンドル施設がある。F1 は現代の通水溝に壊されていたが、残された陶片の質と文様からみて、F1 と同仁文化二期の文化的様相は似ており、両者の年代は近いと考えられる。

3 綏濱三号墓地：黒竜江省綏濱県の黒竜江中流右岸沿いの砂丘地帯に位置する。1975 年に 14 基の墓が発掘された。墓は秩序をもって並び、各墓の間隔は 1～2 m であった。構造は竪穴土坑で棺・槨はなく、墓坑は火で焼かれていることから、土坑火葬墓であろう。綏濱三号墓地は黒水靺鞨の葬制を継承し、併せて遼代契丹人の影響も受けており、遼中期以後（10 世紀末～11 世紀前半）の五国部女真人の残したものかもしれない。

4 トロイツコエ墓地：黒竜江中流西部のゼーヤ・ブレーヤ平原に位置し、ロシアのアムール州イワノフカ区に属する。1967 年に、ソビエト科学アカデミーのシベリア支部・極東考古隊がこの墓地を発見し、併せて 5 回にわたる発掘をおこなった。2004 年には、吉林大学边疆考古研究センターとロシア科学アカデミー・シベリア支部の考古・民族研究所が合作して、再度この墓地にて 200㎡の発掘を行った。得られた成果は以下の如くである：

測量の結果、当該墓地には1,000基あまりの靺鞨墓が分布している；墓は土坑竪穴式であり、あまねく火で焼かれた痕跡が存在している；副葬品は乏しく、副葬品のない墓もある；総合的に考えると墓地の年代は8～9世紀である。

二 牡丹江下流地区の考古調査（図4）

1 河口遺跡と振興遺跡：河口遺跡は黒竜江省海林市三道河子郷の牡丹江左岸の第二段段丘（台地）上に位置し、牡丹江をはさんで右岸に位置する振興遺跡とは互いにはるかに呼応している。1994～1995年、河口遺跡で1,900㎡、振興遺跡で1,160㎡が発掘された。河口遺跡と振興遺跡の第4期・第5期が、靺鞨—女真期にあたる。第4期の典型的な陶器は、口縁下部に鋸歯状の付加堆紋を一周めぐらせる“靺鞨罐”であり、粟末靺鞨文化に属し、年代は渤海建国前の靺鞨期～渤海国初期にあたる（図5）。第5期の文化的様相は渤海国のものと多くが一致しており、年代は渤海国の時期に相当する（図6）。

2 細鱗河遺跡：黒竜江省海林市北東約67.5kmの牡丹江左岸に位置し、牡丹江の支流である細鱗河が遺跡の南側を流れる。遺跡の面積は約10,000㎡である。1996年、黒竜江省考古研究所と吉林大学考古学系が共同で、細鱗河遺跡にて800㎡の発掘を行い、住居址7基、土坑40基あまりを発見、陶器・鉄器・銅器・骨器および獣骨などの遺物が出土した。細鱗河遺跡は渤海国期の集落遺跡のひとつであり、出土遺物の文化的特徴は渤海国後期の遺物に近く、年代はおおむね9世紀に相当する。出土した大量の獣骨・骨角製品・漁網錘・鉄鏃・骨鏃などの遺物は、漁労と狩猟が細鱗河遺跡において重要な位置を占めていたことを示している。

三 牡丹江上・中流地区の考古調査（図7）

1 虹鱒魚場墓地：黒竜江省寧安市渤海鎮虹鱒魚場北部のふたつの砂丘上に位置し、墓地の東の渤海国上京龍泉府址まで6.5kmである。1992～1995年に、黒竜江省考古研究所が10,000㎡の発掘を行った。靺鞨～渤海期の墓323基と祭壇7基が発見された。墓は石墓・磚墓・磚石混合墓の三つに大別され、石墓がもっとも多く、大部分は合葬の二次葬であった。石墓には石室墓・石坑墓・石棺墓がある。石室墓の墓室は台形・刀形・長方形・双室がある。磚室墓の墓磚は多くが紅色で、三角形・梯形・長方形がある。墓の埋め土と封土の中からは多量の馬の歯が発見された。馬を用いた祭祀の痕跡であろう。出土遺物には生産と生活用具・兵器・馬具・装飾品などの種類が含まれている。中でも陶器が多数を占め、その他のものは銅器・鉄器・玉器・金銀器・瑪瑙の装飾品などがある。

2 六頂山墓地：六頂山は吉林省敦化市の南5kmに位置し、山並みは西から東へ六つの峰が連なっている。墓は山麓下部に二つ隣接した山間の平地に分布しており、東西二つの墓区を形成している。1964年、中国科学院考古研究所東北考古工作隊が六頂山墓地にて20基の墓を発掘した。墓の構造は主に石坑墓と石室墓であった。敦化一帯は渤海国早期の都城所在地であり、第一墓区（西部墓区）の“貞恵公主墓”より墓碑が出土したことから、

その埋葬年代は 780 年であると確実に分かる。発掘された 20 基の墓は、墓の構造と副葬品の観察から、基本的に同一の時期に属するものである。出土した多くの種類の副葬品および封土上を覆っていた板瓦・瓦當は、貞惠公主墓から出土した同様の遺物と同じであることから、墓の年代は 8 世紀であると言え、渤海国の前期に属する。

3 敖東城遺跡：吉林省敦化市街区の南東部に位置し、城址の南に牡丹江を望む。敖東城の城壁の破壊はひどく、外城西壁北部に僅かに残るのみである。2002 年の城址北西部での 310m²の発掘、2003 年の外城西壁の断ち割り調査によって、住居址 3 基（図 8）、土坑貯蔵穴 7 基、溝 1 条を発見した。土器・鉄器・銅器・銅銭・骨角器・動物骨などの大量の遺物が出土した。敖東城遺跡出土の遺物と、東北地区の金代遺跡出土の遺物は相同であり、出土した北宋および金代の銭貨は、敖東城遺跡の年代が金代晩期であることを表している。

4 永勝建築址（図 9）：吉林省敦化市の南西約 8,000m にある牡丹江左岸の台地上に位置し、北約 3,000m が六頂山渤海貴族墓地である。これまでの調査では以下のことが分かっている：永勝遺跡には 5 基のかなり集中した大型建築址が存在しており、周囲には大量の磚・瓦・瓦當・鸱尾などの建築材料が散布しており、建築の等級はかなり高く、渤海国早期の都城遺跡かと推測される。2002 年に 950m²を発掘し、建築基壇 1 基、住居址 2 基、土坑 11 基、溝 1 条を発見、建築部材・陶磁器・鉄器・銅器・銅銭・骨角器などの大量の遺物が出土した。永勝遺跡 1 号建築基壇出土の遺物は、あきらかに金代遺物の特徴を備えており、出土した銭貨は北宋銭が主で、また金代の“正隆元寶”、“大定通寶”もあることから、永勝遺跡 1 号建築基壇の年代は金代晩期と言える。永勝遺跡 1 号建築基壇はひとつの大型の組み合わせ式地上建築で、長方形の土壇基礎の上に 3 基の東西に並列する同じ構造の建物が建つ。出土した瓦當はみな猴面紋であり、その他陶質の獣舌、陶塑像の破片、蓮花紋の礎石などが出土しており、当該建築址は佛教と密接な関係があると推測される。

II 研究成果

一 黒竜江中流地区靺鞨文化研究

黒竜江中流地区の靺鞨文化は、二つの区域に分けることが可能である。すなわち、三江平原区とゼーヤ・プレーヤ平原区である。

三江平原区の靺鞨文化は、黒竜江を境として江南亜区と江北亜区に区分が可能である。江南亜区靺鞨文化の早期は同仁一期文化である。晩期は同仁二期文化である（図 10）。江北亜区の靺鞨文化は、早期はロシアのユダヤ自治州のナイフェリト墓地、ブラゴスロヴェーンノエ II 遺跡、コチェコワトカ墓地などである。晩期のものはこれまでのところ発見はわずかである（図 11）。

ゼーヤ・プレーヤ平原区の靺鞨文化はトロイツコエ墓地、タラカン河口遺跡、シャープカ墓地、ノヴォペトロフスキー墓地、オシノヴォエ湖遺跡、グリヤズヌシュカ遺跡などが

含まれる。以上のものは早期・晩期の二期に分けることができる。早期はシャープカ墓地、タラカン河口遺跡 2 号住居址である。晩期はトロイツコエ墓地によって代表される（図 12）。

ゼーヤ・ブレーヤ平原区と三江平原区の靺鞨文化の陶器には一定の差異があり、前者には後者の江南垂区の典型的器物である盤口鼓腹罐がなく、江北垂区のナイフェリト墓地にある高領鼓肩で体部の低い罐も見られない。

2004 年の発掘によって、トロイツコエ墓地の年代は 8 ～ 9 世紀であり、出土した陶器は黒竜江中流のナイフェリト類型を基礎として変化してきたもので、発展過程において查里巴を代表とする松花江流域の粟末靺鞨文化の影響を受け、地域的特徴をもつトロイツコエ類型を形成したという認識に至った（図 13 ～ 15）。

靺鞨黒水部は黒水からその名を得ており、隋唐期の“黒水”は現在の黒竜江中・下流域を指す。文献の記載に照らすと、三江平原区の靺鞨遺物の帰属は黒水部となる。黒水部江南垂区の墓に副葬される陶器は江北垂区よりも多く、江南垂区は江北垂区より経済的に富んでいたことを反映している。江南垂区の団結墓地からはさらに 1 点の象嵌龍紋鉄刀が発見されており、これは黒水靺鞨の酋首部の所在地を探るための手がかりを提供している。

ゼーヤ・ブレーヤ平原区は三江平原区の北西にある。『新唐書』の“黒水西北又有思慕部”という記載をもとに推測するなら、シャープカ山墓地に代表されるゼーヤ・ブレーヤ平原区の靺鞨遺跡・遺物は、思慕部のものということになるだろう。

二 靺鞨—女真系銅帶飾（銅製の帶飾り）の分類と編年

靺鞨—女真系の銅帶飾は、平面形が長方形のものと円形のものの二種類があり、長方形の銅帶飾の数量が絶対的多数を占める。表面の文様の主体となる形式から、長方形銅帶飾は 5 型式に分けられる。円形銅帶飾は平面の形状から、2 型式に分けられる。中国出土の靺鞨—女真系銅帶飾の流行期間は、だいたい 6 ～ 12 世紀初めである。A 型長方形銅帶飾の年代がもっとも早く、6 ～ 7 世紀に流行する。A 型長方形銅帶飾はまず松花江中・下流地区で出現するが、ここは粟末靺鞨の主要な分布区域であり、A 型長方形銅帶飾が主に流行した地域でもある。B 型長方形銅帶飾の出現は A 型長方形銅帶飾よりやや遅れ、流行年代は 7 ～ 8 世紀である。B 型長方形銅帶飾はまず松花江中・下流地区に出現して、渤海国前期に流行し、分布範囲は渤海国内になる。C 型長方形銅帶飾には二つの垂型があり、Ca 型と Cb 型の銅帶飾が共存する。出現年代は 7 世紀である。C 型長方形銅帶飾はこれまでのところ松花江中・下流地区でのみ見られる。D 型、E 型長方形銅帶飾は黒竜江流域の靺鞨—女真遺跡から出土する。D 型、E 型長方形銅帶飾には共存現象が見られ、両型の銅帶飾の年代は基本的に同じで、10 ～ 11 世紀に流行している。

靺鞨—女真系銅帶飾の流行時期は、二つの時期に分けることができる。第一段階は靺鞨～渤海期に相当し、長方形銅帶飾 A、B、C 型と円形銅帶飾に代表され、6 ～ 9 世紀に主に松花江と牡丹江流域で流行する（図 16・17）。第二段階は女真期に相当し、年代は 10 ～ 11 世紀である。長方形銅帶飾 D、E 型に代表され、主に黒竜江流域で流行する（図 18）。

靺鞨—女真系銅帶飾の類型、分布、年代などの変化を分析すると、松花江と牡丹江流域

で流行した A、B、C 型長方形銅帶飾の系譜は粟末靺鞨－渤海系統と言え、黒竜江流域で流行した D、E 型長方形銅帶飾の系譜は黒水靺鞨－女真系統に属すると言えよう。

三 細鱗河遺跡出土の動物骨および骨製品の研究

1 動物種の鑑定

家畜に含まれるもの：ウマ、ウシ、イヌ、ブタ。

野生動物に含まれるもの：ヒグマ、オオカミ、マンシュウアカシカ、ノロジカ。

2 動物骨表面の痕跡の観察

動物による痕跡：齧歯類と肉食類の 2 種の動物による咬み跡。

人為的な痕跡：切断の痕、削り穿った痕、打ち込みの痕、押しつぶした跡、削いだ跡、研いだ跡。

3 骨製品の製作

出土した骨製品は主に鏃・錐・鏟・刀・紡錘車・骨魚・帯扣などがある（図 19）。観察できた骨製品の製作工程は：材料選択→材料の裁断→材料のおおまかな成形→ひな形をつくる（調整）→型を定める（整形）（図 20）。細鱗河遺跡出土の骨製の道具には、以下のような特徴がある：原料はノロジカ・マンシュウアカシカの角が主であり、その他の原料は非常に少ない；骨製品の種類がかなり多く、製作技術は熟達しており、精巧な製品には幾通りもの加工工程が必要である；加工方法には断ち切る・刻む・削りそぐなど、比較的立ち後れた技術が採用されている。

4 家畜飼養と狩猟の関係

動物骨の種類を鑑定したところによれば、細鱗河遺跡で飼養されていた動物はブタ・イヌ・ウシ・ウマなどがあり、中でもブタ・イヌの骨の個体数をもっとも多い。狩猟により得ていた動物にはクマ・オオカミ・ノロジカ・マンシュウアカシカおよびナマズなどがある。中でもノロジカとマンシュウアカシカの個体数をもっとも多く、当時の人々の主要な狩猟対象であった。

5 ブタの死亡年齢と性別の分析

個体の死亡年齢の統計によれば、ブタの死亡年齢は二つの年齢グループに分けられる。第一グループは 6～12 ヶ月で、総数の 31% を占める。第二グループは 12～24 ヶ月以上で、総数の 69% を占める。性別の鑑定できた標本の死亡年齢と性別の分析によると、ブタが未成熟の時にオスの一部の個体はすでに殺されているが、メスの個体はすべて残されており、当時はまだ去勢技術を持っていなかったと推測される。

遺伝的特徴から見たオホーツク集団と現代北東アジア集団との関係

増田 隆一（北海道大学創成科学共同研究機構）

佐藤 丈寛（北海道大学大学院理学院自然史科学専攻）

1. オホーツク文化とは

オホーツク文化は 5~13 世紀頃にサハリン南部、北海道北部・東部、千島列島などオホーツク海南岸域に栄えた魚漁・狩猟の海洋民の文化として知られている。オホーツク文化の特徴は海洋に適応した生業形態であり、そのほとんどの遺跡の分布は沿岸部に限られている。また、五角形や六角形などの大型住居跡、ヒグマ骨を中心とする骨塚などの動物儀礼の痕跡も大きな特徴である。このようにオホーツク文化は、同時期に北海道南部（道南）や内陸部に栄えた続縄文文化や擦文文化とは明らかに異質と考えられており、オホーツク文化の特異性は考古学研究者の間で注目されてきた。

また、オホーツク文化期遺跡から多数出土している人骨の形態学的特徴は、脳頭蓋が高く丸いこと、上顎骨と下顎骨が大きく扁平な顔をしていること、犬歯窩が極めて浅いことなどである。これらの特徴は北方モンゴロイドの特徴と一致する。さらに頭蓋の計測値やその形態的変異から、オホーツク文化人は、現在、アムール河下流域やサハリンに住むニヴフ、ウリチ、ナナイなどの民族に類似すると報告されている (Ishida et al. 1988, Kozintsev et al. 1990)。

2. クマ送り儀礼を通じたオホーツク文化と道南文化との交流

オホーツク文化ではクマ儀礼を行っていた考古学的知見が得られている。住居跡から多くのヒグマ頭骨で構成される骨塚が発掘されたり、クマを表現した骨製・角製の動物意匠遺物が出土している。また、北海道礼文島のオホーツク文化遺跡として知られる香深井 A 遺跡から出土したヒグマ頭骨の考古学的研究から、仔グマ飼育型クマ送りの原型的儀礼が行われていたと考えられている。13 世紀頃に擦文文化から移行して成立したと考えられているアイヌ文化にもイオマンテとよばれる飼育型クマ送り儀礼があるが、擦文文化にはクマ儀礼に関する考古学的知見は得られていない。そのため、アイヌ文化は前文化期である擦文文化を継承しつつオホーツク文化と融合して成立したという考え方もある。クマ送り起源に関する考察については、宇田川（1989・2002）、天野（2003）などの総説を参照されたい。

私たちのグループは、香深井 A 遺跡出土ヒグマ骨の出自を探るために、出土骨についてミトコンドリア DNA (mtDNA) 分析を行い、現在の北海道ヒグマの遺伝的特徴と比較解析した (Masuda et al. 2001)。その結果、香深井 A 遺跡出土のヒグマ頭骨には、道北型 DNA をもち春に死亡した成獣ヒグマに加えて、道南型 DNA をもち秋に死亡した複数の仔グマが含まれていることを見出した。仔グマ頭骨からの道南型 DNA の発見は、礼文島に居住していたオホーツク文化人と当時、道南で展開していた続縄文文化の人々との間で仔グマを通じた文化的交流があったこと、さらには、仔グマに対する価値観が共有されていたこと

を示唆している。少なくとも、オホーツク文化において仔グマ飼育型クマ送りが行われ、そのクマ送りを通して隣接の異文化圏と交流をもっていたことが、ヒグマ出土骨の考古DNA 研究から明らかになってきた。

3. オホーツク文化人の遺伝的特徴

オホーツク文化人そのものの起源やその末裔についてはこれまで完全には明らかにされていない。そこで私たちは、ヒグマ出土骨分析と同様の手法を用いてオホーツク文化人骨について mtDNA 分析を行い、現在の東アジア諸集団との系統関係を検討することにより、オホーツク文化人の起源と遺伝的特徴を明らかにする研究に取り組んでいる (Sato et al. 2007)。

本研究では、北海道北部、東部、サハリンのオホーツク文化遺跡から出土した人骨および臼歯を用いた。臼歯を用いる際には、後の形態学的研究の妨げにならないように精巧なレプリカを作製した。骨や歯根部を粉末状にした後、脱灰処理、タンパク分解処理、DNA 抽出を行った。分析した遺伝子領域は mtDNA の中でも特に多型部位が多いコントロール領域の hyper variable region I (HVR I) とした。3つの領域に分けて遺伝子増幅(PCR)を行い、自動シーケンサーを用いて合計 441 塩基対の遺伝情報を決定した。得られた遺伝情報を既報の東アジアの 16 集団、計 1,019 個体 (マレーシア人 52 個体、インドネシア人 54 個体、フィリピン人 59 個体、コリヤーク 110 個体、エベン 35 個体、ブリヤート 61 個体、ニヴフ 57 個体、北方漢民族 60 個体、本州日本人 82 個体、九州日本人 104 個体、沖縄日本人 45 個体、アイヌ 51 個体、韓国人 64 個体、台湾漢民族 65 個体、ウリチ 87 個体、ネギダール 33 個体) の遺伝子タイプ (Horai et al. 1996, Tajima et al. 2004, Starikovskaya et al. 2005) と比較した。その結果、オホーツク文化人から同定された 16 種類の遺伝子タイプのうち、6 種類はオホーツク文化人に特異的なタイプであった。一方、残りの 10 種類は、ニヴフ、ウリチ、コリヤーク、エベン、ネギダール、アイヌにおいても高頻度に見られた。

4. オホーツク文化人の起源

次に、集団間の遺伝距離から近隣結合法を用いて系統樹を作成した結果、オホーツク文化人集団は特にニヴフ、ウリチと近縁であるという結果が得られた。ニヴフおよびウリチは従来の形態学的分析からオホーツク文化人に近縁な集団 (Ishida 1988・1996, Kozintsev 1990・1992) で、本研究の DNA 分析結果と一致する。

さらに、オホーツク文化人のもつ遺伝子タイプの中には、mtDNA のハプログループ Y に属する 5 種類のタイプが見出された。ハプログループ Y は、現在ではアムール河下流域集団とアイヌに特異的にみられるハプログループで (Kivisild et al. 2002)、このことも、オホーツク文化人がアムール河下流域に起源をもつことを示唆している。また、アイヌの直接の祖先であると考えられている北海道縄文人からはハプログループ Y をもつ個体は検出されていないことから (安達他 2006)、アイヌのもつハプログループ Y はアムール河下流域集団から、オホーツク文化人を介してもたらされたものだと考えられる。

アイヌの数個体がオホーツク文化人と同じタイプをもっていたという結果は、アイヌ文化が擦文文化とオホーツク文化が融合して成立したという説を裏づけている。コリヤーク集団ではオホーツク文化人と同じタイプを共有する個体の割合がニヅフに次いで高い。オホーツク文化人とコリヤークに遺伝的関係があることが示唆された本研究結果に加え、古コリヤーク文化からオホーツク文化にセイウチの牙が運ばれるなどの文化間の交流があった形跡がみられるという報告（菊池 2004）があることから、両文化間で遺伝的交流もあったことが示唆される。

以上、オホーツク人骨の DNA 分析により、オホーツク文化人はニヅフ、ウリチの祖先と起源を同じくし、コリヤークを含む他の北東アジア集団からの遺伝子流動を受けながら形成され、オホーツク文化末期には、擦文文化人と融合してアイヌを形成したものと考えられる。今後、さらに分析する個体数を増やすことにより、詳細なオホーツク文化人の起源を示すことができるものと考えている。

5. 今後の課題

私たちの研究成果は、オホーツク文化人がアムール河下流域集団の祖先から、現代のアイヌ集団の祖先への遺伝子と文化の橋渡しとなったことを示唆している。しかし、この比較研究は、過去のオホーツク文化人と現代の大陸集団と現代のアイヌ集団を比較したものであり、実際に遺伝的交流が行われた同じ時代の集団どうしの比較を行っていない。よって、より詳細な歴史を復元するためには、オホーツク文化期と同時代の大陸集団および北海道の続縄文人／擦文人の遺伝的特徴を明らかにしてオホーツク文化人と比較検討する必要がある。さらに、これまでに調べられている現代アイヌ集団の遺伝的特徴（Horai et al. 1996）は日高地方に限ったものであるため、今後は諸機関のご理解とご協力を賜りながら、北海道各地域のアイヌ集団の特徴も明らかにしていくことが、北海道を含む北東ユーラシアにおける文化の変遷を明らかにすることにつながるものと考えられる。

引用文献

安達登, 坂上和弘, 百々幸雄, 篠田謙一, 梅津和夫, 松村博文, 大島直行 (2006) 「北海道縄文・続縄文人骨のミトコンドリア DNA 解析 (続報)」『DNA 多型』14: 86-90.

天野哲也 (2003) 『クマ祭りの起源』 雄山閣

Horai, S., Murayama, K., Hayasaka, K., Matsubayashi, S., Hattori, Y., Fucharoen, G., Harihara, S., Park, K.S., Omoto, K., and Pan, I.H. (1996) MtDNA polymorphism in East Asian populations, with special reference to the peopling of Japan. *American Journal of Human Genetics*, 59: 579-590.

Ishida, H. (1988) Morphological studies of Okhotsk crania from Oshima, Hokkaido. *Journal of Anthropological Society of Nippon* 96: 17-45.

Ishida H (1996) Metric and nonmetric cranial variation of the prehistoric Okhotsk people. *Anthropological Science* 104: 233-258.

菊池俊彦 (2004) 『環オホーツク海古代文化の研究』 北海道大学図書刊行会

- Kivisild, T., Tolk, H.V., Parik, J., Wang, Y., Papiha, S.S., Bandelt, H.J., and Villems, R. (2002) The emerging limbs and twigs of the East Asian mtDNA tree. *Molecular Biology and Evolution* 19: 1737-1751.
- Kozintsev, A.G. (1990) Ainu, Japanese, their ancestors and neighbors: Cranioscopic data. *Journal of Anthropological Society of Nippon* 98: 247-267.
- Kozintsev, A.G. (1992) Prehistoric and recent populations of Japan: multivariate analysis of cranioscopic data. *Arctic Anthropology* 29: 104-111.
- Masuda, R., Amano, T., and Ono, H. (2001) Ancient DNA analysis of brown bear (*Ursus arctos*) remains from the archeological site of Rebun Island, Hokkaido, Japan. *Zoological Science* 18: 741-751.
- Sato, T., Amano, T., Ono, H., Ishida, H., Kodera, H., Matsumura, H., Yoneda, M., and Masuda, R. (2007) Origins and genetic features of the Okhotsk people, revealed by ancient mitochondrial DNA analysis. *Journal of Human Genetics* 52: 618-627.
- Starikovskaya, E.B., Sukernik, R.I., Derbeneva, O.A., Volodko, N.V., Ruiz-Pesini, E., Torroni, A., Brown, M.D., Lott, M.T., Hosseini, S.H., Huoponen, K., and Wallace, D.C. (2005) Mitochondrial DNA diversity in indigenous populations of the southern extent of Siberia, and the origins of native American haplogroups. *Annals of Human Genetics* 69: 67-89.
- Tajima, A., Hayami, M., Tokunaga, K., Juji, T., Matsuo, M., Marzuki, S., Omoto, K., and Horai, S. (2004) Genetic origins of the Ainu inferred from combined DNA analyses of maternal and paternal lineages. *Journal of Human Genetics* 49: 187-193.
- 宇田川洋 (1989) 『イオマンテの考古学』 東京大学出版会
- 宇田川洋 (2002) 「オホーツク『クマ祀り』の世界」 西秋良宏・宇田川洋編 『古代オホーツクと氷民文化－北の異界－』 東京大学出版会

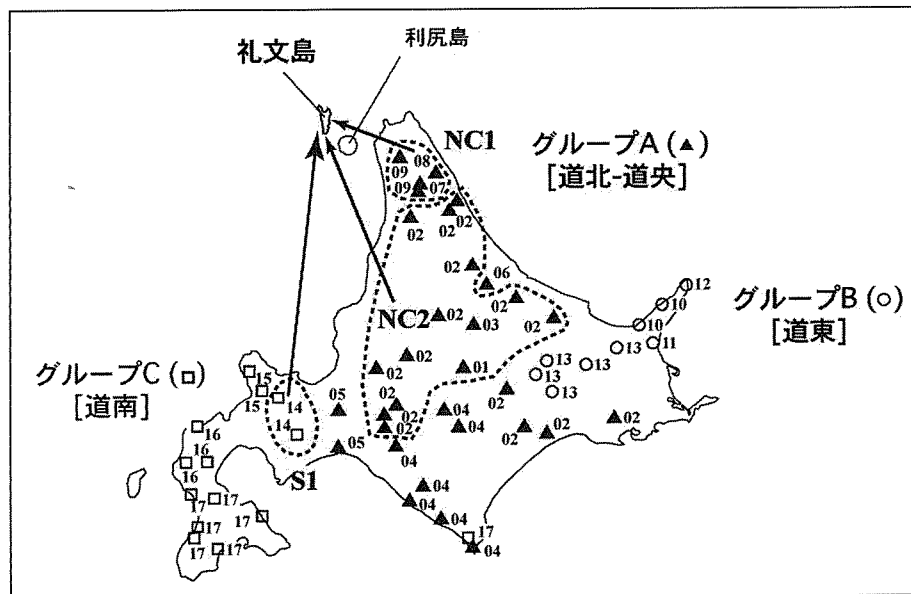


図1 ミトコンドリア DNA 分析に基づく、北海道礼文島のオホーツク文化期香深井 A 遺跡出土ヒグマ骨の由来地域の推定 (Masuda et al. 2001)

1 歳未満の仔グマ頭骨は続縄文／擦文期の道南地方から持ち込まれたものと考えられる。これは、オホーツク文化と続縄文／擦文文化との交流を示唆する。

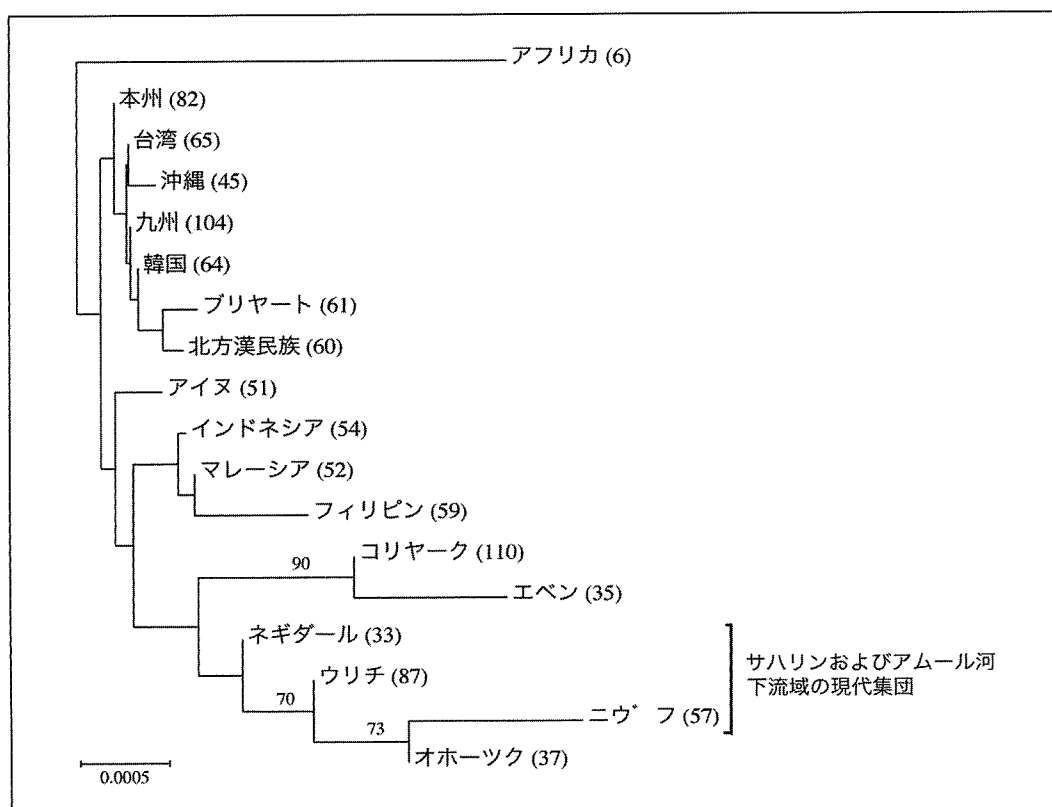


図2 ミトコンドリア DNA によるオホーツク文化人集団および東アジア集団の間の系統関係 (Sato et al., 2007)。近隣結合法による。カッコ内の数字は人数。

系統樹状の数値は 70%以上のブーストラップ値を示す。オホーツク文化人はニウフやウリチなどのアムール河下流域の現代集団に近縁であることがわかる。

オホーツク集団と続縄文集団の交流

天野哲也 (北海道大学総合博物館)

はじめに

オホーツク文化前期前半 (5 世紀ころ)、オホーツク集団はサハリン南部から北海道北部地方に進出した。そして前期後半 (6 世紀ころ) に入るとオホーツク集団は日本海沿岸道南地方 (奥尻島)、オホーツク海沿岸道東地方・根室まで行動域を拡大した。

当時、北海道—東北地方北部は続縄文集団の世界であった。したがってオホーツク集団が上記の地方に新たに進出したときに、続縄文集団に遭遇したはずである。ところが考古学的には、両者の共存・接触関係を直接に明確に示すデータは今日なお皆無に等しい。かろうじて動物遺伝学的に、礼文島香深井 1 遺跡出土の子グマの中に道南産と推定されるものが 3 個体認められたことや、人類学的に奥尻島青苗でオホーツク文化の遺跡に埋葬された人骨が続縄文人の形質をもつと分析されたこと、あるいは泊村チャツ遺跡でオホーツク人的な形質をもつ女性人骨が得られていることなどから、両集団の間になんらかの交流があったことを間接的に想定できるに過ぎない。

さらに最近、以下のようにミトコンドリア DNA の分析から両者の交流を示唆する結果が得られている。すなわちハプログループ Y1 をもつ民族は北アジア・シベリアに分布し、ニヴフやウリチでは人口の 30% あまりがこれをもつ。また、アイヌでも 6% にこれがみられるが縄文人には認められないので、途中の段階に流入したことになる。それはいつどのようにして生じたのであろうか？

佐藤他が指摘したようにハプログループ Y1 はオホーツク人でも 30% に認められるので、オホーツク集団がサハリンから北海道に進出した時に先アイヌ集団と接触し、そこで流入した可能性が高い。なかでも、オホーツク文化前期後半に続縄文集団と接触して「北大式」を成立させた段階と、後期に擦文集団と接触して終末期「トビニタイ」段階を迎えた段階が注目される。ただし後者は道東地方のローカルな現象なので、そうした接触が広範囲に起きたことが想定される前者の段階 (6 世紀頃) で上記の遺伝子が流入した可能性の方が高いと判断できる。このように両集団が接触した場合には交流は多方面にわたって生ずるはずである。それはどのような交流であったであろうか？

北大式と十和田式土器の比較

この問題を考えるために資料の多い土器を分析する。さて、続縄文文化最終段階の土器・北大式の重要な特徴である刺突文をオホーツク文化起源とみることは松下 (1965) 以降ほぼ定説化している。しかしそこには 2 つ問題がある。ひとつは北大式の刺突文では主に管状の原体を用いるために環状の文様すなわち竹管文が一般的であるのに対して、オホーツク文化・十和田式ではこれが稀なことである。もうひとつは、十和田式では突瘤文も見られるのに対し、北大式はこれを欠くことの意味である。これらの現象は従来注目されておらず、具体的な検討もなかった。小論ではとくに施文原体の違い・変化による刺突文の

変異に注目して分析する。

1 礼文島香深井1遺跡における管状原体による刺突文・突瘤文施文土器の変遷

時間的に北大式土器の成立に関係すると考えられるオホーツク文化前期を中心にして、魚骨層Ⅵから同Ⅲo・中期までのオホーツク式土器を対象にする。この報告書では、土器の各部位について円周の1/4以上残存する資料を全点実測図に掲載している。そこで定量的なデータを得るために、報告書に記載された資料のうち実測図に掲載された資料64点を中心に観察・分析し(表)、さらに必要に応じて破片資料でデータを補うことにする。さらに、資料数が少ない魚骨層Ⅴと同Ⅵについては報告書に記載できなかった破片資料も検討する。また念のためにⅤ/Ⅵ、2号埋土資料についても検討を加える。その結果を次に表とグラフで示す。

層位	管状原体	その個数	棒状原体の個数	確認合計
Ⅵ	0	0	10	10
Ⅴ/Ⅵ	12%	2	15	17
Ⅴ	25%	2	6	8
2号埋土	26%	11	31	42
Ⅳ	16%	14	73	87
Ⅲ	0%	0	7	7
Ⅲo	7%	0.5	6.5	7
合計		29.5	148.5	178

香深井1遺跡における環状原体と棒状原体の出現率推移(大場・大井 1976・1980より)

礼文島香深井1遺跡では、管状原体による刺突文系文様の施文例の古い例はⅤ/Ⅵ間層で17点中に2点認められる(12%)。次いで魚Ⅴで8点中2点(25%)、2号埋土で42点中11点(26%)に達する。この付近をピークにして、魚Ⅳでは87点中14点(15%)に減少する。魚Ⅲ以降さらに減少するらしく、魚Ⅲoでは管状原体と棒状原体を併用(混用)している例が実測資料7点中に1点(7%)みられ、また破片資料には管状原体で施文した例が若干認められる。

これを刺突文系文様の変遷と対比してみると、刺突文系文様は魚骨層Ⅵの96%からそれ以降ほぼ一定の割合で減少してゆき、管状原体による文様の変遷とは関連しないことが明瞭である。なお、突瘤文の施文に用いた資料はまったく認められなかった。

2 管状原体の系統

管状原体は、以上のようにオホーツク式土器ではきわめて限定した時期に部分的に用いられるのに対して、北大式土器では顕著であり、むしろ普遍的に用いられていると言える(北海道大学農場遺跡、斜里町禅竜寺遺跡、釧路市ノトロ岬遺跡、恵庭市カリンバ遺跡、八雲町小学校遺跡、余市町天内山遺跡、泊村掘株神社遺跡、八戸市市子林遺跡など)。したがってオホーツク式土器の管状原体は続縄文集団との交流の過程でもたらされた可能性

が大きい。

すなわちオホーツク文化前期の後半段階に、オホーツク集団が北海道北部地方から日本海沿岸道南地方(奥尻島)、オホーツク海沿岸道東地方・根室まで行動域を拡大したときに、後北D段階の続縄文集団と接触・交流し、続縄文集団には刺突文の伝統が伝えられて北大式土器が成立した。同時に、オホーツク集団は環状文様(竹管文)嗜好の伝統を続縄文文化から受け入れた。接触交流の地域としては遺跡分布の傾向から見て、石狩(ワッカオイ)・積丹(掘株神社)や網走(モヨロ)・斜里(禅竜寺)付近などが有望である。

斜里禅竜寺遺跡資料でこれを検討してみよう。詳細は残念ながら公表されていないが、器形・器質・焼成とも極めて類似した後北式土器2点が、石附氏によって「共伴資料」と記載されている。ひとつは口縁部に幅1cmほどの微隆起帯をめぐらし、胴部では全面、縞縄文の帯を斜位に交錯させている。後北D式に分類できよう。いまひとつは口縁部に刺突文をもつものであり、この刺突文は竹管文様である。口唇面に円形の細く深い刻文と、これから口唇外縁に切り込んだ刻文を配す。胴部は縞縄文の帯を横位にめぐらす。北大式の最も古い様相をもつものと言える。型式論的に両者はほとんど連続的な関係に位置付けることができる。すなわちこれらの土器から、続縄文文化・後北D式土器の段階に、オホーツク文化前期後半・十和田式土器をもつ集団が斜里地方に現れて続縄文集団と接触・交流した過程を読み取ることができる。

3 突瘤文

すでに指摘したようにオホーツク文化前期後半には突瘤文が激減する。日本海岸沿岸南部、オホーツク海沿岸道東地方へのオホーツク集団の進出はまさにこの段階であり、したがってその地域で接触交流した続縄文集団には突瘤文の要素はほとんど伝わらなかったであろう。では前期前半はどのような状況であったのか？オホーツク文化前期前半に管状原体がほとんど認められないことは、オホーツク集団が道北地方に進出した当時、続縄文集団との接触・交流は基本的になかった状況を示すのであろう。そこには人口希薄で続縄

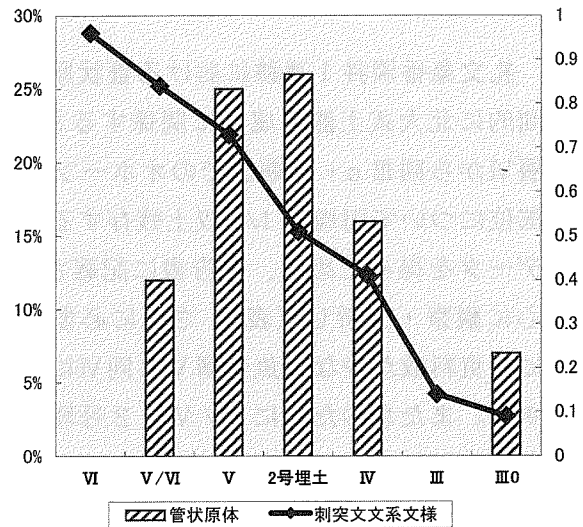


図1 刺突文系土器群における管状原体の出現率の時間的推移(礼文島香深井1遺跡)

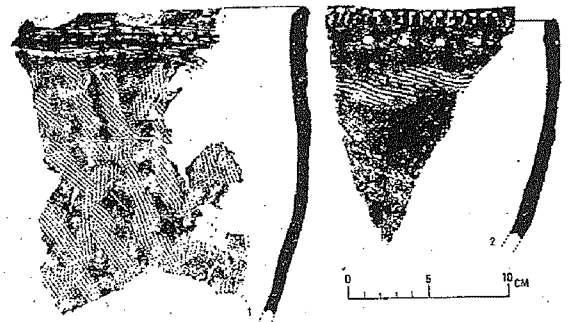


図2 斜里町禅竜寺遺跡出土「北大式土器」(石附 1971)

文集団は展開していなかった可能性が大きい。

おわりに

オホーツク式土器の施文具の具体的な素材や形状はほとんど解明されていない。しかしいずれにしても、1個の土器において同一種類（単位）の文様は1個の施文具でつけることが普通である。ところが礼文島香深井1遺跡の刺突文系文様では2個の施文具を用いた例が3点みられる（魚Ⅳ第364図8、魚Ⅲ/Ⅳ2821、魚Ⅲo第199図1）。しかも3点ともに、管状原体と棒状原体というタイプの異なる施文具を併用している。これはどういう意味をもつのであろうか。可能性としては、最初、意図的に管状原体で施文を始めたが、途中で折損する事態が生じ、やむを得ず、普及しているために手近なところにあった棒状原体で代用して作業を続行したことが想定できる。もしそうであれば、そこに当時のオホーツク集団の続縄文文化・北大式土器に対する意識、そのゆれを見出すことが出来る。ただし魚Ⅲoの頃には北大式土器は廃れていたはずなので、この意識は北大式土器そのものではなく続縄文集団と結びついた管状原体による文様（竹管文）嗜好に関連するものであったことになる。いまひとつの可能性は意識的な併用・使い分けである。棒状原体による刺突文（オホーツク文化系）が優勢な状況のなかで、管状原体による文様（続縄文文化系）の意義を主張・表現するために、敢えて同一個体の中で両者による文様を併存させた意思を想定できる。

このような交流の過程で遺伝子Y1ハプログループがオホーツク集団から続縄文集団に流入し、のちのアイヌ集団に伝わったと考えられる。そのほかに日高地方で採集された「ヒグマと娘の婚姻譚」なども、北ユーラシア諸民族に普遍的なモチーフなので、同様の過程でもたらされたと考えられる。逆に続縄文文化からオホーツク文化に伝わったものとして管状原体施文のほかにどのようなものがあったのか？今後の検討課題である。

参考文献

- 天野哲也・小野裕子（2002）「オホーツク文化の形成－『十和田式』をさかのぼる－」
天野哲也・Vasilevski A. A. 編『サハリンにおけるオホーツク文化の形成と変容・消滅－異文化接触の観点から－』北海道大学総合博物館 pp. 115-118
石附喜三男（1971）「“江別式土器”の終末年代と所謂“北大式土器”」（1）『札幌大学紀要』5:33-44
大場利夫・大井晴男編（1976・1981）『オホーツク文化の研究 3 香深井遺跡』上・下 東京大学出版会
田才雅彦（1983）「北大式土器」『北奥古代文化』14: 20-29
松下 亘（1965）「北海道の土器にみられる突瘤文について」『物質文化』5: 14-28
H. Matsumura (2001) Differentials of Yayoi immigration to Japan as derived from dental metrics. *HOMO* Vol. 52-2: 135-156
T. Sato et. al. (2007) Origins and genetic features of the Okhotsk people, revealed by ancient mitochondrial DNA analysis. *J Hum Genet* Vol. 52: 618-627

厚真町上幌内モイ遺跡の調査で解ってきたこと

小野哲也（厚真町教育委員会）

1. 上幌内モイ遺跡について

上幌内モイ遺跡は、厚真町において平成16年度から調査が進められ、今年度をもって調査を終了した。遺跡からは幅広い時期の資料がみつまっているが、特に擦文・アイヌ文化期について多くの成果が得られている。今回の報告では、モイ遺跡での調査成果を紹介しながら、道内各地の資料との比較検討をしてみたい。

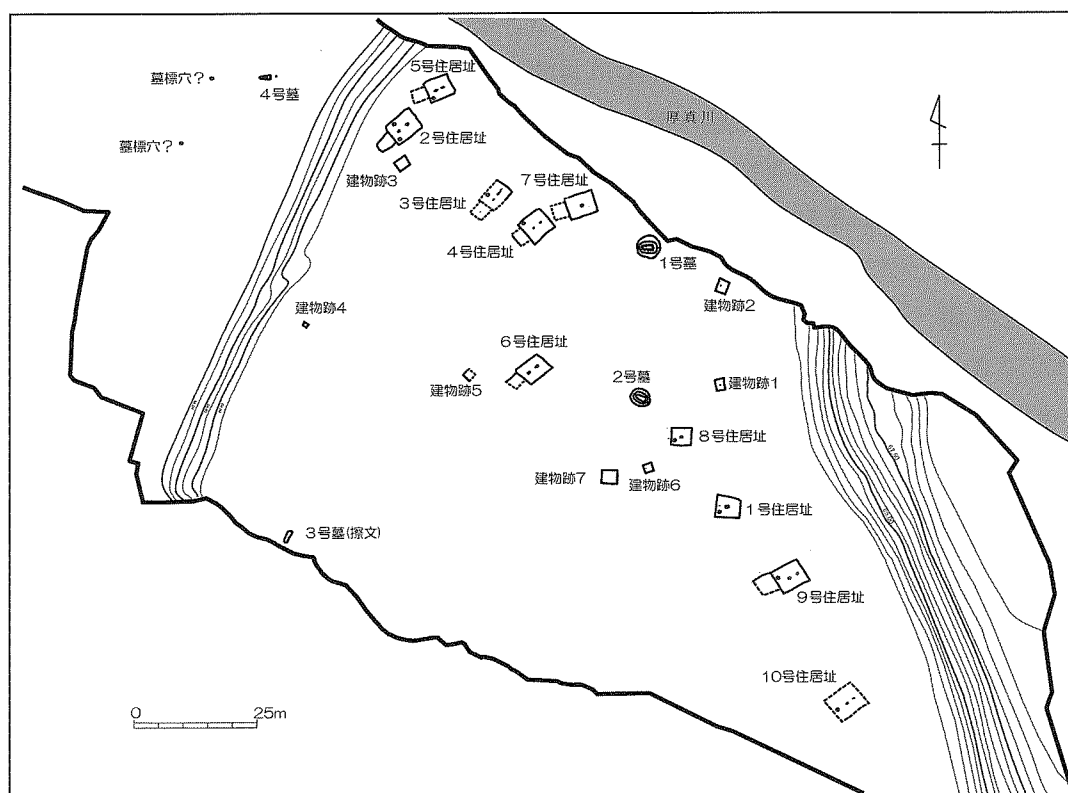


図1 モイ遺跡住居址・墓墳全体図

2. アイヌ文化期の住居址について

モイ遺跡ではアイヌ文化期の住居址と考えられる遺構が合計10件確認できた。これらは全てが同時に存在したのではなく、長期間の構築、廃絶の繰り返しの結果残されたものであることが、調査の結果把握できた。アイヌ文化期の集落遺跡の中で、このような長期の住居址構築の流れを把握できた事例ははじめてであり、道内各地の集落遺跡と比較することで、アイヌ文化期の様相を垣間見ることが出来る。

恵庭市 カリンバ遺跡群

平取町 イルエカシ遺跡

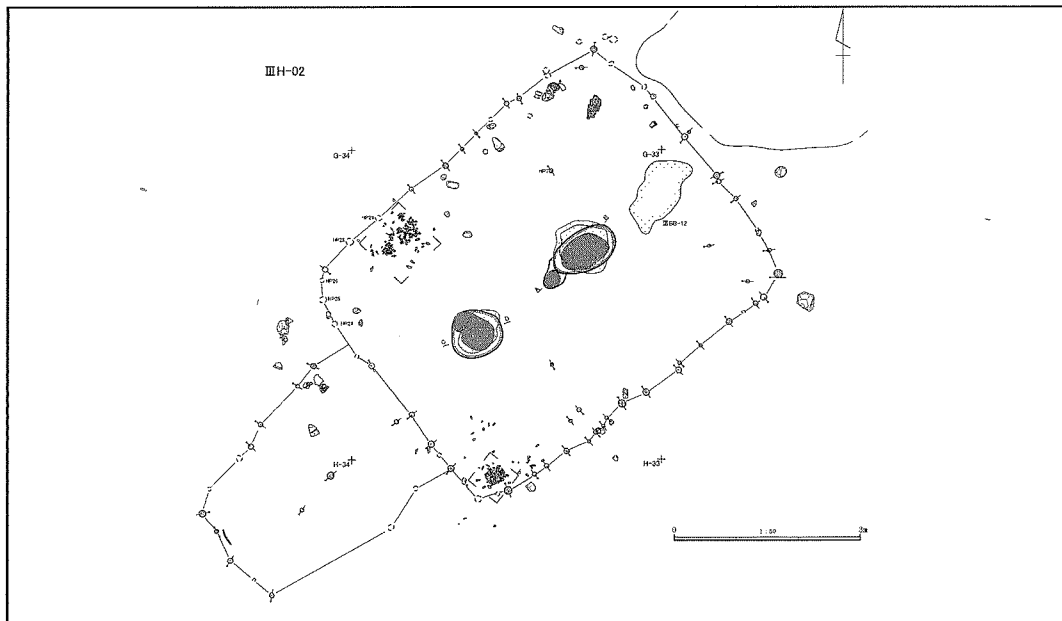


図2 アイヌ文化期住居址平面図

→いずれも 17 世紀以降が主体

上幌内モイ遺跡

→集落としての利用は 17 世紀前葉まで

類例：平取町 二風谷遺跡

※ 16 世紀後葉～ 17 世紀前葉頃を境に集落のありかたが変わるのでは？

※ 住居址軸方向の変化とも関連？

3. 墓墳について

モイ遺跡ではアイヌ文化期で 3 基、擦文文化期で 1 基の墓墳がみついている。またこれら以外にアイヌ文化期の墓標穴と思われる杭跡も 2 ヶ所で確認している。遺跡内におけるこれらの立地とその構造をとおして、アイヌ文化期の様相を垣間見てみたい。

居住地から離れた墓：Ⅲ GP-04

居住地に近接した墓：Ⅲ GP-01・02

→後者は周溝を有し、見せることを意識した構造？

各地の墓の構造とその時間的位置

4. まとめとして

上幌内モイ遺跡の調査により、中世段階のアイヌ文化期における生活様相解明の手がかりを得ることが出来た。この成果を各地の遺跡と対比することで、様々な考古学的解釈を導くことが可能であろう。今後も検討を重ね、解釈の厚みを増していく必要がある。文献

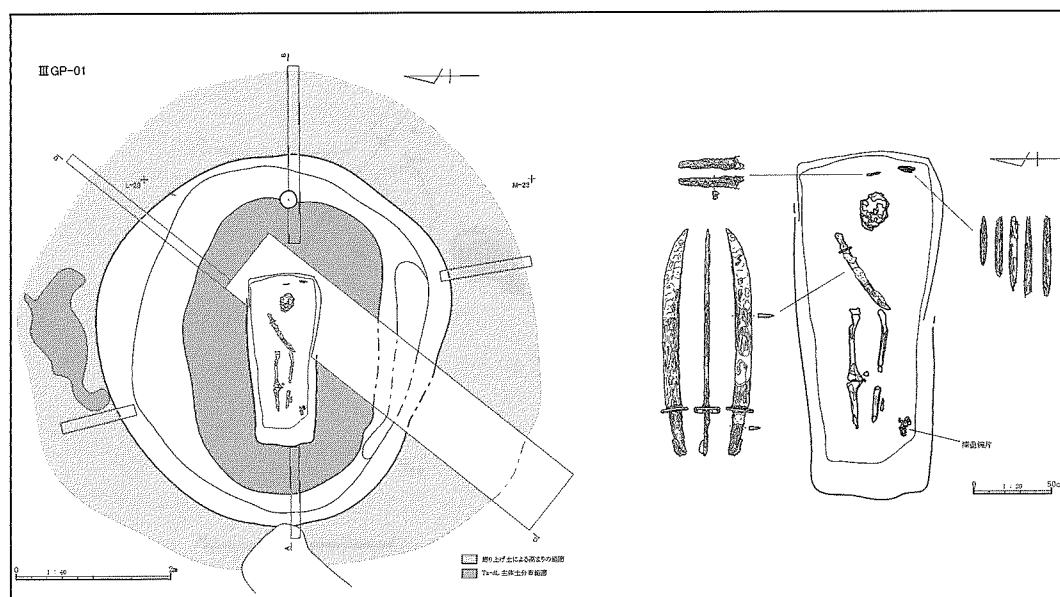


図3 アイヌ文化期墓墳平面図

史等で既に明らかにされている和人の動向やシャクシャインの戦いといった出来事に対し、考古資料から提言できる土台がようやく揃ってきたといえるかもしれない。

参考文献

厚真町教育委員会（2007）『上幌内モイ遺跡（2）』

アイヌの宝器・鍬形の成立と変遷

瀬川拓郎（旭川市博物館）

アイヌ社会は、首長ら富裕層と一般成員のあいだに大きな社会的不平等が存在する格差社会であった。そしてその不平等は、日本製の漆器や刀剣、大陸製の織物やガラス玉といった、みずからには産しない異文化からの移入品である宝（イコル）によって成立していた。宝は、婚姻・契約・領域確定・紛争解決・贖罪など社会生活上の重要な局面で授受され、したがってイコルを多くもつ者が社会生活上有利な立場に立つことができた。

首長は、多くの妻妾やウタレ（同居人・従者・家僕・奴隷）を抱えていたが、かれらはイコルによって獲得された。そして、この妾やウタレの労働は首長に多くの生産物をもたらし、その生産物によって得られたイコルによって、さらに多くの妾やウタレが獲得された。首長はこの循環するサイクルによって富を拡大していった。

アイヌ社会における交易のモチベーションの大部分は、このような宝器の入手に占められていたと考えてよいだろう。したがってアイヌの交易活動や社会を理解するうえで、これらイコルの実態を明らかにすることがなにより求められるのであるが、残念ながらイコルの集成・分類などの基礎的な作業は、宇田川洋や中村和之などによる一部の研究を除いて、考古学からも民族学からもおこなわれてきていない。

本報告では、アイヌのイコルのなかでも最高のランクにあった「鍬形」をとりあげ、採集地などのデータが不明であるため、たんなる「珍品」として資料的には二次的価値しかもたなかった鍬形について、考古学的（型式学的）方法による分析をおこなう。そして、その成立が17世紀代に求められること、さらにその後19世紀にかけてたどった鍬形の型式学的変遷の過程を明らかにしてみたい。

〔資料〕

1 1709年 新井白石「本朝軍記考」

要旨：鍬形はアイヌの宝。病人の枕元に立てて災いを払う。

2 1710年 松宮観山「蝦夷談筆記」

要旨：1669年のシャクシャイン蜂起の際、シャクシャインが償いとしてさしだしたもののなかに鍬形がある。

3 1715年 「松前志摩守差出候書付」

要旨：アイヌは鍬形を義経の兜の鍬形とし、神仏のように敬っている。穴を掘ってそのなかに隠しておく。

4 1720年 新井白石「蝦夷志」

要旨：鍬形の形状と角に鈴をつけることを述べ、地下に埋蔵し祭祀に用いるものとする。約束を誓うため、また罪を贖うためにこれを用いる。

5 1727年 日下部景徳「愚徳随筆」

要旨：エムシ太刀・蝦夷太刀・鍬形がアイヌの三種の神宝。鍬形は真鍮で作る。病人の

枕元に立てる。義経の遺品として天照大神のように敬っている。

6 1739年 板倉源次郎「北海随筆」

要旨：東蝦夷地に古い鍬形があり、アイヌは義経の兜という。神宝であり、崇敬している。所持する者は稀である。巴の彫刻がある。アイヌの細工物ではなく、カラフトから渡来したものだろう。

7 1781年 松前廣長「松前志」

要旨：アイヌ男性の重要な宝。霊力があり、家に置いておくと祟りをなすため、ふだんは深山岩窟に安置する。戦いの際にはこれを取り出し、祭りをおこなってから出発する。枕元に置いて祈祷する。アイヌ語で「ヘラウシトミカムイ」「キラウ」という。松前藩が所蔵する鍬形は、シャクシャインの蜂起の際にアイヌが償いとして藩主に献上したもの。

8 1786年 佐藤玄六郎「蝦夷拾遺」

要旨：アイヌがもっともと尊重する宝。角の部分に鈴をかけ、地中に収め、祈祷のさいに祀る。古代より伝わる正真の鍬形はシコツの首長の家にあつて金製である。他の鍬形はみな後代に商人がアイヌ好みに数をつくったもの。

9 1788年 古川古松川軒「東遊雜記」

要旨：病人の容態が危うくなると、祈祷者と称するアイヌが来てキツネの頭骨を投げて占いをし、鍬形を立てて繰り返し呪文を唱える。

10 1781～88年 伊勢貞丈「蝦夷鍬先考」

要旨：鍬形を義経の遺品とするのは誤りである。

11 1789年 新井田孫三郎「寛政蝦夷取調日記」

要旨：クナシリ・メナシの蜂起の際、松前藩側について功績のあった3つの地域の首長に褒美として「ヘラウシトミカムイ」（鍬形）を遣わした

12 1789～1818年 秦檣庵「蝦夷島奇観」

要旨：アイヌ語で「ヘラシトミカモイ」という。表は皮を張り、銀の鋳をうつ。裏は鉄の地である。アイヌは第一級の神器とする。ユーカラにも鍬形は造島神（カルモシリカムイ）が天降って給わったものとある。家に置いては不浄のこともあるので、浄地を選び、一字を建てて安置する。この鍬形は茅部浦湯の崎より数枚掘り出したもので、酋長ヲテレキが所蔵する。

13 1797年 橘南谿「東遊記」

要旨：アイヌが古くからもち伝えた宝。霊力があり、病や災難の際に祈誓する。そのため鍬形をもつ者は尊信されて首長となる。アイヌは宝を償いに用いるが、霊力のある鍬形を償いに用いることはない。鍬形は鉄でつくられる。

14 1845年 松浦武四郎「蝦夷日誌」一編

要旨：胆振のホロベツ場所の運上屋から1里山奥にアイヌの鎮守があり、90cmにも満たない石の祠がある。道は毎日掃除され、参詣するときは2丁手前から頭を下げ、手を地面について敬いながらゆく。場所支配人に聞くと、そこには昔から金の鍬形というものを祀っているという。長さは60cmばかり、実際には銅製と

いい、絵を描いてくれた。昔は蝦夷地に（鍬形を所有する村が）所々あったが、今では6、7個所のみになった。なかでもここは有名で、アイヌは無理をいう和人をしつこく案内して扉を開いてみせているが、その翌日には多くのアイヌが集まり、清めのため幣を削ってお祓いをする。支配人は、役人を2度も案内したのでよく知っています、という。その後（松浦が）松前城下の氏家六郎左衛門という藩士の家に（鍬形が）伝わりと聞いてみにいったところ、支配人が描いてくれた図と異なるところがなかった。それは藩士の所領であるオタルナイのアイヌから手にいれたものである。鍬形はヘラウシトミカムイといってアイヌ男性の宝であり、病気の際にはこれを以て祈るという。（以下「蝦夷志」「松前志」「蝦夷志考」「蝦夷図考（「蝦夷島奇観」の別本）」の鍬形の記載を引用）。もし私（松浦）が居をさだめたら、アイヌにならって鍬形を床の間に飾り、八百万の神とともに拝んでみたい。

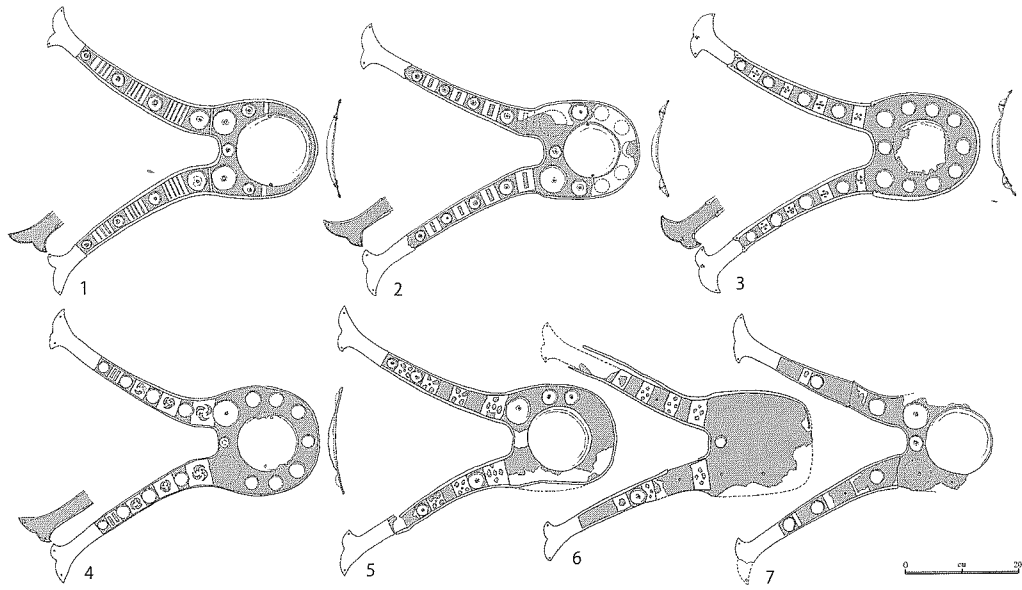
15 1863年 松前徳廣「蝦夷島奇観補注」

要旨：中古以来の甲冑にこのような形のものはみない。上古神代のものとすれば真鍮は用いていないはずである。異邦から伝来したものか。



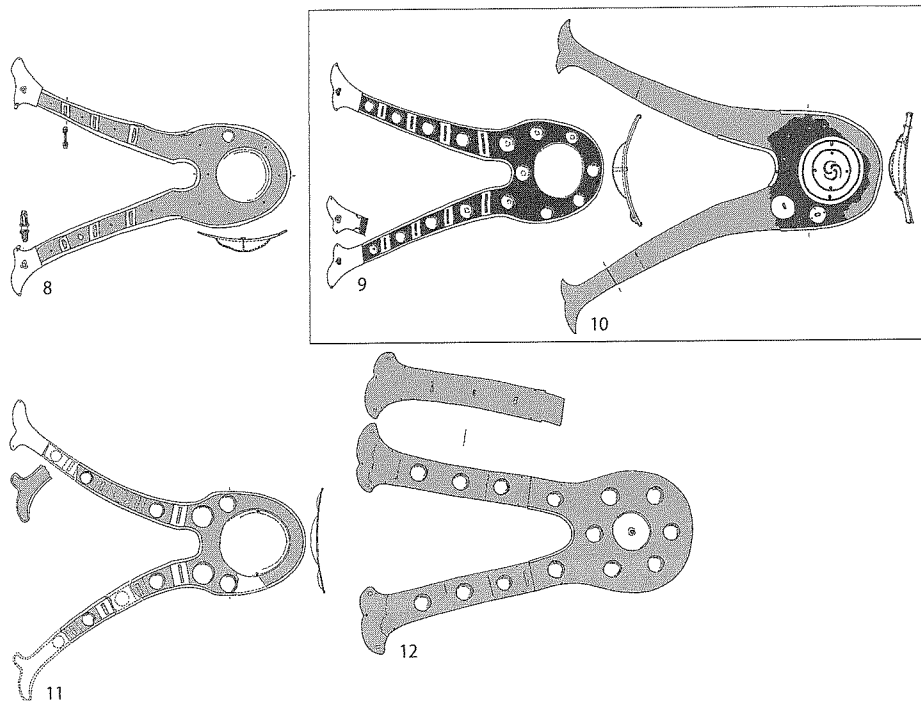
「さてアイヌが通常座臥する『うしろ』には、所謂iyokir(宝壇)があって、夥しい宝器や祭器が積み並べられている。宝器や祭器の類を自己の背後に積み上げる気持は、謂はば『うしろだて』を作る気持ちである。……『うしろだて』となる宝器や祭器の一つ一つに精霊(ramachi)が有って、それらの精霊が、持主のアイヌの後盾となり、常に背後から見守っていてくれるものと、アイヌは信じている。……アイヌが宝器を欲しがり、またさまざまな祭器を蒐めては、背後に飾り立てるのは、決して貪欲な心からではなく、それらのものを多く蒐めれば蒐める程、自分を守ってくれる精霊が豊富になり、従って自分の『運が強くなる』と考へるからである。……アイヌの首長の義務として『宝物を多く蒐めること』『故事来歴に通ずること』『神々への祭祀を怠らぬこと』等が考へられるのも、実はこれに依つて自己及び自己の周囲の人びとの『蔭を強くする』ためなのである。」

知里真志保1952「アイヌ民族研究資料(第二)」『北方文化研究』第7輯



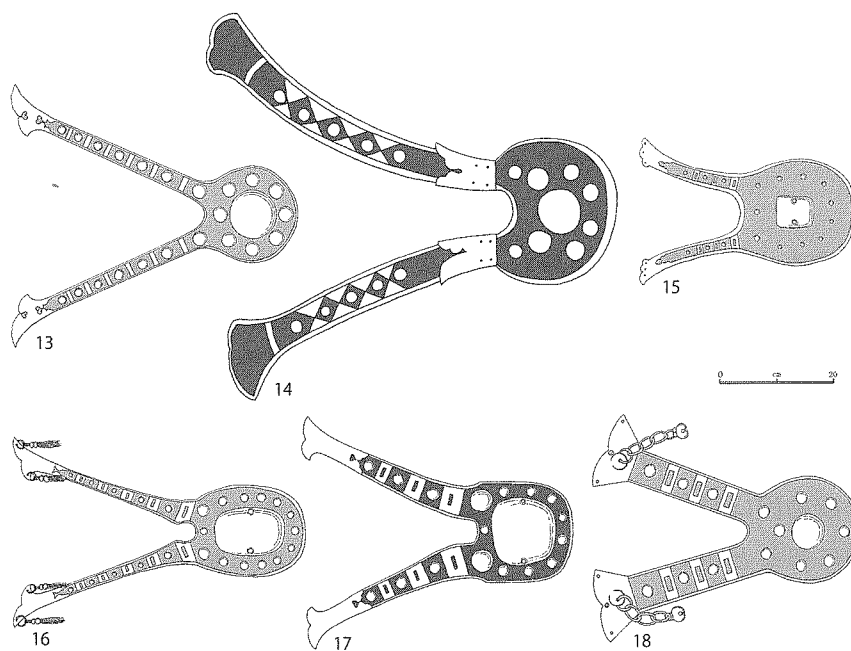
アイヌの鉤形（出土資料 1）

1～7：角田村（現栗山町）桜山（1～3：東京国立博物館蔵 4：九州国立博物館蔵 5～7：所在不明）



アイヌの鉤形（出土資料 2）

8：出土地不明（小樽市博物館蔵） 9～10：美国村（現積丹町）小泊 11：札幌市北 1 条西 8 丁目（北大植物園博物館蔵） 12：シベチャリ（現静内町）山中（松浦武四郎旧蔵）



アイヌの釣形（絵画資料）

13：「東夷画像」 14：「蝦夷日誌」 15：「松前志」 16：「夷酋列像（超殺摩）」（プザンソン美術館本）
17：「蝦夷島奇観」 18：「蝦夷志」

	角の形状と飾り金具	角の透かし孔	角覆い金具	■ 鉄 ★ 真鍮 ○ 銀 本体の素材 金具の素材
1期			表 裏 両面覆い	■ ★ ○ ★
2期		 中央猪目透かし	表 裏 両面覆い	■ ○
3期		 2	表 裏 片面覆い	■ ○

釣形の型式学的変化

要害遺跡の研究

右代啓視（北海道開拓記念館）

はじめに

本研究のおもとの研究は、天野哲也氏（北海道大学総合博物館教授）を研究代表者とする研究課題「中世日本列島北部～サハリンにおける民族の形成過程の解明―市場経済圏拡大の観点から―」である。この研究目的は「第一に古代のオホーツク文化集団と擦文文化集団から、主に近世以降に史的、あるいは民族誌的に認識された民族集団（アイヌ、ウイルタ、ニヴフなど）への転換はどのようにおこなわれたのであろうか。第二にこれらの諸民族の形成動因は祖先集団の日本および中国など大陸との日本海交易、すなわち市場経済への参加にあると予測されるが、市場経済は実際これら諸集団にどのような影響をもたらせたのだろうか。」この二つの問題を解明するために結成された研究プロジェクトである（天野 2004）。

したがって、本研究は「日本列島北部諸地域における古代・中世の要害遺跡の研究」をテーマに 2003～2007 年にかけて要害遺跡の地形測量調査を実施し、チャシを含めた要害遺跡の研究を進めてきた（右代 2004）。すなわち、オホーツク文化期から擦文文化期、さらにアイヌ文化期である中世・近世に共通する遺構である要害遺跡の研究をつうじ、先の二つの問題を解明することを試みた。

ここでは、要害遺跡研究の重要性とフィールドを中心にアイヌ文化のチャシとされる遺跡、あるいはそれ以前のチャシの機能を持つ遺跡について測量調査を実施した成果について報告する。

Ⅰ 要害遺跡の研究の重要性

北海道特有の遺跡である「チャシ」は、古くから多くの研究が行われ、アイヌ文化期に造られた遺構とされている。この「チャシ」は、砦、館、柵、柵囲いの意をもち、ユーカラの中では英雄が常住する「館」、高い山の上にあり、割木の柵を巡らすとされている（知里 1956）。また、「チャシ」と「館」は同義語であるという説もある（金田 1931）。

1995～1999 年にかけて、「北方文化におけるチャシの成立過程」を研究テーマにサハリン州郷土博物館と共同発掘を実施した。サハリンではかつて日本人研究者が初子浜チャシとされたペロカーメンナヤチャシ、北海道では枝幸町ウバトマナイチャシを両地域で発掘を実施した。この日ロ共同調査の最大の成果は、サハリンでチャシとされていた遺跡がオホーツク文化終末期に遡ること、北海道ではオホーツク文化の竪穴住居址をチャシの内部で確認し、重複した防御的遺跡であることを明らかにした（右代他 1998a・b）。

これをうけ北海道のチャシを検討すると、擦文文化期、オホーツク文化期に遡る重複遺跡が予想以上に多く存在することがわかった。さらに、北東アジアの地域をみると、環日本海という広大な地域で防御的な機能をもった遺跡が 9～13 世紀に多く造られているのである。ロシアではガラディッシチェ、中国では山城や平城と呼ばれ、渤海や女真、金の

時代に多く築造されている(右代 2000)。これらを地域と時代の順に整理すると表のようになる。さらに、北海道の周辺地域の遺跡を「要害遺跡」として大きくとらえ整理すると図のようになる(右代 2005)。さらに、北海道の文化区分で、要害遺跡の種類ごとに整理すると表1のとおりである(右代 2005)。

すなわち、アイヌ文化期のチャシが築造される以前、10～11世紀に環日本海の周辺域では、防御的機能を備えた遺構が大陸はもとより、東北地方や北海道、サハリンの地域でも築造されたという歴史的な現象が起っていたことを指摘することができる。

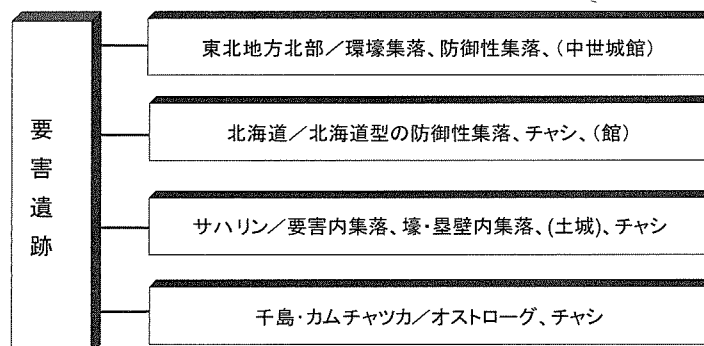


図 要害遺跡の分類

地 域	要害的遺跡の種類	北海道の文化区分	年 代	主な遺跡
サハリン	要害内集落	鈴谷文化期～オホーツク文化期	3～8世紀	コプリシュカ、ザミライローヴァ・ゴローヴァ
	壕・塁壁内集落	オホーツク文化期	9～12世紀	ペロカーメン
	土城	アイヌ文化期	13～16世紀	白土土城
	チャシ		13～16世紀	南貝塚北チャシ
	衛		15世紀	波羅河衛
北海道	要害内集落	鈴谷文化期～オホーツク文化期	3～8世紀	オンコロマナイ、川尻北チャシ、ニツ岩
	壕・塁壁内集落	オホーツク文化期	9～12世紀	
	北海道型の防御性集落	縄文文化期	10～11世紀	川尻南チャシ
	北海道型の環壕集落		10～11世紀	ワシリ、小茂内
	本州型防御性集落		7～8世紀	丸子山
	チャシ	アイヌ文化期	13～18世紀	
	館		14世紀末～	志海苔館など
	城柵・官衙	縄文文化期	6～9世紀	志波城
東北地方	防御性集落		10～11世紀	小飼沢山遺跡、唐川城
	環壕集落		10～11世紀	高屋敷遺跡
	中世城館	アイヌ文化期	12～16世紀	浪岡城、(福島城)
	チャシ	アイヌ文化期	17～18世紀	
千島・カムチャツカ	オストログ		17～18世紀	

表1 地域・時代ごとの要害遺跡

さらに、要害遺跡の変遷は、10～11世紀ころ集落を形成していた要害遺跡が、アイヌ文化のチャシが形成されると集落がコタンとして要害遺跡から独立することが最も重要な要因である。しかも、民族形成において重要な画期でもあることが指摘できる。

II 要害遺跡の研究の成果

さらに、これらを進めるため北海道北部とサハリンとの結節点として重要な要害遺跡の調査と地形測量を実施した。これまで、稚内市の宗谷湾に接する増幌チャシ(右代・鈴木他 2004)、増幌川口2号チャシ(右代・鈴木他 2005a)、泊岸1号チャシ・泊岸2号チャシ(右代・鈴木他 2006)、柵内遺跡(右代・鈴木他 2008・投稿中)礼文島久種湖の湖岸に位置する沼の沢チャシ(右代・鈴木他 2007)、稚内市などの地形測量を実施してきた。これらの遺跡は、河川あるいは海岸に接し、サハリンや北海道北部、本州との交流、交易などの拠点的な要害遺跡である。その中でも「増幌チャシ」と「増幌川口2号チャシ」は、遺跡の立地環境からまさに拠点的な役割をもち、さらに遺構の共通性、

採集遺物などから 10 ～ 11 世紀ころの河口部と連携する大要塞を彷彿とさせる要害遺跡である (写真 1・2)。



写真 1 増幌川口 2 号チャシからみた増幌チャシ



写真 2 増幌川下流域に位置する増幌チャシと増幌川口 2 号チャシ

このころから北方地域への物流経済が本格化し、中世には中国製陶磁器類、鉄器類、漆器類などが遺跡から出土するようになる。この古代～中世、近世と要害遺跡の研究をつうじ、「空白の時代」ともいわれる北方世界をより明らかにすることができる。本研究の成果については、次の表 2 に概要を示すことができる。以上、報告とする。

遺 跡 名	増幌チャシ	増幌川口2号チャシ	泊岸1号チャシ	泊岸2号チャシ	沼の沢チャシ	柵内遺跡
要害遺跡の種類	要害内集落			○		
	壕・塁壁内集落					
	北海道型防御性集落	○	○		?	○
	北海道型環壕集落					
	古防御性集落					
立地形式	チャシ館	○	○	○	○	
	孤島式	○				
	丘先式		○		○	○
	面屋式			○	○	
	丘頂式					
文化期	平地式					
	鈴谷文化					
	オホーツク文化				○	?
	擦文文化	○	○	○	?	○
堅穴状窪み	アイヌ文化	○	○	○	○	
	形状	方形or隅丸方形	方形	方形	多角形	方形 or 隅丸方形
壕断面形状	数	10	11	1	1	7
	U形		○(2重)		○	
	V形					
	逆台形	○		○		
	箱形					
壕の形状	深さ(最大)	1.46m	0.94m	2.5m		0.9m
	幅(最大)	5.6m	3.5m	9.6m		3.1m
	数	4	3	2		
	土塁種類	内	○	○		
土塁断面形状	外		○		○	
	カマボコ	○	○	○	○	
土塁の形状	台形					
	高さ(最大)	0.4m	0.3m	0.5m		0.5m
	幅(最大)	2.8m	2.5m	2.5m		5.6m
	土塁の数	1	2	1		2
柵列状柱穴の状況	土塁上			○	○	
	壕内					
	平坦面					
柵列状柱穴の数			2		20	
溝					○	
土 橋						
入 口		○	○	○	○	
ステップの形状			○		○	
ステップ数			3		1	
平坦面の数		5	2	3	1	
標 高		23.18m	14~18m	29~30m	26~29m	32~35m
総 面 積		3,348㎡	1,295㎡	1,608.6㎡	190㎡	564.9㎡
備 考		複合遺跡	複合遺跡			複合遺跡

表2 要害遺跡の構造

引用・参考文献

- 天野哲也（2004）「中世における北方諸民族の形成過程の解明」『歴史読本』第49巻第12号 pp.230-235
- 知里真志保（1956）『地名アイヌ語小辞典』 楡書房
- 金田一京助（1931）『アイヌ叙事詩・ユーカラの研究Ⅱ』 東洋文庫論叢 第14之1・2
- 右代啓視（1999a）「先史文化の時代」 稚内市史編纂室編『稚内市史』 稚内市 pp.58-108
- 右代啓視（1999b）「擦文文化の拡散と地域戦略」『北海道開拓記念館研究紀要』27: 23-44
- 右代啓視（2000）「北東アジアにおけるチャシの起源と位置づけ」『北の文化交流史研究事業研究報告』 北海道開拓記念館 pp.35-68
- 右代啓視（2001）「チャシの起源とその成立過程についてー北と南の文化からの視点ー」『第52回特別展 知られざる中世の北海道ーチャシと館の謎にせまるー』 北海道開拓記念館 pp.6-11
- 右代啓視（2004a）「中世アイヌ文化の北方交流」『第45回歴博フォーラム 中世の湊町

- 「行き交う人々と商品」 国立歴史民俗博物館 pp.33-43
- 右代啓視 (2004b)「北海道における防御性・環壕集落―北と南からの視点―」『宇田川洋先生華甲記念論集 アイヌ文化の成立』 北海道出版企画センター pp.355-372
- 右代啓視 (2004c)「日本列島北部における古代・中世の要害遺跡の研究」『歴史読本』第49巻第12号 pp.235-237
- 右代啓視 (2005)「北方諸地域における古代・中世の要害遺跡」『北海道開拓記念館研究紀要』33 北海道開拓記念館 pp.31-46
- 右代啓 (2007)「チャシ以前の防御的機能をもった遺跡について」『北東アジア交流史研究』塙書房 pp.107-113
- 右代啓視他 (1998a)「枝幸町ウバトマナイチャシ第1次発掘調査概報」『北の文化交流史研究事業中間報告』 北海道開拓記念館 pp.69-88
- 右代啓視他 (1998b)「サハリン州ベロカールメンナヤチャシの考古学的調査」『北の文化交流史研究事業中間報告』 北海道開拓記念館 pp.23-42
- 右代啓視・鈴木琢也他 (2004)「稚内市増幌チャシの地形測量調査報告」『北海道開拓記念館調査報告』43: 67-78.
- 右代啓視・鈴木琢也他 (2005a)「稚内市増幌川口2号チャシの地形測量調査報告」『北海道開拓記念館調査報告』44:87-104
- 右代啓視・鈴木琢也他 (2005b)「中川町共和チャシの地形測量調査報告」『自然誌の研究―中川町自然誌博物館紀要』7:123-132
- 右代啓視・鈴木琢也他 (2006)「稚内市泊岸一号・二号チャシの地形測量調査報告」『北海道開拓記念館調査報告』45:87-106
- 右代啓視・鈴木琢也他 (2007)「礼文町沼の沢チャシの地形測量調査報告」『北海道開拓記念館調査報告』46:87-106
- 右代啓視・鈴木琢也他 (2008)「柵内遺跡の地形測量調査報告」『北海道開拓記念館調査報告』47 (投稿中).

擦文文化～アイヌ文化の木製品について

藤井誠二（札幌市埋蔵文化財センター）

1 はじめに

北海道における擦文文化から中近世・アイヌ文化の出土木製品研究は、ここ数年の調査、報告による資料の蓄積やいくつかの研究論文などにより、大きな進展を果たしている。特に、美々8遺跡、ユカンボシC15遺跡、オサツ2遺跡、K39遺跡第6次調査、勝山館跡、常呂川河口遺跡などの調査に代表される木製品の大量出土で、一気にその内容が充実した。ここで、これらの資料を集成し、その内容を概観しておくことは重要な意味があるものと考えられる。まさにここ5年、10年が、資料蓄積の段階から分析・研究段階への画期として捉えることが可能であり、そういった意味で三浦による木・繊維製品の集成は画期的なものであろう（三浦 2004）。

一方、本州においても、全国の遺跡出土木製品の集成が行われており、木製品研究自体、汎日本的な流れの中にあるとも言える。この背景には、戦後の1950年代での考古ブーム、60年代以降の高度経済成長期の中での爆発的な行政発掘の増加があり、バブルの崩壊と共にそのピークを向かって、現在急激に減少している発掘件数にも関連しているのかもしれない。全国的な発掘調査件数の増減を背景として、資料の蓄積から、資料の活用・分析・研究へという流れがあることは確かである。

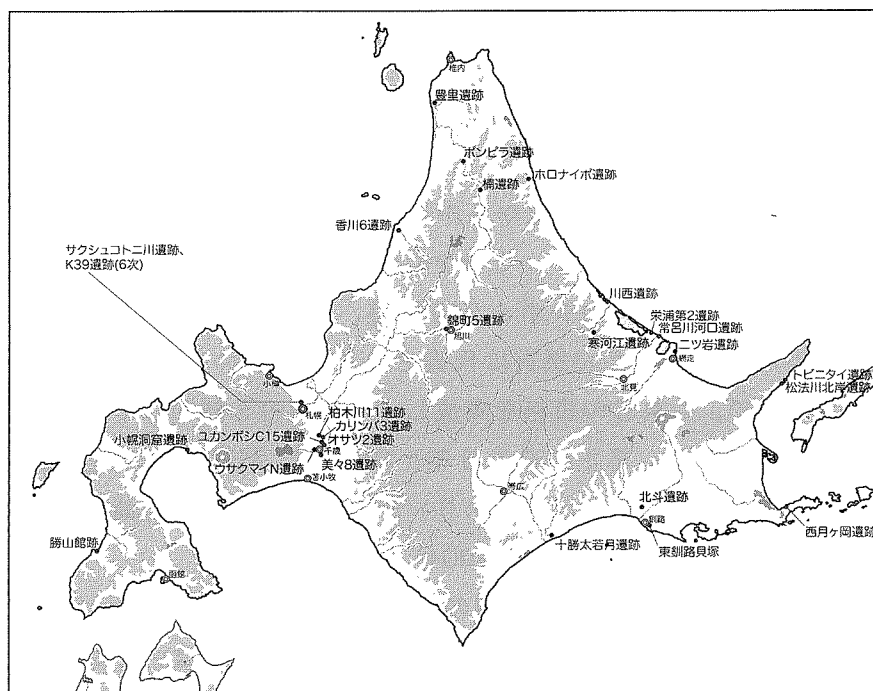
このような現状の中で、擦文文化期から近世アイヌ文化期に至る北海道内出土木製品の集成・分析を実施するにあたり、これまでデータベースの構築、木製品分類の検討を行ってきた。人との関わりの中で「木」を考える時、それらは生活する上で必要不可欠なツールとして人の活動に根深く定着し、生活の根本を支えるものであると言っても過言ではない。木は人の生活の様々な部分に関わりを持ち、多岐にわたる種類の遺物が存在することから、分析対象としては非常に捉えにくい資料であるという性格を持つ反面、条件を整理することによって多様な視点からの分析ができる可能性を持つ資料であるとも言える。しかしながら、木製品研究では有効なデータの蓄積を行うための基礎的なデータ整理方法を含め難しい問題が山積している。発掘調査で見つかる木製品という遺物が特殊な状況下でしか出土せず、資料自体極めて脆弱であるという物としての性格上の制約によって、出土する遺物の種類に偏りが生じること、その絶対数が少ないこと、分析の視点が絞りにくいことなどに起因するものと考えられる。

本研究では、諸先学が行ってきた研究を参考に木製品の分類を行い、その内容を概観しつつ該期の様相に迫りたいと考えている。最終的には該期における時間軸の整理を目的として資料集成とデータベースの構築を行いたい。

2 研究史

北海道における木製品・繊維製品等の調査・研究は、1930年代の北海道式古墳調査などに始まる。北海道式古墳の調査は、江別市江別古墳群、町村農場遺跡、恵庭市茂漁古墳群（柏木東遺跡）、札幌市発寒神社遺跡（N19遺跡）などで相次いで行われ、主に刀剣類

などの漆塗製品などが出土している。戦後の1950年代以降には、豊富町豊富遺跡、豊富町小幌洞窟遺跡、羅臼町トビニタイ遺跡、合泊遺跡、根室市西月ヶ丘遺跡、釧路市東釧路貝塚、緑ヶ丘6遺跡、遠軽町寒河江遺跡、千歳市ママチ川丸木舟遺跡、浦幌町十勝太若月遺跡、斜里町ピラガ丘遺



第1図 擦文、オホーツク、中近世の木製品が出土した主な遺跡

跡など、道内各地で主に焼失住居などから炭化木製品・繊維製品の出土が報告されている。1970年代末以降には、開発に伴う大規模調査が増加し、80年代から2000年に至るまで低湿地遺跡を含む緊急調査が本格化する。

現在、出土木製品を時間軸でみると、縄文時代以降中近世・アイヌ期に至るまで、旧石器時代をのぞくほぼ全ての時期の木製品が出揃っていると言っていいだろう。

3 木製品出土遺跡について

擦文文化期から近世アイヌ文化期までで木製品の出土が見られる遺跡は、現状でピックアップしたところでは67遺跡を数える。ただし、全ての木製品出土遺跡についてカバーしているものではない。主要な遺跡については漏れ落ちはないと思っているが、出土木製品についてその総数を把握することは困難といわざ

No.	遺跡名	擦文 (続縄文～擦文)	中世 (擦文～中世)	近世	合計
1	K39遺跡第3次調査 (大木地点)		59		59
2	K39遺跡第6次調査	833	7		840
3	K39遺跡附属図書館本館 北東地点			4	4
4	K113遺跡第2次調査	7			7
5	K483遺跡			77	77
6	香川6遺跡	1			1
7	柏木川11遺跡	5			5
8	カリカリウス遺跡	1			1
9	カリンバ3遺跡	3			3
10	楠遺跡	2			2
11	小幌洞窟遺跡	6			6
12	寒河江遺跡	1			1
13	栄浦第2遺跡	18			18
14	サクシュコトニ川遺跡			15	15
15	札前遺跡	2			2
16	末広遺跡	1			1
17	十勝太若月遺跡	10			10
18	豊富遺跡	12			12
19	錦町5遺跡	29			29
20	西月ヶ丘遺跡	4			4
21	沼ノ端丸木舟遺跡			10	10
22	美々8遺跡	105	93	4098	4296
23	北斗遺跡	11			11
24	ホロナイボ遺跡	1			1
25	ママチ川丸木舟遺跡			10	10
26	ユカンボシC15遺跡	995	650	348	1993
27	ユカンボシE7遺跡	2			2
	合計	2049	809	4562	7420

第1表 遺跡別・時代別出土木製品点数

るを得ない。そこで、客観的に資料として分析に耐え得る資料を集めるために、ここでは報告書において実測図及びその属性が掲載されている資料を対象とした。報告書から知りうる資料数としては、概ね1万2千点を超える程度であったが、図及び属性等比較分析に耐えるものとしては、7～8千点程度にとどまる。

今回、対象としたのは27遺跡から出土した7,420点の資料である（第1表）。

4 木製品分類について

1) 木製品の分類の問題点

木製品基礎研究の最大の問題点は、その分類基準の設定の難しさにあると言っても過言ではないだろう。木製品研究の第一人者である山田や三浦が指摘するように、木質遺物は用材差や加工技術により形状に違いが生じること、再利用・再加工により製品がさらに別器種に転換する、あるいは本来の用途・加工後の用途が不明になる例が少なくないこと、様々な素材を組み合わせる製品を作ることが容易であること、北海道が極めて特殊な地域性を持っていること、交易により製品や製品以外の多様な木質遺物が流入することなど、多くの要素が複雑に絡み合うことによって、ある一定の基準に基づいた分類作業を困難にしている状況が存在する。

木製品の基礎研究を体系的に実施するためには、木質遺物の持つ技術的側面と性格的側面を切り離して考える必要がある。木製品が持っている人の生活・活動に対する浸透範囲は、土器や石器、鉄器などに比して極めて広いものと言える。木製品がその背景に持っている技術的側面と性格・機能的側面とは、その多様さ故にそれぞれ独立的な世界観が構築されていると言って良いであろう。

2) 木製品の分類（第2表）

木製品利用のサイクルはそれ自体単純ではあるが、素材の性質や植生、広範な利用範囲、地域差と技術差、個人や社会の意志などの諸要素が絡むことによって、極めて複雑な様相を呈する。考古遺物を整理・分析していく上では、基本的には他の考古遺物同様、計画立案、材入手、製作・生産、使用・利用、廃棄といった流れを軸として整理する必要があるが、木製品の場合、基本的な枠組みに多種多様なフィルタを掛けていかなければならない。

研究の基本となるのは基礎データ構築と分類基準の整理であるが、ベースとなる分類基準については基本的には器種レベル及びひとつ上位のカテゴリーを基軸として、全てを網羅していくことが最も望ましいだろう。もちろん現時点で全ての木製品（器種）を網羅することは不可能であるが、今後の新資料の組み込みを容易にする分類枠をつくる必要がある。

今回提示した木製品分類は、分類3（道具群レベル）の26群を基軸としている。これは、木製品の使用・利用に視点を置いた分類であり、生活の様相、遺跡（集団）の性格などを知る手がかりとなるものとする。分類4（器種・部材）では、現時点で遺物として確認はされていないが、存在するであろうと推定されるものもいくつか設定しているが、器種が判別可能な部材・破片を含め、計208種の器種に分けて集計した。ただし、道具群レ

分類1	分類2	分類3	新	器種・部材など
小集団	A 個	家 a 衣 1	編・織物 1	001 織物 002 敷物 003 袋 004 帯 005 背負子紐 006 網 007 籠 008 笥 206 編物
			装身具 2	009 横櫛 010 堅櫛 011 簪(かんざし) 012 木玉 013 帯留め 014 緒締(おじめ) 015 櫛扇
			嗜好具 3	016 キセルラウ 017 たばこ入れ 018 根付け 019 茶筌
			携帯具 4	020 鞘 021 山刀鞘 022 山刀鞘帯鞆部 023 鞘帯鞆部 024 樹皮製鞘 025 鐙(つば) 026 刀柄 027 刀子柄(マキリ柄)
			紡織具(寝具) 5	028 機織具 029 編機 030 編具 031 糸締具(へら) 032 糸巻 033 コモ植 034 紡錘棒 035 織維束 036 腰当て 207 箆
	食	2 食用具 6		037 碗 038 刳物 039 容器 040 皿 041 片口 042 匙 043 箸 044 串
		調理具 7		045 籠 046 大籠 047 籠ミニチュア 048 団子籠 049 漬し具 050 杓子 051 組板
	住	3 建築具 8		052 建材 053 柱 054 棟木・母屋 055 桁・梁 056 垂木 057 高床倉庫(部材) 058 梯子 059 門(かんぬき) 060 屋根縫針 061 針 062 壁板 063 丸杭 064 角杭 065 割杭 066 二股杭 208 屋根材
		家財具 9		067 曲物 068 曲物把手 069 曲物蓋板 070 曲物底板 071 曲物側板 072 箱物 073 箱物蓋板 074 箱物底板・脚 075 箱物側板 076 折敷 077 折敷蓋 078 折敷底 079 折敷側板 080 結物 081 樽 082 樽蓋板 083 樽底板 084 樽側板 085 樽栓 086 桶 087 桶底 088 桶側板 089 輪材 090 盆 091 割鉢 092 浅鉢 093 碗 094 碗蓋 095 漆塗碗 096 容器 097 漆塗容器 098 角形片口容器 099 樹皮容器 100 炉鉤 101 雪かき
分類1	分類2	分類3	新	器種・部材など
小集団	A 個	家 a 住 3	工作具 10	102 斧柄 103 袋口鉄斧柄 104 手斧柄 105 横槌 106 縦槌 107 縦槌ミニチュア 108 掛矢 109 作業台 110 芽針 111 楔 112 挟み木 113 砥石入れ 114 模造品(雛型)
			結束具 11	115 樹皮製結束具 116 縄 117 紐
			発火具 12	118 ヒキリ板(ウス) 119 ヒキリ棒(ギネ) 120 切截樹皮
中集団	B 個	家族集落	狩猟具 13	121 弓 122 弓管 123 矢 124 矢柄 125 矢管 126 矢中柄 127 矢筒 128 矢筒翼 129 仕掛け弓 130 仕掛け弓ミニチュア 131 木鏃 132 テン捕翼 133 二股刺突製品
		労働 生業	漁撈具 14	134 ヤス 135 鋸先 136 中柄 137 離頭鋸中柄 138 鋸(キテ)柄 139 柄(楯) 140 魚突鉤鋸台部 141 回転式離頭鋸指掛部 142 魚叩き棒 143 浮子
			採集具 15	144 土掘棒
			農耕具 16	145 堅杵 146 臼 147 鉤 148 鋸 149 鉤形木鋸
			家畜用具 17	150 家畜小屋(材) 151 餌箱 152 玩具
		b2 陸上	歩行具 18	153 草履 154 かんじき 155 かんじき軸 156 乗緒(かんじき紐) 157 下駄
			馬具 19	158 鞍
			運搬具 20	159 櫓
		移動 水上	舟用具 21	160 舟敷 161 舷側板 162 舟飾板 163 舟材 164 舟あばら 165 舟楫 166 櫓 167 櫓持ち手 168 櫓受台部 169 櫓受台部軸 170 舵棒 171 あか渡み
大集団	C 家族集落	習俗	祭祀・儀礼具 22	172 木幣(イナウ) 173 花矢 174 飾串 175 飾板 176 舟模造品(ミニチュア) 178 棒酒客(イクバスイ) 179 小刀模造品 180 刀ミニチュア 181 宝刀(ミニチュア)
			慣習具 23	182 制裁棒
集団間	D 集落クニ	交易	移入品 24	183 木札 184 竹札
	E	加工材	加工材 9	185 丸杭 186 角杭 187 割杭 188 丸木材 189 角材 190 板材 191 割材 192 棒状材 193 鉤状材 194 二股材 195 軸状材 196 ビン状材 197 有孔材 198 挟入材 199 柄付材 200 楕円板材 201 円盤状製品 202 円錐台 203 木端 204 樹皮 205 彫刻付材
			用途不明材 99	999 用途不明加工材

第2表 木製品基礎分類表

ベルで重複するものが出てくるなど若干の検討課題が残っている。

5 出土木製品の概要

1) 時代別木製品出土量

ここで扱った資料は、発掘調査報告書において実測図版または写真図版として掲載されたものを使用している。資料数は、27 遺跡合計で 7,420 点である（第 2 図）。内訳は、第 1 表のとおりである。これらを時期別で集計すると、擦文文化期が 2,049 点（27.61%）（第 3 図）、中世アイヌ文化期が 809 点（10.9%）（第 4 図）、近世アイヌ文化期が 4,562 点（61.48%）（第 5 図）である。

2) テーマ別分類による比較

これらの出土木製品について、製品使用・利用という観点から、（1）日常生活・習慣、（2）生業 1（狩猟・漁撈）、（3）生業 2（農耕）、（4）信仰・祭祀・儀礼、（5）外交・交易（・交通）の 5 つのテーマを設定し（第 3 表）、各時期の比較を試みた。その結果は、第 4 表のとおりである。

6 結び

1) 考察

時間軸での状況を見てみると、擦文文化期から近世アイヌ文化期までほぼ同様のライン（出現率）を辿ることがわかる。特に擦文文化期と中世アイヌ文化期については、祭祀・儀礼具を除くと極めて近い状況が伺える。相違点が顕著となるのは、近世アイヌ文化期に至って、建築具（主に建材類）が減少する点、中世アイヌ文化期まではほとんど皆無であった樽・桶類が出現する点、漁撈具に比べ狩猟具が減少する点など、非常に興味深い状況がその出現率からだけでも見えてくる。このように、個別の木製品種について細かく見ていくと、それぞれの差・特徴を伺うことができる。

これに対し、先に設定した 5 つのテーマ別分類に基づいた比較を見てみると、全く別の興味深い結果が得られた。第 4 表の上段は、各時期の総点数に対する各テーマ別の出現率であるため、それぞれに数値の差が認められる。これは、テーマ外の木製品点数の差で、特に加工材などの木製品の有無にその違いが現れている。とは言え、テーマ外の木製品のパーセンテージもまた、興味深い数値を示している。これにも増して興味を引くのは下段の数値である。これは、テーマ外の木製品を除いた出現率であるが、驚くほどにその差が見られない。中世アイヌ文化期の信仰・祭祀・儀礼グループにやや差が見られるのと、外交・交易グループに増加傾向が見られる以外は、ほぼ横並びと言って良い。

この結果から言えることは、出土木製品から見た文化様相の移り変わりに大きな変容はなく、時間軸としては連続性が認められるとあってよいだろう。個々の要素を抽出していくとその差が顕著になる部分もあるが、それらは遺跡の性格という要素が重要な意味を持ってくる。総括的には、生活に密着した木製品の使用・利用という観点から見た擦文文化期から近世アイヌ文化期に至る各集団の様相という点では、時間軸による顕著な差は認

められず、逆にその連続性が顕著に現れた結果となった。このことは、文化的な変容が緩やかに進行したことを意味するものであり、逆に言えばアイヌ文化的な諸様相は擦文時代に辿ることができ、その変容は時代を追うごとに本州の動向に影響を受けつつも、独自の文化を営んできたことを示唆するものと考えられる。

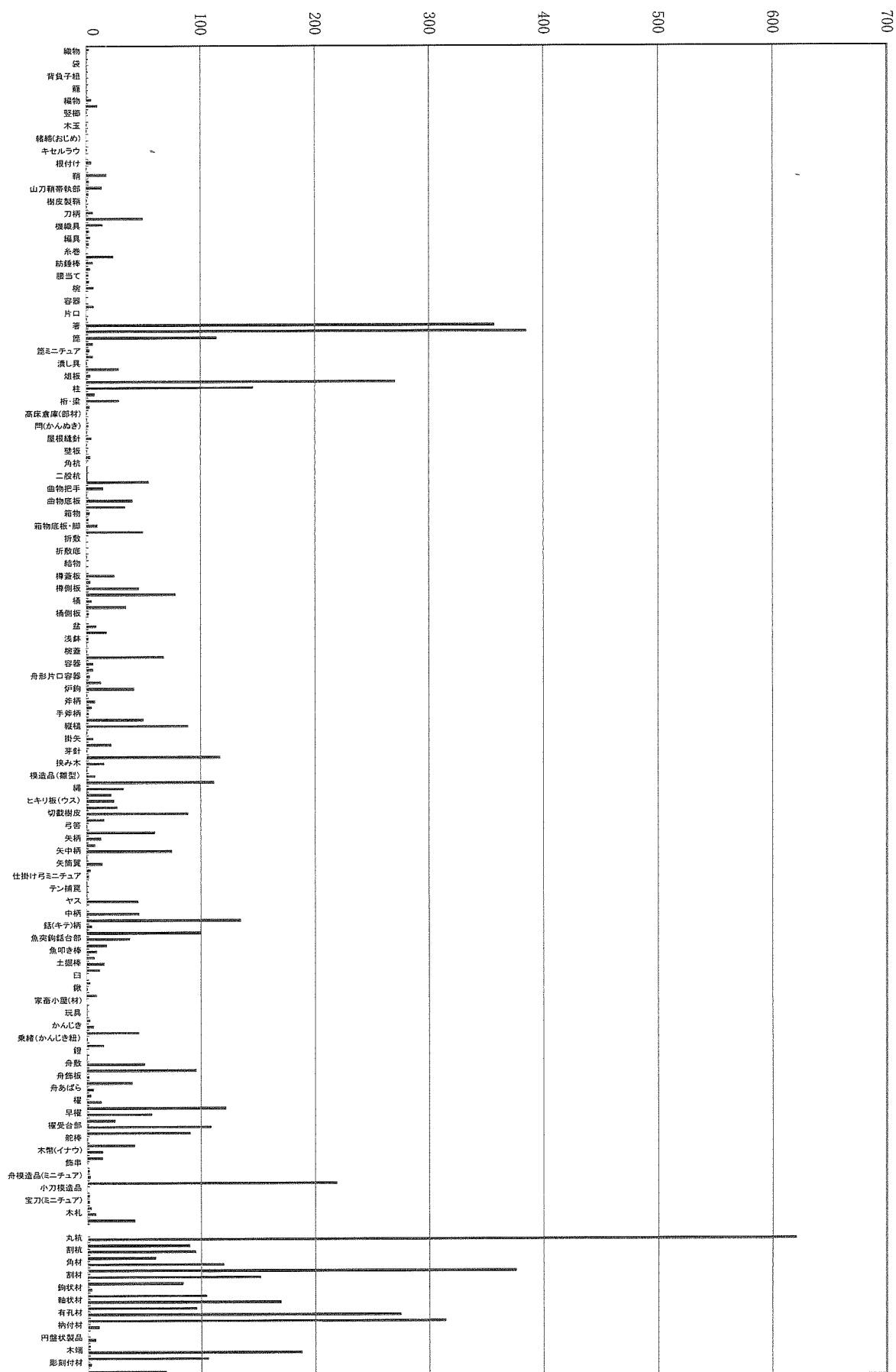
2) まとめと課題

本報告は、言ってみれば、木の利用全体の中のある一部分を、時期を限定してスライスし、その結果から何が見えてくるかといった目的で試みたものである。分類・比較とも、木製品という遺物のサイクル（木製品製作の意志決定から廃棄まで）の中では、その一部分に焦点を当てているにすぎない。今後、より細部に至る分析・検討が必要であるが、総体的な傾向としては、その様相の一端を伺うことができた。

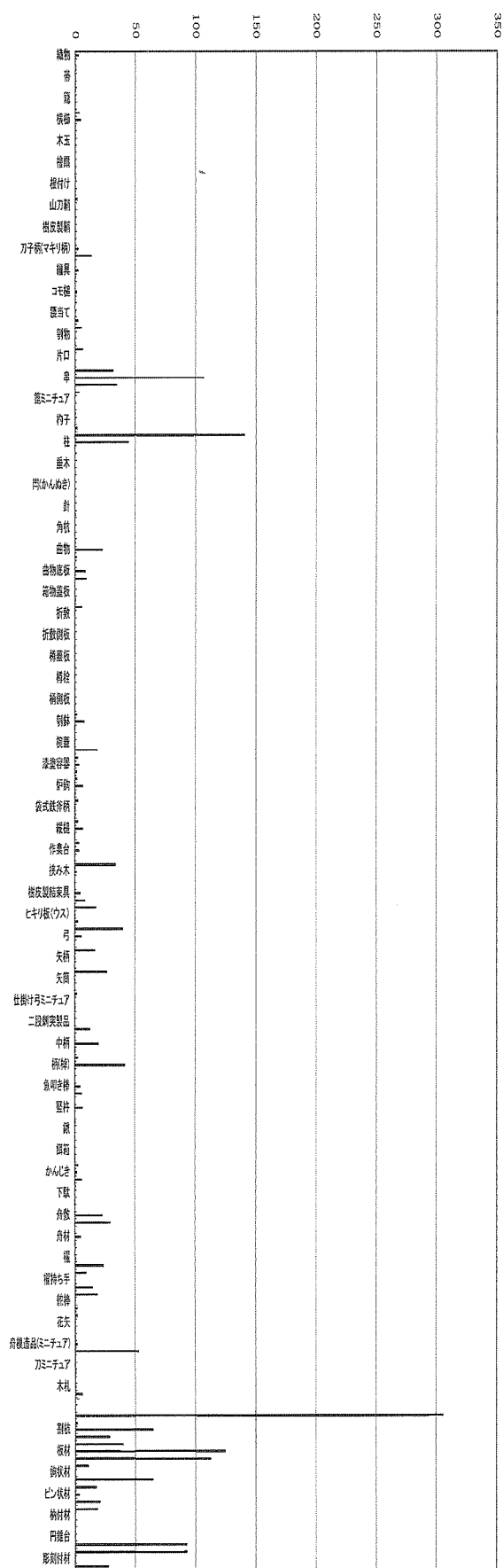
木製品の研究では、取り組むべき様々な課題が山積している。それらを地道に解決していく作業が必要なのは言うまでもないが、今回考えさせられたことの一つに、点数による比較の限界がある。一口に木製品といっても、膨大な種類と形態が存在するために、点数での比較ではイメージ的にわかりにくい部分があると思うのである。そういった部分もひとつ今後の課題としたいと考えている。

参考文献

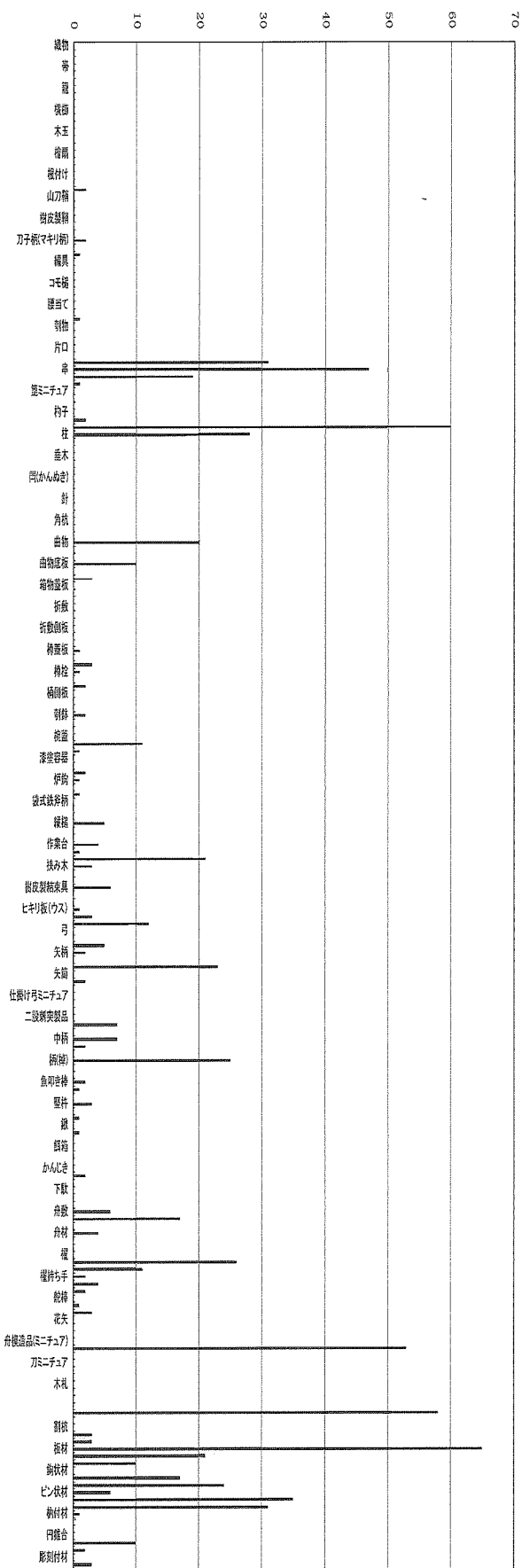
- (財)北海道埋蔵文化財センター (1997)『美沢川流域の遺跡群 XX』 北埋調報第 114 集
(財)北海道埋蔵文化財センター (2003)『千歳市ユカンボシ C15 遺跡 (6)』 北埋調報第 192 集
札幌市埋蔵文化財センター (2001)『K39 遺跡第 6 次調査』 札文報第 65 集
三浦正人 (2004)「木・繊維製品」『考古資料大観 第 11 巻 続縄文・オホーツク・擦文文化』小学館 pp.206-226・232-242
山田昌久編 (2003)『考古資料大観 第 8 巻 弥生・古墳時代 木・繊維製品』小学館



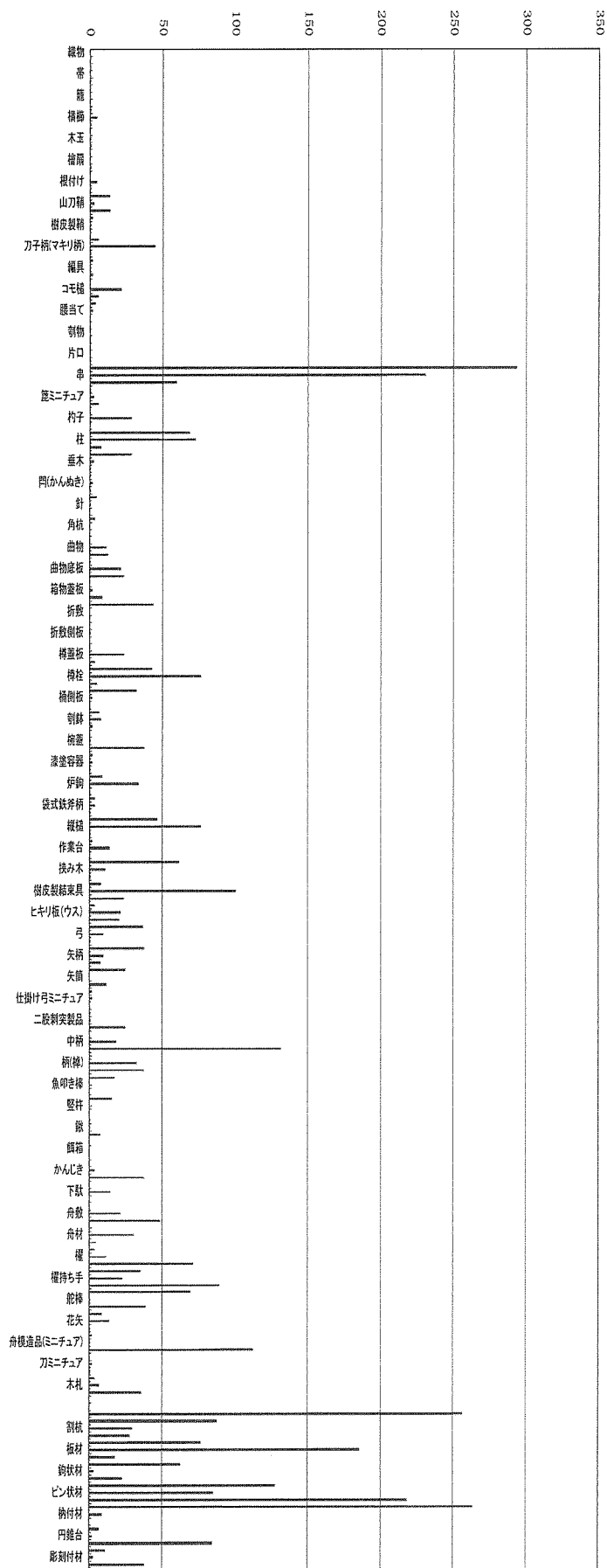
第2図 北海道内出土木製品の種類別点数グラフ (資料数:27 遺跡, 7,420 点)



第3図 擦文文化期の種類別出土点数グラフ
(資料数；21遺跡，2,049点)



第4図 中世（アイヌ）文化期の種類別出土点数グラフ
(資料数；4遺跡，809点)



第 5 図 近世(アイヌ)文化期の種類別出土点数グラフ (資料数; 7 遺跡, 4,562 点)

分類1	分類2	分類3	器種名	日常生活・習慣	生業1 (漁撈・狩猟)	生業2 (農耕)	信仰・祭祀・儀礼	外交・交易
				A	B	C	D	E
小集団 A 個家族	家 a 衣	1 編・織物	1 編物、織物、敷物、袋、網、背負子紐、籠、箆など	○				○
			装身具	○				○
			嗜好具	○				○
			携帯具	○	○		○	○
			紡織具	○				
		2 食用具	6 碗、剣物、容器、皿、片口、匙、箸、串、など	○				○
			調理具	○				
		3 建築具	8 建材、柱、棟木、桁、梁、垂木、梯子、門、屋根縫針、杭類、板類など	○	○			
			家財具	○			○	○
			工作具	○				
			結束具	○				
			発火具	○				
中集団 B 個家族集落	労働 b1 生業	4	狩猟具		○			
			漁撈具		○			
			採集具				○	
			農耕具				○	
			家畜用具	○				○
	移動 b2 陸上	5	歩行具	○				
			馬具	○				
			運搬具	○				
大集団 C 家族集落	習俗 c 習俗	7	祭祀・儀礼具				○	
			慣習具	○			(○)	
			移入品	○			○	○
集団間 D 集落クニ	交易 d 交易	8	24 檜扇、漆器、曲物、箱物、剣物、結物、木札、竹製品、横櫛、煙管など					
			25 素材	○				○
その他 E	加工材 e 加工材	9	未製品 廃材					
			用途不明材	(○)				

第3表 テーマ別分類表

	擦文	2049	中世	809	近世	4562
A 日常生活・習慣	798	38.95%	383	47.34%	2378	52.13%
B 生業1（漁撈・狩猟）	280	13.67%	153	18.91%	921	20.19%
C 生業2（農耕）	8	0.39%	5	0.62%	28	0.61%
D 信仰・祭祀・儀礼	88	4.29%	71	8.78%	274	6.01%
E 外交・交易	107	5.22%	63	7.79%	515	11.29%
	1281	62.52%	675	83.44%	4116	90.22%

A 日常生活・習慣	798	62.30%	383	56.74%	2378	57.77%
B 生業1（漁撈・狩猟）	280	21.86%	153	22.67%	921	22.38%
C 生業2（農耕）	8	0.62%	5	0.74%	28	0.68%
D 信仰・祭祀・儀礼	88	6.87%	71	10.52%	274	6.66%
E 外交・交易	107	8.35%	63	9.33%	515	12.51%
	1281	100.00%	675	100.00%	4116	100.00%

第4 テーマ別木製品出土点数

鍋と玉 ―山丹交易の様相―

越田賢一郎（北海道埋蔵文化財センター）

はじめに

中世「日本国」の北端：「外が浜」＝蝦夷ヶ島を外国として認識

近世も道南の和人地を除き同様の取り扱い

北海道（「蝦夷ヶ島」）の位置づけ：「日本国」との境界及び北方への窓口

山丹交易成立の背景

東北アジアへの東アジア世界の拡大とヨーロッパ諸国進出の影響

- ① 7世紀の東北アジア 唐朝の成立→靺鞨の活動・朝鮮半島の再編→渤海建国
- ② 13世紀の東北アジア 元朝のアムール川河口への進出（金朝の活動を継続？）
- ③ 15世紀の東北アジア 明朝の衛所制 奴兒干都司設置
- ④ 17世紀の東北アジア ロシアの進出と清朝の辺民支配制度の確立

I 鉄鍋

1 北海道における鉄鍋流入と生活の変化

- ・ 東日本と北日本の「内耳鉄鍋」（図1-1）
- ・ 擦文土器の終焉、竪穴住居から平地住居へ、かまどから囲炉裏へ
- ・ 交易依存の時代へ

日常的生産活動と交易品生産活動の両立：狩猟・漁労具の改良（鉄製の普及）→社会体制の変化と結びつくのでは

2 樺太（サハリン）とアムール河下流域の内耳土鍋と鉄鍋（17世紀以降）

- ・ 17世紀以降の状況
文献と民族調査から
- ・ 陶磁器の分布と鉄鍋の分布
鉄鍋流通圏は陶磁器流通圏よりも広い
- ・ 内耳土器の意味
- ・ 鉄鍋の不足
大陸側からの鉄鍋 『明実録』、『柳辺紀略』の記載
貂皮と鍋との交換
- ・ アムール河下流域における現代の鉄鍋の様相（図1-2）
19世紀まで遡れるか
- ・ 山丹交易の見返り品としての鉄・鉄鍋

II 玉

1 近世アイヌ文化の装身具

- ・ 本州とは異なる装身具文化の存在とガラス玉の利用
タマサイ、シトキ、耳飾り

2 蝦夷ヶ島のガラス玉（図2）

余市町大川遺跡

恵庭市カリンバ遺跡

釧路市幣舞遺跡

3 山丹交易とガラス玉

- ・ 東北アジアのガラス玉

博山のガラス工房

墓の副葬品

- ・ 貂皮交易とガラス玉の流通

『寧古塔紀略』の記事と日本側の文献

- ・ ロシアからの玉の流入

4 本州からのガラス玉の流入

- ・ 本州の玉作り

- ・ 本州のガラス玉の蝦夷地流入と場所請負制度、幕府蝦夷地直轄

おわりに

中世から近世にかけての蝦夷ヶ島をめぐる交易網（図3）

- ・ 蝦夷ヶ島から本州へ

水産品、毛皮類、山丹交易品（蝦夷錦、青玉、鷹の羽根）

- ・ 本州から蝦夷ヶ島へ

鉄製品（鍋、太刀、刀子、ナタ、針など）、銅製品、陶磁器、漆製品、衣類、酒、
タバコ、米、みそなど

- ・ 本州から大陸へ、大陸から本州へ

ラッコ毛皮、コンブ、ナマコなど（長崎俵物）⇔陶磁器、銭、ガラス玉

- ・ 蝦夷ヶ島からサハリン、大陸へ

鉄製品、漆器、毛皮類など

- ・ サハリン、大陸から蝦夷ヶ島へ（山丹交易）

山丹錦（蝦夷錦）、青玉、鷹の羽根など

☆北蝦夷（樺太）と蝦夷ヶ島（北海道）の果たした役割

樺太における明の衛所制と清の辺民制度の確立

松前藩、江戸幕府の山丹交易介入 密貿易から公式交易へ

黒船来航時に函館がなぜ開港したのか？ 対ロシアだけでなく北太平洋対象

青森・岩手・福島の鉄鍋：1~12

北海道の鉄鍋（道央 [日高]・道東）：13~20

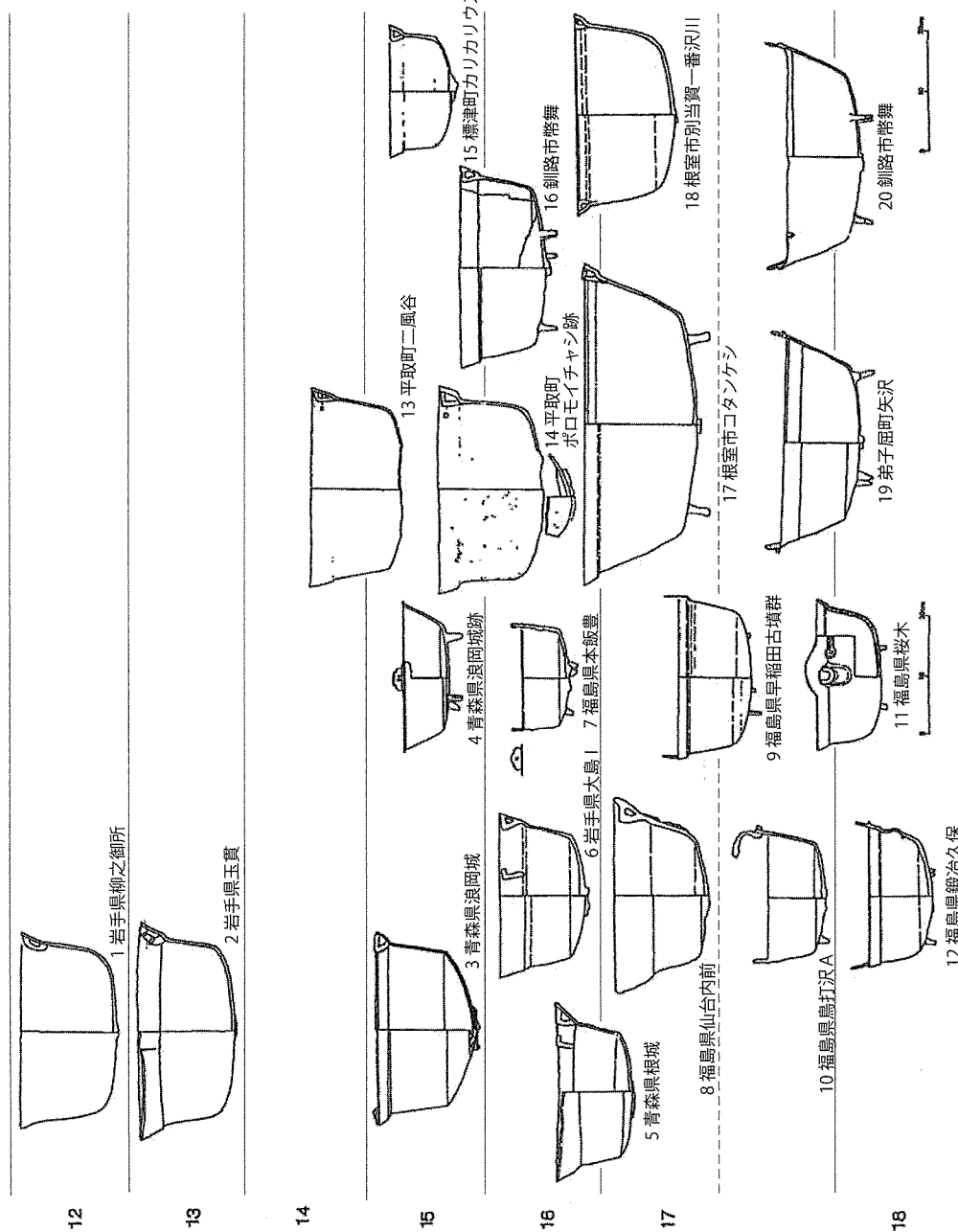


図 1-1 東日本と北日本の鉄鍋

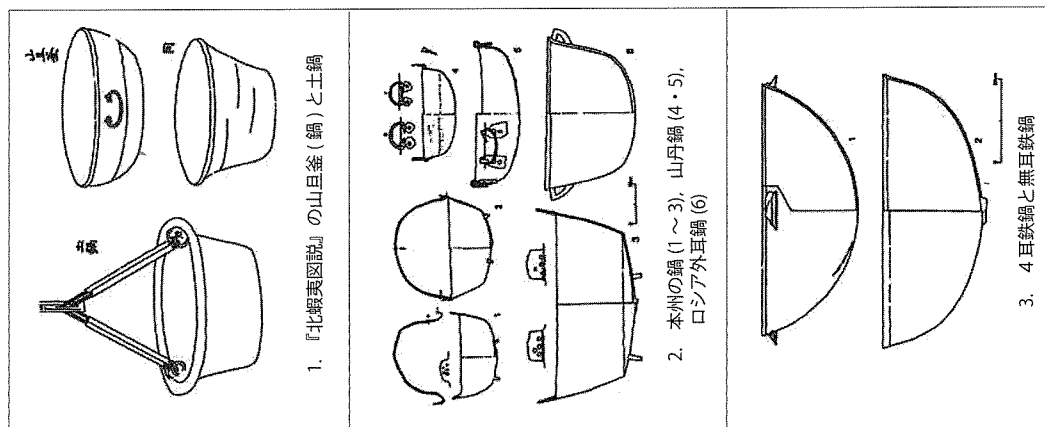
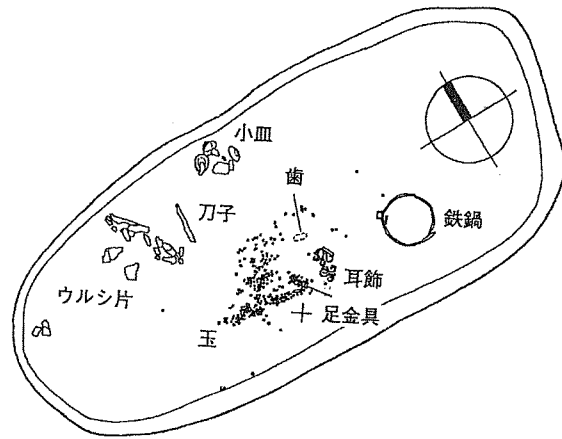
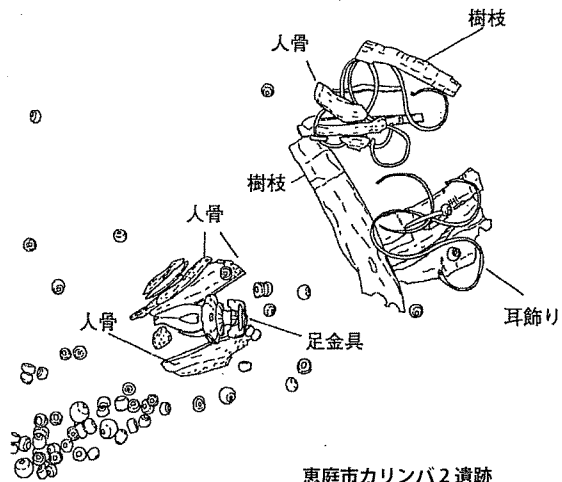
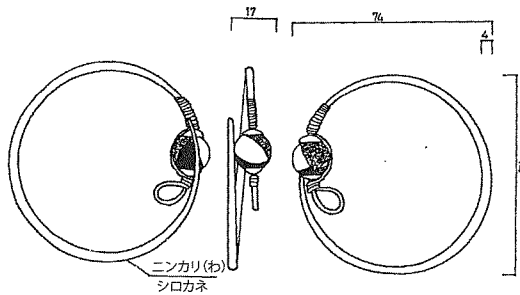


図 1-2 アムール河下流域の鉄鍋

シトキ 萱野茂『アイヌの民具』より



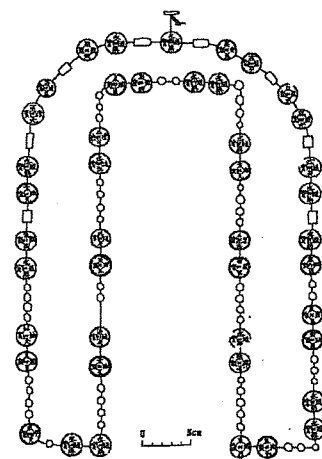
ニンカリ (耳飾り) 萱野茂『アイヌの民具』より



恵庭市カリンバ2遺跡



『三国通覧図説』シトキノ圖



釧路市幣舞遺跡 43 号墓出土の玉と古銭

図2 ガラス玉

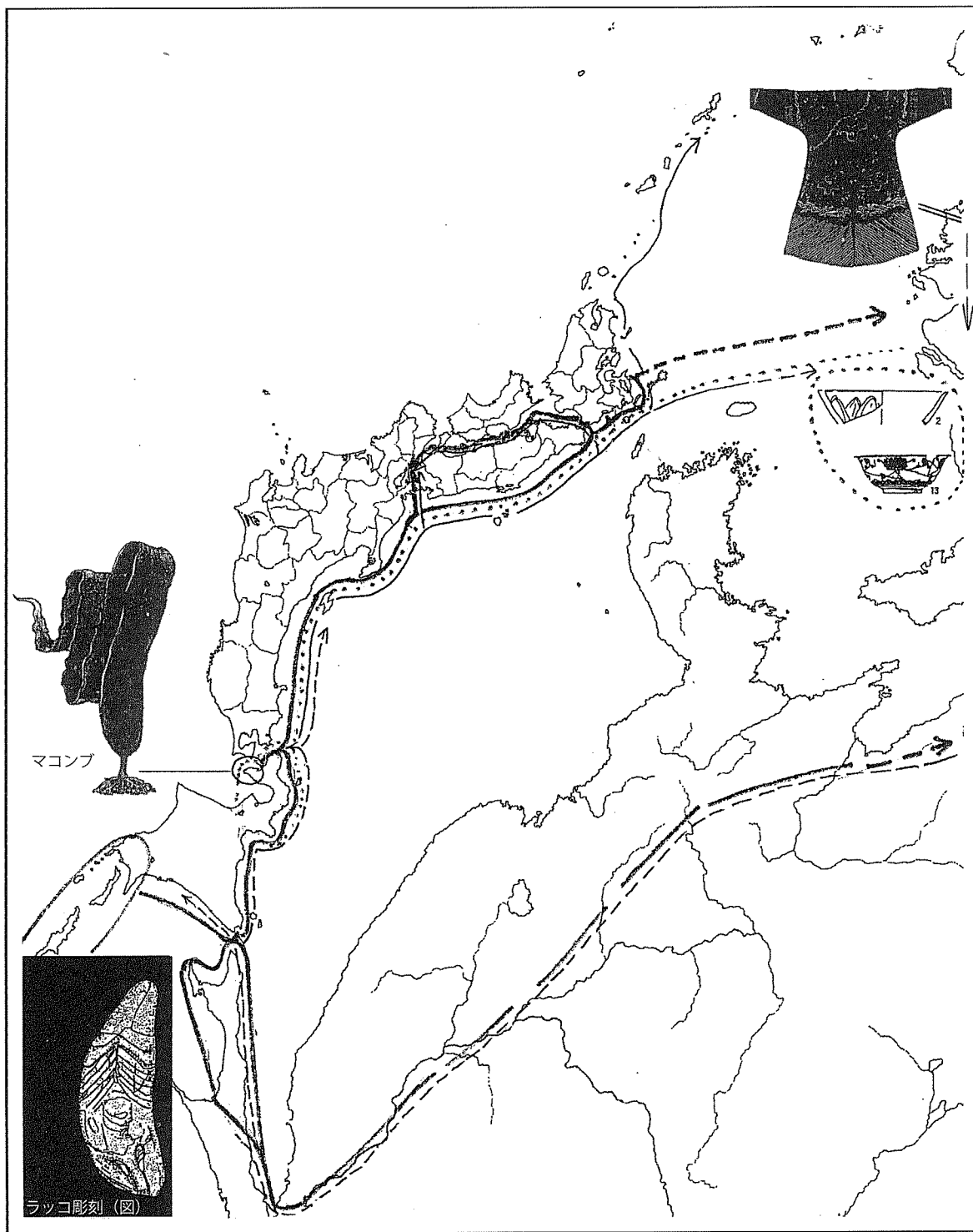


図3 北海道と大陸を結ぶ「もの」の動き

東北北部におけるアイヌ化を考える

小野裕子 (北海道大学総合博物館)

I. アイヌ文化形成過程における画期

鉄鍋を含む交易対価の高い和産品への需要が交換材獲得への努力を高めたであろうことは夙に指摘されてきた。天野は擦文期とアイヌ期の集落分布の特性（大井 1984）の背景に両者の生産方式における違いを想定し、擦文期では共同的な生産方式であるのに対し、アイヌ期では『売れ筋』の産物を求めて各コタンさらには家族単位に分散して生産に「そし」む方式への転換が図られたと見ている。しかも、後者の分散的なあり方は、「土地の優先的利用権の設定」を前提として成立すると考えられることから、このような土地とその資源に対する個別的な利用権の確立をもって、擦文文化とアイヌ文化の「画期」とすることを提起している（天野 2006）。

II. 「アイヌ」化における地域性

だが、この「画期」は主として北海道本島における擦文文化とアイヌ文化の比較を通じて導き出されたものである。周知のようにアイヌ集団は北海道本島以外に、東北北部、サハリン、そして千島列島に分布していたが、それらの前身である擦文文化は地域的に様相を異にすることが明らかになっている（天野 1987、瀬川 1996・1997）。しかも、東北地方では土器の廃用が遅くとも 12 世紀前半を降らず、同地における擦文式土器も道内の最終段階のもの以前で終焉を迎えることが知られている。このことから言えば、所謂アイヌ化への変化は、道内に先駆けて東北北部において開始されたと考えねばならないことになる。これはアイヌ文化の本質を考える上で非常に興味深い問題である。受け皿である擦文文化の地域的違いを土台としてアイヌ文化への転換が図られたとすれば、その後知られるアイヌ文化における地域性との関係が問題となるし、また逆に、アイヌ文化としての共通性はそれらの違いを超えてどのように醸成されたのかなど、地域性にまつわる問題はアイヌ文化の形成と展開の実態を明らかにする上で重要な意味を持つ。ここでは、道内に先駆けて「アイヌ化」が進行したと考えられる奥羽地方を対象に、アイヌの居住域はどこなのかという最も基本的な問題を考えてみることにしたい。

III. 東北地方北部におけるアイヌの居住域

17 世紀の青森北端部におけるアイヌ社会の存在については、浪川の研究がある。図 1 に見るように、津軽半島や夏泊半島、下北半島に近世アイヌ社会・アイヌ民族が存在し、幕藩国家体制の元で「狄」として編成されつつ伝来の生業活動を営んでいた（浪川 1992）。これを遡る時期については、女鹿が下北の貝塚出土の銚頭、中柄等の骨角製狩猟・漁撈具から、下北における中・近世のアイヌ社会の存在を説いている（女鹿 2006a・b）。

また、最近関根は、青森県下のアイヌ関連遺物を挙げ、それらがほぼ 14 世紀以降である一方、近世期の遺跡として明確なものが僅かであることを指摘している（関根

2007a)。

「14～15世紀」に比定される浜尻屋貝塚はクロアワビ主体の通年居住集落と推定されているが、非アイヌ文化的な遺物とアイヌ的な遺物が共に出土している（工藤 1999、浜尻屋教育委員会 2004）。中世においてこの下北が安藤氏の知行地に含まれていたことは先行研究で明らかにされており（豊田 1970、小口 1988）、蝦夷管領としての安藤氏の配下に「えぞ」が含まれていたことも早くに指摘されている（遠藤 1976）。従って、

浜尻屋貝塚に見られるアイヌ的な遺物は、その操業主体をどう見るかはさておき、女鹿の指摘するように、安藤氏所領のアイヌが同貝塚において漁撈・採集に関与していた可能性を認めて良いと思われる。

他方、ガラス玉などから中世であることが確実視される遺跡には（関根 2007b）、図1に見るように城館が多く、浪岡城跡の調査で指摘されているように（遠藤他 2004：480）、アイヌの城内での居住が認められるものの、勝山館とは異なり（松崎他 2001）少数に止まっている。従って、これら平野部の河川流域に立地する城館周辺は、中世段階には基本的にアイヌの通常の集落が設けられる場所ではなかったと見て良いだろう。

考古学的には、少なくとも古墳時代以降、東北北部においては「続縄文式土器」や「擦文式土器」のように、東北地方各地の土師器とは明確に異なる土器群が認められ、それらのうちには在地の製作・使用と考えられるものが少なからず存在している。これら土器群の製作・使用者が、土師器を伴う製作・使用者と異なることは言うまでもない。そして、北海道では、「続縄文式土器」、「擦文式土器」の製作・使用者は、基本的にはそのまま「アイヌ文化」に繋がってゆく人々であるので、東北北部における「続縄文式土器」、「擦文式土器」の製作・使用者もまたアイヌに繋がる人々として良いだろう。14世紀半ばの「諏訪大明神絵詞」に描かれている「^{えぞ}蝦夷蝦夷」＝アイヌは（これについては今まで異論はないので同義として良いであろうが）、従って、東北北部において「続縄文式土器」・「擦文式土器」を製作・使用した集団の子孫ということになる。

しかし、東北北部においては、道内のように「擦文式土器」の分布域がそのままアイヌ文化に移行する訳ではない。周知のように東北北部における「蝦夷（エミシ）」の居住域は、律令国家による長期の征夷行動の結果、その北辺に縮小される。だが、この律令国家の直接支配の外にあった地域においても土師器を伴う集落が多数存在しており、それらと共にあった「擦文式土器」を伴う集団が如何にして「アイヌ」文化への変容を遂げたのかを考

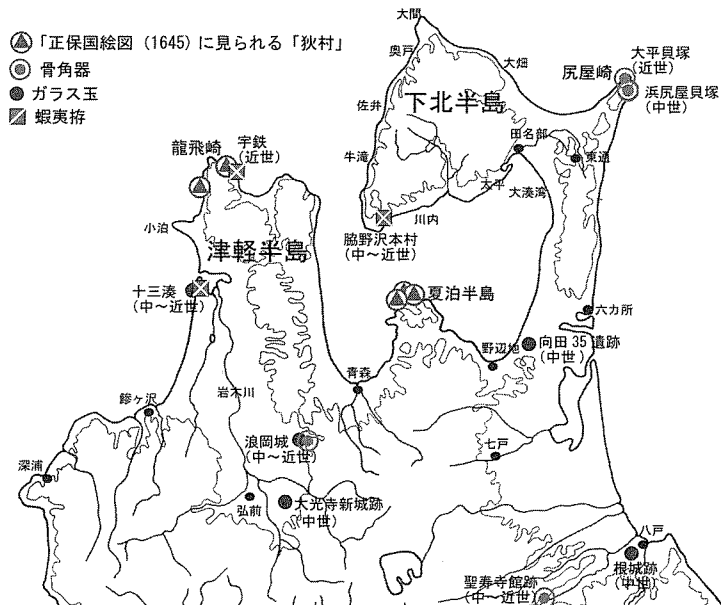


図1 青森の中近世アイヌ関連遺跡（浪川 1992，関根 2007 より）

えるためには、古代後期以降の東北北部の集落動向を通して、これら地域社会の変動を捉える必要がある。

Ⅲ. 東北北部の古代における地域間の変動

三浦は、津軽地方の集落数が9世紀中葉から後葉に激増し、約43%は9世紀後半～10世紀前半のものであることを明らかにした(三浦2007)。しかも、増加地域が、陸奥湾沿岸地域、岩木川水系中流域、浅瀬石川・平川流域に集中し、岩木川下流域や日本海沿岸部は比較的少ないことから、水田稲作のための適地が選択されたと推定している。

さらに、竪穴住居に外周溝が巡るか、あるいは、掘立柱建物が連結し、さらに外周溝・外周堤が付随する特殊構造の建物(B型)」に注目し、5つに細分して(図2)、地域的な有無や出現時期を比較した。その結果、津軽地方には、雄物川流域と米

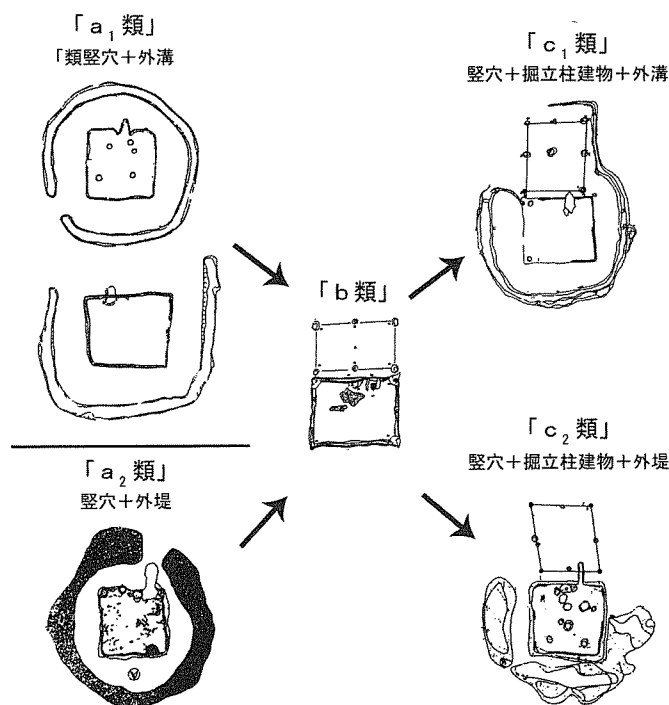


図2 特殊構造住居の分類(三浦2007に加筆)

代川流域からの2つの流入経路があり、前者からの人の移住は9世紀後半に生じ、岩木川中流域や陸奥湾沿岸を主な対象とする相当規模のものであったことが判明した。これは熊田氏が指摘した元慶の乱(878)に先立つ「公民」の奥地への逃亡記事に見合うものである(熊田2003:251)。他方、米代川流域からの移住はこれらに半世紀ほど遅れて生じ、その流入先が津軽日本海側に限定されていたことも明らかとなった。また、上北地域など青森県の太平洋側は、陸奥湾や岩木川流域とは基本的に独立した動きをし、津軽の土器が、9世紀前葉以降、10世紀前葉にかけ雄物川流域の影響が強いものに対して、奥入瀬川左岸には北陸由来の砲弾型丸底甕が分布するものの、すぐ南の馬淵川流域には見られず、後者が北上川流域の影響下にあることと符号する結果となった。このような青森県域を中心とする王朝国家期の集落動向は、その地にあった蝦夷集団に大きな影響を与えたことは必定で、アイヌ化の問題を考える上で極めて重要な意味を持つ。そこで次に、「擦文式土器」を伴う遺跡群と、これら古代後葉の集落動向の関わりを検討してみることにはしたい。

Ⅳ. 古代後葉における東北北部の「擦文式土器」製作・使用者の生活拠点

図3は、齋藤の「擦文式土器」出土遺跡と「区画集落」分布(齋藤2001・2007)に、三浦の特殊構造住居「B型」の分布を重ねて作製したものである。齋藤の「区画集落」は所謂「防御性集落」、や井出の「環壕集落」(井出2007)と基本的に同じである。時期に

つについては10後葉～11世紀を中心とするが、下限については高屋敷館の事例もあり(青森県教育委員会編 1998)、少なくとも12世紀前葉頃までを含む。この時期の特殊構造住居はほぼ「b類」のみになっており、それと入れ替わるように「区画集落」が分布するが、9世紀後半以降の東北北部における地域間の大規模な人口変動の結果であり、新たな外部からの流入ではない。

図3に見るように、「区画集落」の分布は岩木川流域、陸奥湾岸、上北、下北田名部通り、そして八戸周辺に分けられ

るが、これらのうち「擦文式土器」の稠密な分布と重なるブロックは岩木川流域、陸奥湾岸、下北田名部であり、八戸周辺や馬淵川流域ではいずれの時期の擦文式土器の分布も見られない。これに関して三浦は、同流域における集落数の激減や集落全体が火災を受けている遺跡などを挙げ、宝亀5年(774)に始まった「38年戦争」やその後の「内国移配」により馬淵川流域にあった蝦夷集団が壊滅的な打撃を受けた可能性を示唆している(三浦 前出:195)。その場合、新たな集落は、前代の蝦夷集団・社会とは関係をもたない移住者が配置されたと考えられる。同流域の「区画集落」や土師器に見られる陸奥国やそれ以南の北関東的な特色もこれを裏付ける。つまり、馬淵川流域は、「蝦夷」からアイヌへの変容の起こりえない地域に変貌していたのである。

天野が既に指摘しているように、東北北部において擦文式土器を主体とする竪穴住居址は極めて僅かで、しかも下北半島に限られることから(天野 1987:535)、岩木川流域や陸奥湾周辺の多数の擦文土器は、「区画集落」内に(逗留はしても)生活の本拠を持たない、外部からの来訪者であったことが知られる。その目的も既に指摘されているように、鉄製品や穀類を含む交易(天野同上:538)であったことは出土遺物から疑いない。では、その生活の本拠はどこに求めることができるだろうか。

図3に戻ると、岩木川流域や陸奥湾周辺、下北半島などでは、「区画集落」の分布と「斎藤Ⅳ類・Ⅴ類」(図4参照)の「擦文式土器」の出土遺跡はかなり良い対応を示すが、土

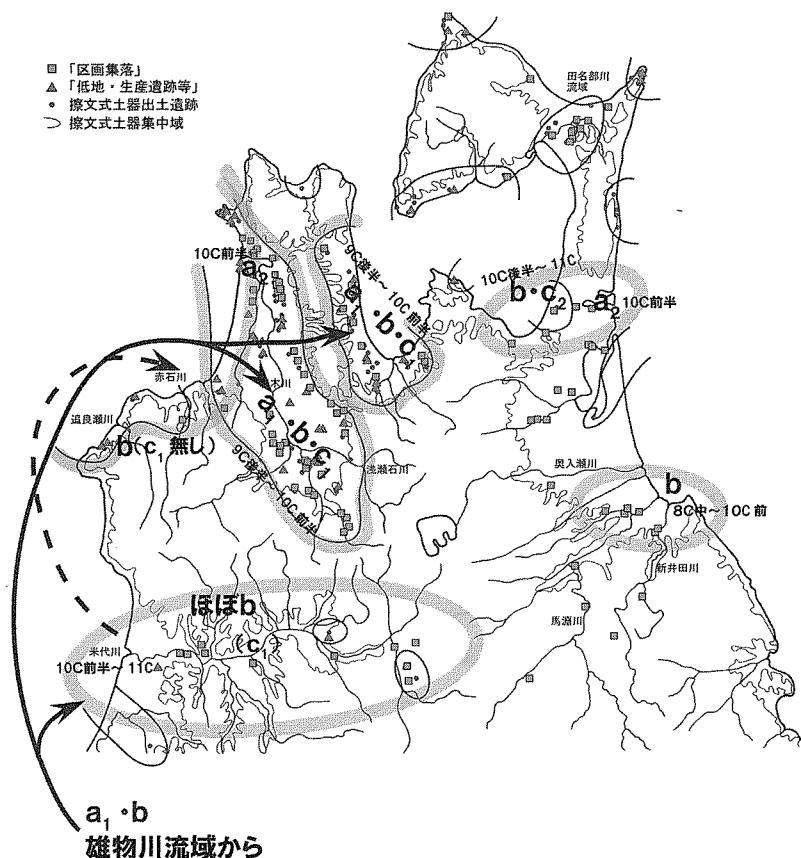


図3 東北北部の地域間変動と「擦文式土器」出土遺跡ならびに「区画集落」
(齋藤 2001・2007, 三浦 2007 より作製)

師器を伴う竪穴住居や土壙などの、覆土や包含層からの出土である。一方、「低地・生産遺跡」における「捺文式土器」の分布が見て取れる。齋藤はこれら「低地・生産遺跡」には明確な竪穴住居を伴わず、竪穴遺構・井戸跡があり、土器や鍛冶関連遺物を伴う遺跡があることを指摘しているが、「区画集落」においても井戸跡や鍛冶関連の遺構や遺物が伴うことから見ると、岩木川下流左岸のこれら遺跡は、むしろ「捺文式土器」を伴う集団に係る遺跡と見て良いだろう。

「区画集落」がその生業基盤を水田稲作や畑作にしているとすると、津軽半島日本海側や下北半島海岸部に位置する「低地・生産遺跡」は、立地上漁撈を柱とすると見られる

点で異質である。岩木川河口部の農耕非適地における「区画集落」では交易が、また上北の非農耕適地では馬産が柱となる場合もあったことは、認めて良いだろうが、海岸部に点在する「生産遺跡」は「区画集落」と分布を異にする傾向が明らかで、しかもそこに「捺文式土器」を伴うものが相当数あることから推定すると、これら海岸部の「生産遺跡」もまた、「低地・生産遺跡」と同じく、捺文文化の集団のものである可能性が強い。

他方、陸奥湾西岸は、背後に丘陵を控え、可耕地面積は岩木川流域よりはるかに狭いにもかかわらず「区画集落」が林立している。これらの場合は交易拠点としての立地である蓋然性が高い。また、「齋藤Ⅲ類」の「捺文式土器」が集中する地域であることから、道内の「捺文集団」、それも馬蹄形圍繞貼付文土器で明らかにされた（豊田 1987）、石狩苦小牧低地帯から胆振・日高にかけての地域の「捺文集団」との交易の場所となっていたことが知られる。ただし、その時期については、「齋藤Ⅲ類」と岩木川流域に主要分布を示す「同Ⅳ・Ⅴ類」とが、若干の併行時期を持つものの基本的には時間差を持つこと（天野・小野 2007、小野 2007）、そして「同Ⅳ・Ⅴ類」は、東北北部では少なくとも 12 世紀前葉頃までは「区画集落」を形成していた在地集団と関係を持ち得たことから言えば、「同Ⅲ類」はそれに続く時期に陸奥湾西岸一帯に集中していたことになる。この時期に「区画集落」の主体を含めたその実態がどのようなものに変化していたかは現時点では不明であるが、その集中域が、奥州藤原氏の奥大道の北端にあたること、そして「同Ⅲ類」の時間的位置から見て、藤原氏の北方交易に関連する捺文集団があるとすれば、まさにこの「Ⅲ類」を伴う胆振・日高から道央部の一帯に分布するグループに求めることができよう。

これに対し、「齋藤Ⅰ類」、「同Ⅱ類」の捺文式土器は、下北半島沿岸部を中心に、岩木川中・下流域や岩木山西麓にも少数ながら分布している。下北津軽海峡沿岸は、道内との渡海箇所としての利便性のみならず、図 1 に見たように中近世の本州アイヌの遺跡・集落が存在する地域である一方、「区画集落」にみる在地集団の居住・生活圏の外に位置して

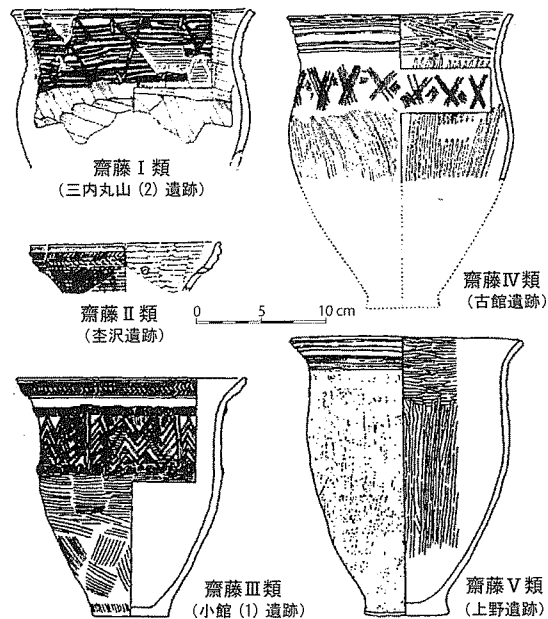


図 4 東北北部の捺文土器分類（齋藤 2002 による）

いることから、基本的には下北にあった擦文集団が本州アイヌへと連続する地域として良いだろう。片や岩木川中・下流域の「斎藤Ⅳ・Ⅴ類」と重なる「同Ⅱ類」については、ほぼ B-Tm 降下以降と見られる資料からなり、三浦の指摘にあるように岩木川流域への移住者の定住時期に重なることから、これら新興の開拓者との交易を目的とした進出であったことが窺える。しかし、同地域ではこれに続く時期に、型式論的に直接繋がらない「斎藤Ⅳ・Ⅴ類」が展開するので、図 3 に示したような特殊構造建物「b」を伴う移住最終段階から「区画集落」の展開期にかけては、道内を本拠とする「斎藤Ⅱ類」（「東大編年Ⅱ後半」）に直接繋がる一団は、従来の交易場所から閉め出されてしまったように見える。

道内では「東大編年Ⅲ」土器群が「同Ⅱ後半」に連続するが、東北北部に展開するのは「斎藤Ⅲ類」の馬蹄形圍繞貼付文をもつローカルな 1 群であり、その時期は先のように「区画集落」の衰亡期以降である。これらから推定すれば、「斎藤Ⅲ類」を伴う道央から胆振・日高地域にかけての集団は、道内他地域の「東大編年Ⅲ」土器群を伴う集団と、東北北部との交易の仲介をする関係にあったらしい。

このように見てくると、特殊構造住居に示される出羽側からの移住者の流入と、その後の「区画集落」への変貌の過程において、東北北部にあった「擦文集団」は、これら土師器を伴う農耕・交易民の動向と否応なく関わっていたことが窺える。陸奥湾周辺の場合は、「区画集落」及びその後続者には交易拠点としての利用であり、その間隙を縫うように「擦文式土器」を伴う遺跡が残されている。道内からの「斎藤Ⅲ類」を伴う集団は交易目的の滞在であるが、馬蹄形貼付文を上下に持つなど在地製作と見られる「同Ⅲ類」を伴うグループは、周辺の海浜や低位丘陵先端部での生業活動が可能であったことが窺える。下北半島においては、「区画集落」が集中する田名部通を除き、「擦文集団」が専ら利用出来る場所であったらしい。以上から、この東北北部における「擦文文化」の集団は、下北半島から陸奥湾周辺、あるいは津軽半島西側の西浜から^{へなし}艦作崎にかけての沿岸部に多く残され、岩木川流域では、斎藤の指摘するように、当時においては水田稲作不適地であった下流部低地や岩木山西麓に存在していたようである。

V 東北北部における「アイヌ化」

東北北部の「擦文集団」の生業基盤は、その遺跡立地からみて漁撈・採集・狩猟であり、遺跡によっては雑穀栽培や鍛冶も行っていたと見られる。それが多数の農耕民が生活圏に流入し、村落を設けて定着したことにより、従来は城柵へ出向いて饗給を通じて入手していた品々が、移民との直接的かつ恒常的な交易の場が出現したことにより容易に入手できる状況が生まれた。従って、中世アイヌへの変容は、東北北部においては在地の和人系移民との直接的かつ不断の交渉の中で進んでいったと考えられる。

その際に、道内で推定されたような家族単位の生産力の増強を窺わせるような集落分布の変化は現状では捉えることが出来なかった。立地的にそうしたあり方が可能と思われる馬淵川流域は、9 世紀にかかる以前にそこにあった「蝦夷」社会が完全に崩壊し、陸奥国等からの移住者が居住する地へと変貌していた。遅くとも 12 世紀前葉には東北北部の地にも郡郷制が施行され、在地農民には各種の租税が課されたので、東北北部の「擦文集団」

の持っていた各種のイウォルは、そうした農民との間で競合・侵食を受けた可能性がある。

海岸部における「擦文文化」の生産遺跡の分布（図3）からは、遺跡相互がある程度の距離をもって残されていることが看取できるが、それらが津軽における近世アイヌのレプン・イウォル（海漁場）（浪川 1992：80）の原型であった可能性はあろう。本州アイヌの漁撈・狩猟活動については、浪川の研究を踏まえ、関根が考古資料と近世文書を駆使して具体的に描いているが（関根 2007）、和人との漁場の競合や上納目的に沿った狩猟・漁撈活動の変化などが生じていた。

東北北部の「擦文集団」においては、交易対価を求めてその生産力を増強させ、交易民として十分に成長する余地が、古代末から中世初期にかけての政治的動向の中で、道内よりも早く、かつ大きく、制限されたように見える。しかしながら、その中にあっても本州アイヌとしての文化的変容を道内より一足早く遂げていたとすれば、交易を梃子とした脱「擦文化」にも、交易相手との地理的・政治的関係や、対アイヌ交易を支える列島の流通システムの発達との関係などに応じたプロセスの違いを認めねばならないだろう。その上で、そうした違いを超えて蝦夷＝アイヌとしての括りが醸成されていった経緯を明らかにしてゆくことが、異民族を抱えた国家というものの本質を考える上で必要な作業であろう。

引用文献

- 青森県教育委員会編（1998）『高屋敷館遺跡 浪岡バイパス建設工事に伴う発掘調査報告』青森県埋蔵文化財調査報告書第243集
- 天野哲也（1987）「本州北端部は擦文文化圏にふくまれるか」『考古学と地域文化』同志社大学考古学シリーズⅢ pp.529-544
- 天野哲也（2006）「アイヌ文化形成の諸問題—歴史教育におけるアイヌ文化の意味」天野哲也・臼杵 勲・菊池俊彦編『北方世界の交流と変容 中世の北東アジアと日本列島』pp.122-133
- 天野哲也・小野裕子（2007）「擦文文化の時間軸の検討—道央、北部日本海沿岸域と東北北部の関係—」前川要編『北東アジア交流史研究—古代と中国—』塙書房 pp.241-268
- 井出靖夫（2007）「10・11世紀東北北部における集落区画の意義」天野哲也・小野裕子編『古代蝦夷からアイヌへ』吉川弘文館 pp.219-239
- 遠藤 巖（1976）「中世子かの東夷成敗権について」『松前藩と松前』9:1-23
- 遠藤 巖・工藤清泰・木村浩一（2004）『浪岡町史』第2巻 浪岡町
- 大井晴男（1984）「擦文文化といわゆる『アイヌ文化』の関係について」『北方文化研究』15:1-201
- 小野裕子（2007）「擦文文化後半期に関する年代諸説の検討」天野哲也・小野裕子編『古代蝦夷からアイヌへ』吉川弘文館 pp.391-418
- 小口雅史（1988）「津軽安藤氏の虚像と実像」『津軽十三湊の人文・自然科学的総合研究』昭和六二年度教育学内特別経費報告書 弘前大学 pp.5-33
- 工藤竹久編著（1999）『東通村史—遺跡発掘調査報告書編一』東通村教育委員会

- 熊田亮介（2003）『古代国家と東北』吉川弘文館
- 齋藤 淳（2001）「津軽海峡域における古代土器の変遷について」『青森大学考古学研究
所研究紀要』4:1-29
- 齋藤 淳（2007）「北奥における生業活動の地域性について」天野哲也・小野裕子編『古
代蝦夷からアイヌへ』吉川弘文館 pp.240-286
- 瀬川拓郎（1996）「擦文文化の終焉ー日本海沿岸集団の形成と日本海交易の展開ー」『物
質文化』6:1-19
- 瀬川拓郎（1997）「擦文時代における交易体制の展開」『北海道考古学』33:19-26
- 関根達人（2007a）「本州アイヌの生業・習俗と北奥社会」長谷川成一・関根達人・瀧本
壽史編『北方社会史の新視座』第1巻 清文堂 pp.219-251
- 関根達人（2007b）「本州アイヌの考古学的痕跡」澤登寛聡・小口雅史編『アイヌ文化の成
立と変容ー交易と交流を中心としてー』法政大学国際日本学研究所 pp.653-678
- 豊田 武（1970）「東北地方における北条氏の所領」『東北大学日本文化研究所研究報告』
別巻7所収
- 豊田宏良（1987）「擦文土器にみる貼付圍繞文様の分布 ー馬蹄形押捺文を中心としてー」
『遡航』5:59-82
- 浪川健治 1992『近世日本と北方社会』三省堂
- 浜尻屋教育委員会 2004『浜尻屋貝塚 ー平成12年度～14年度発掘調査報告書ー』
- 松崎瑞穂・松田輝哉編（2001）『上之国勝山館跡』XXII 上ノ国教育委員会
- 三浦圭介（2007）「津軽地方における古代社会の変質とその様相ー特に9世紀後半から10
世紀前半にかけての変質についてー」天野哲也・小野裕子編『古代蝦夷からアイヌへ』
吉川弘文館 pp.190-218
- 女鹿潤哉（2003）『古代「えみし」社会の成立とその系統的位置付け』『岩手県立博物館
研究報告書』18
- 女鹿潤哉（2006a）「下北アイヌ社会の成立過程についての研究」『岩手県立博物館研究報告』
23:1-44
- 女鹿潤哉（2006b）「下北アイヌ社会の成立についての一考察」『北海道考古学』42:93-108

H19 年度文部科学省特別研究促進費研究成果公開事業シンポジウム
中世日本列島北部～サハリンにおける民族の形成過程の解明

—市場経済圏拡大の観点から—

(研究代表者 北海道大学 天野哲也)

北海道大学総合博物館土曜市民セミナー／道民カレッジ

発行者：馬渡俊介

発行所：北海道大学総合博物館

〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目

Phone：+81-11-706-3900

Fax：+81-11-706-4029

E-mail：amano@museum.hokudai.ac.jp

<http://www.museum.hokudai.ac.jp/>

印刷：北海道大学生協同組合 印刷・情報サービス部

(〒060-0810 札幌市北区北8条西8目クラーク会館内)

オホーツク文化と靺鞨文化の交流 —靺鞨・女真系銅帶飾の伝播を中心に—

吉林大学辺疆考古研究センター 王 培新

1. オホーツク文化から出土する銅帶飾の系譜

モヨロ貝塚 長方形銅帶飾 1 点、 $5.8 \times 4.3 \times 0.2\text{cm}$ 。鳥首形紋がないことを除けば、帶飾板の文様は査里巴 18,31 号墓出土の Ca 型 ($6.5 \times 4.1 \times 0.2\text{cm}$) と同じである。

円形銅帶飾 2 点、直径 6.2~6.5cm、6.1~6.4cm。文様は査里巴 31 号墓出土の B 型円形銅帶飾 (全長 7.1cm、直径 5.7cm、厚さ 0.2cm) の円形部と同じである。

栄浦第二遺跡 7 号竪穴住居から長方形銅帶飾 1 点が出土。下部は欠損し、 $4.8 \times 4.9\text{cm}$ 、頂部に突起がないほかは、文様は楊屯上層 11 号墓出土の A 型および査里巴 31 号墓出土の B 型長方形銅帶飾と同じである。

目梨泊遺跡 同じ様式の長方形銅帶飾 5 点 (モヨロ貝塚出土のものと同じ)、 $5.8 \times 4.3 \times 0.2\text{cm}$ 。鳥首形紋がないことを除けば、帶飾板の文様は査里巴 18,31 号墓出土の Ca 型 ($6.5 \times 4.1 \times 0.2\text{cm}$) と同じである。

オホーツク文化出土の銅帶飾の系譜は、粟末靺鞨・渤海系統に属する。

2. 靺鞨・女真系銅帶飾の伝播経路と形式

黒竜江流域出土の長方形銅帶飾の多くは D 型と E 型に属し、年代は 10~12 世紀であるが、少数のものは松花江流域に分布する A 型と B 型にきわめて近似している。円形銅帶飾の中にも松花江流域の円形銅帶飾に似たものが見られる。ドゥボーヴァエ墓地出土の 1 点の長方形銅帶飾は、査里巴墓地の Cb 型に類似したところがある。黒竜江流域出土の、松花江流域の器形に類似した銅帶飾は、両地域の交流の結果である。

ナイフェリト墓地 ロシアのユダヤ自治州に位置し、1960~1961 年に 40 基の墓が発掘され、9 号墓から 1 点の A 型長方形銅帶飾が出土した。この墓地の年代に関し、旧ソ連の学者はこの墓地が靺鞨のものであるという前提の基に、歴史上の靺鞨の存続期間を根拠にして、5~7 世紀と推定した。しかし墓から出土する陶器その他の遺物の形態を分析すれば、この墓地の年代は 6 世紀末~7 世紀初めとすべきである。

ドゥボーヴァエ墓地 ロシアのユダヤ自治州に位置し、1975~1976 年に計 21 基の墓が発掘され、A 型と Cb 型に類似した長方形銅帶飾が出土している。この墓地の年代は、お

おむね 9~10 世紀末である。

ナデジンスコエ墓地 ロシアのユダヤ自治州に位置し、1970~1973 年に 115 基の墓を発掘した。論文に引用されている内容から、銅帯飾の出土はかなり多く、B 型と D、E 型が含まれている。墓地の年代は 10~11 世紀末である（咸平元寶が出土）。

トロイツコエ墓地 ロシアのアムール州に位置し、1969~1974 年に計 280 基あまりの墓が発掘されたが、96 号墓から 2 点の A 型円形帯飾が出土したのみである。墓地の年代は 8~9 世紀である。

これまでのところ、靺鞨・女真系銅帯飾が出土した年代が最も早い遺跡は、松花江流域の楊屯上層墓と査里巴墓地である。楊屯上層墓と査里巴墓地から出土した銅帯飾の類型は豊富であり、長方形は A、B、C 型を、円形は A、B 型を主としている。黒竜江流域の遺跡で出土する、楊屯・査里巴墓地で主体となる類型に似た遺物は、松花江流域から伝わってきたものとするべきである。

唐代には、黒水靺鞨は渤海と対抗していたものの、両地間の交流は決して中断しておらず、文献には渤海と黒水靺鞨およびその他の靺鞨各部が、共同で唐に朝貢したという記載も見られる。渤海と靺鞨の間には、広い交流の道が存在していたのである。

渤海政権と唐・日本はつねに頻繁な交流を保持しており、渤海の朝唐使および遣日本使の主要な使命の一つは即ち物資の貿易であった。朝貢を通して、渤海は唐から大量の下賜を得ることができ、遣日本使も同様の状況であった。朝貢形式の貿易以外にも、さらに渤海使は唐と日本において互市交易を行った。朝貢貿易は渤海政権の上層にのみ限られていたのではなく、朝唐使および遣日本使の一行にはしばしば靺鞨各部の首領も含まれており、貿易の規模は拡大化する趨勢にあった。そのため日本の朝廷は渤海使の来朝人数と年限を制限し始めた。

渤海は地元の物産をもって朝貢している。すなわち文献記録の“献方物”である。文献記録の内容から分析すると、菊池先生が指摘しておられるごとく、貂皮は其中でもっとも歓迎された方物であった。研究によって、貂皮は渤海遣日本使が携帯した主要な方物でもあり、日本の貴族層からも非常に歓迎されたとされている。朝貢貿易には大量の毛皮動物と珍重される動物資源が必要であったため、渤海国では民間から大量に集めなければならず、国内で需要が満たせないときには、民間は交易を通じて黒水靺鞨地区から得たかもしれない。朝貢貿易により引き起こされた地域間交流は、必然的に多くの種類の物資の交換および多くの階層の人的交流をもたらしたであろう。

渤海と黒水靺鞨の間で、もっとも簡便な道は即ち松花江中下流域の川沿いであり、この一帯は地勢が平坦で、水路の便もある。この地域はまた名馬を豊富に産出し、早くは南北朝期に勿吉が中原政権へ馬を供したことがある。良好な交通環境と輿馬行舟の伝統を備え持っていたことは、松花江中下流域の粟末靺鞨集落を、黒水靺鞨との交流の主要な担当者

にさせたのである。同時に、松花江中下流地帯は黒水靺鞨の唐への朝貢の道でもあり、これもまたある程度両地の間の交流を活発にした。

黒竜江流域で出土する靺鞨・渤海系統の銅帶飾で、松花江流域の楊屯・査里巴遺跡出土の銅帶飾と同じあるいは近似するものは、遺跡の分布が松花江と黒竜江の合流点付近に多く集中している。楊屯・査里巴とナイフェリト・ドゥボーヴァエ・ナデジンスコエは、この交通ルートの起点に位置しているようである。

オホーツク文化の遺跡から出土する銅帶飾の系譜もまた、靺鞨・渤海系統に属するものであるが、靺鞨文化とオホーツク文化の交流は、黒水靺鞨に帰属させるのがもっとも適当である。松花江流域の粟末靺鞨と黒竜江流域の黒水靺鞨は交流が頻繁であったので、オホーツク文化の遺跡から出土する銅帶飾も、黒水靺鞨を仲介して伝播したのであろう。

つまり、渤海国および靺鞨各部の朝貢貿易の需要により、靺鞨各部の間で交易の行き来が増加し、各地の名産・珍奇な物品などが続々と渤海国上層および部族の首領の掌中に集まり、そしてこれらを方物として、唐に朝貢し日本に遣使することによって錦絲絹帛などの高級紡績品および金銀器などの奢侈品を得ていたのである。

3. オホーツク文化出土の銅帶飾の年代分析

オホーツク文化の遺跡から出土する長方形銅帶飾と、楊屯・査里巴墓地の銅帶飾の主要な様式は基本的に同じである。上述の中国出土の銅帶飾の年代を基に推測するなら、オホーツク文化の遺跡から出土する銅帶飾の流行した年代はだいたい7~8世紀となる。東北アジアの地域間交流の活発になる段階が渤海の時期であることを考慮すると、銅帶飾がオホーツク文化に流入した時期は、8~9世紀であろう。

モヨロ貝塚出土の大陸系銅製品の中で、長方形銅帶飾は86号人骨の副葬品、円形銅帶飾は貝塚採集品である。銅鐸の出土状況は不明だが、遺物は金代の器形である。もし銅帶飾と銅鐸が共存するなら、銅帶飾の伝世使用現象が存在することになる。

柴浦第二遺跡では、長方形の銅帶飾はオホーツク文化後期(8~10世紀)の7号竪穴住居から出土しており、銅帶飾の年代と出土遺構の年代は一致している。

目梨泊遺跡では長方形銅帶飾5点、半円形銅帶銙1点、銅鐸1点が出土している。目梨泊遺跡は墓から出土した蕨手刀および土器から、その年代が8~9世紀と推測されており、出土した銅帶飾の流入年代と同じである。半円形銅帶銙を中国の考古資料より判断すると、この種の形式の帶銙が東北地区で主に流行するのは渤海国の時期であり、年代は8~10世紀初めである。これにより、目梨泊遺跡から出土した半円形銅帶銙は、長方形銅帶飾および墓の年代と基本的に同じということになる。出土した銅鐸は女真~金代の器形であり、年代は11~12世紀である。

目梨泊遺跡の半円形銅帶銙と銅鐸は表土層より出土し、銅帶飾は盛り土の攪乱層から出土していることから、遺物どうしおよび遺物と遺跡の関係は不明である。もし銅帶飾・銅帶銙・銅鐸が共存するなら、銅帶飾と銅帶銙を伝世使用していた状況が存在する。

靺鞨・女真系銅帶飾を伝世使用する現象は、ドゥボーヴァエ墓地とナデジンスコエ墓地

で見られる。ドウボーヴァエ墓地の年代はだいたい 9~10 世紀末であり、出土した円形銅帯飾下部にはすでに鈴をつけるための孔が出現していて、D 型の長方形銅帯飾と作風が一致し、年代は 10 世紀に位置づけられるものの、出土した A 型の長方形銅帯飾は流行した年代が 7 世紀である。

ナデジンスコエ墓地の年代は 10~11 世紀末であるが、その中の 12 号墓からは B 型と D、E 型の長方形銅帯飾が出土している。B 型の長方形銅帯飾の流行年代は 7~8 世紀であるが、D 型と E 型の長方形銅帯飾の年代は 10 世紀以降である。

銅帯飾と銅鐸は本来シャーマンの腰帯の装飾と腰鈴であり、銅帯鏝は輿服制度における袍帯上の身分標示物である。オホーツク文化の遺跡から出土する銅帯飾および大陸系の銅製品は、数量が少ない上に系列立てられていないため、その用途はあるいは既に変化が生じていたかもしれない。

冶金技術が発達していない文化では、伝来してきた金属製品はその本来の用途を変えることがあり、あるいは祭祀の用具としてその神通力を発揮し、あるいは威信の象徴物となり、あるいは財産の標示物となる。例えば、東北系青銅器と漢魏銅鏡が日本へ伝来したのは、みなその本来の実用品としての機能を失い、青銅短剣・戈・矛は器形の変化が生じて祭祀の道具となり、銅鏡は威信財へと変化して大量に副葬された。出土状況から推測すると、オホーツク文化の大陸系銅製品もまた、まとめて祭祀の道具とされて長期間使用されていたのかも知れない。